
ゼロ戦才人 外伝 第1部

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ戦才人 外伝 第1部

【Zコード】

N4507E

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

このお話は、現在3部目に突入したゼロ戦才人本編で語りきれなかつたキャラ達の動きを書いたサイドストーリーです。もちろん、原作から大きく逸脱する可能性があるのでご注意ください。

盗賊の転職 上

トリステインの貴族たちを震撼させた盗賊『土くれのフーケ』、本名マチルダ・オブ・サウスゴータは魔法学院内にあるという『破壊の杖』を盗むために、オスマン校長の秘書としてロングビルを名乗り魔法学院に潜入した。そしてついに『破壊の杖』を盗み出した。

ところが、その『破壊の杖』の正体は異世界の兵器であるロケットランチャード、ハルケギニアの人間が使い方を知るはずが無かつた。彼女はその使い方を知るために罠を強いたのであるが、逆に自分が捕まるという犯罪者としては最悪の失態を犯したのだ。

そして結局彼女は今学院内の一室に軟禁され、首都トリスターニアからやつてくる衛士に身柄を引き渡される事となっていた。しかし、捕まつてから2週間しても衛士はやつてこなかつた。その代わりに現れたのは一人の老人だつた。

その日も、マチルダは軟禁されている部屋で暇な時間を送つていた。杖を取り上げられているために逃げ出す事も出来ず、もちろん魔法も使えない。そして捕まつているから仕事などという物もない。彼女に出来るのはただベッドに腰掛けて、頭の中で様々なことを考えるだけだつた。

そんな中、食事の時間でもないのに扉が開いた。

いよいよ衛士が連行しに来たのかと思い、彼女は身構えた。しかし、警備の人間に挟まれて入ってきたのは1人の老人だつた。しかも、平民である。

「あなたが『土くれのフーケ』ですか？お初にお目にかかります。私は平賀才吉と申します。」

その名前に、マチルダは大いに聞き覚えがあつた。

「平賀？もしかしてあの使い魔君の？」

「その通りです。私はあなたを捕まえた平賀才人の曾祖父です。」

マチルダは思ったことをそのまま口にする。

「その使い魔君の曾お爺さんが一体私に何のようかしら？」

「実はあなたにお願いがあつてきました。聞く所に寄れば、あなたは高度な土魔法操るそうですな。実は今私、いや我々は鍊金が出来る優秀な土系統のメイジを探しているのです。そこであなたをスカウトに来たのです。我々の仕事に是非協力して欲しい。」

最初マチルダは、目の前の男の頭がイカレテイルのではと思った。自分は犯罪者で、首都への護送を待つ身なのだ。そんな人間をスカウトするなど正気の沙汰ではない。

それを察知したのか、才吉は続けて言つた。

「ちなみに、この仕事を手伝つてもらつのなら、あなたの犯罪の一切をうやむやにしても良い事になつています。」

「えー？」

さすがにその言葉にマチルダも驚きを隠せなかつた。

「そんな、一体どうやつて……」

「簡単なことです。実は……」

オ吉はマチルダに最近のトリステイン周辺の状況を話した。それを捕まつてから3週間、外界との繋がりが途絶したマチルダにとつて、久々に聞いた外の情報だった。

オ吉の話すところでは、2週間ほど前にアルビオンでついに王室政府が倒され、革命政府のレコン・キスタが国内を掌握したという。その結果ウェールズ皇太子はトリステインに亡命したが、レコン・キスタは勢いに乗つてトリステインに侵攻する兆しがある。

「そこで我々が持ち込んだ飛行機という武器でレコン・キスタ軍に戦う事になりました。しかし、この飛行機という機会はガソリンという液体を使用しなければ動けないので。ガソリンは地中深くから掘り出すか、鍊金で作るしかありません。だからあなたに声をかけたのです。」

話を聞いて、マチルダはどうしようかと思った。ここから出られてしかも過去の罪を問わないというのは大いにメリットがある。しかし、彼女はかつてアルビオン王室によつて辛酸を舐めさせられた人間である。その王室に協力するというのも気が引ける。おまけに今の彼女にはアルビオンのウエスト・ウッドに残した義妹たちを養うだけのお金を稼ぐ必要があった。

そこで彼女が考えたのは、ここは一端引き受けて、杖を返された所で隙を見て脱出するという方法だ。もちろんそれはオ吉への裏切りとなるが、そんなこと知つたことではない。

しかし、そんなことを考へていた彼女は、オ吉が次に言つた言葉によつて再び驚愕する事になる。

「ちなみに給料ですか……です。」

「はい！？」

マチルダは耳を疑つた。オ吉の言つた額は彼女が今望んでいるに等しい額だったからだ。

「本当にやみなこもらえるの？」

「もちろん。これはアルビオン王室が保証する形でトリステイン王室から出しでもらえる事となつています。ただし、ちゃんと働いてもらわねばの話ですが。」

マチルダに再び迷いが生まれた。オ吉の言つた通りの話ならもう裏の仕事などする必要がないということだ。罪もちらりで、充分なお金をもらえるというのは、願つたりかなつたりの話だ。しかし、やはりアルビオン王室のために働くというのは少しばかり気が引ける。

彼女の頭の中に天秤があらわれ、過去の確執か、それとも田の前の現金と自由を取るかで揺れる。

数分ほど悩んだが、彼女は決断した。

「わかったわ。お手伝いさせてもらひます。」

田の前の現金と自由を選んだ。

「おおー…うですか、感謝しますネ…。」

「けど、本当にそんな高額な給料が出るの?出なかつたら本当に逃げるけど。」

まだどこか信じきれないという表情をするマチルダ。

「もちろんですとも。ちゃんと証拠の書類もあります。」

オ吉は持ってきた鞄を開けて、中から数枚の書類を出した。

マチルダはその書類に目を通す。確かにオ吉が言ったとおりの内容が書かれていた。しかも、それら書類にはちゃんとトリステインとアルビオン王室の押印がされていた。つまり、本当ということだ。

「信じていただけましたか?」

「ええ。」

「それでは、2・3日してから来でもらいます。ちなみに仕事をしてもらうのはトリスターニア近郊に造った工場です。順調に行けば明日か明後日にはあなたは釈放されます。そしてそのまま馬車が指し回されますのでそれにお乗りください。」

「わかったわ。」

マチルダが頷いた。

「では、私はこれで。」

そう言つと、才吉は書類を閉まつて部屋から出て行つた。しかし、最後に何かを思い出したように振り返つた。

「ところで、あなたを何と呼べば良いでしょつかな？まさかフーケさんと言つわけにもこきませんし。」

すると、マチルダは素直に名を名乗つた。

「マチルダ・オブ・サウスゴータ。それが私の本当の名前よ。」

マチルダが名乗ると、才吉が笑みを浮かべて言つ。

「マチルダさんですね。良い名前だ。わかりました。それではお待ちしています。」

そう言つて軽く会釈すると、才吉は部屋から出て行つた。

「の翌日、才吉の言つていた通り、マチルダは釈放された。ただし、人目につかぬように、それは早朝に行なわれた。彼女はまだ夜も開け切らぬ早朝、部屋から出され、学院の正門前に停車していた馬車に乗り込んだ。

盜賊の転職 上(後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

盗賊の転職 中

スカウトされたマチルダが工場で任されたのは、才吉の説明にあつたとおりガソリンの鍊金による製造だつた。それを朝から晩まで、他にスカウトされた数人のメイジたちと行なうのだ。

工場自体は、ハルケギニアのそこかしこにある小さな工場より少し広い程度であつた。しかし、内部の感じは大きく異なつていた。そこら中の柱や壁に「火気厳禁」、「安全第一」（もちろんハルケギニア語で）と書かれており、また屋根のあちこちに白い変な物（才吉がもち込んだ火災報知機）が付けられている。何より、ガソリンという液体の放つ独特の臭いが強烈だつた。

また、働き出す前に雇用契約だと言つて色々な書類にサインさせられたのも、マチルダたちには初体験だつた。といふか、そのような概念はハルケギニア世界には存在していなかつた。

とにかくガソリンを作り始めたのであるが、最初の頃、マチルダ達にはこんな物を鍊金してどうするんだろう？という疑問が強かつた。一応飛行機の燃料というふうに説明をされてはいたが、機械文明とは程遠いハルケギニアの人間では、どうしても想像に限度がある。

そして1人のメイジがその疑問を才吉に対し言つと、彼は「じやあ見せてあげるよ。」と言つて全員を工場の外へと連れ出した。

ちょうどその日、工場の外には「H-60」ヘリが飛んできていた。

「Hのヘリコプター」という機械も、諸君らが作ったガソリンで動く。

今からそれをお見せしよう。」

ちなみに、この頃はヘリやゼロ戦に燃料を給油するのはそれなりに苦労する物だった。現代地球のように電動ポンプなどという便利な物が無く、すべて手動ポンプで行なわなければいけなかつたからだ。

その作業を行なつたのは、ヘリコプターを操縦する2名の搭乗員、清水一尉と山田三尉だ。2人はガソリンが入つた樽からホースを繋ぎ、そして手動ポンプを回して燃料をヘリに入れた。

その作業が終わると、ようやくエンジンを始動させた。その光景を見ていたマチルダたちは驚きを隠さなかつた。本当にあんな液体を入れるだけで動くことに、少しばかり不信感を抱いていたからだ。加えて、上の風車みたいな物（プロペラの事）を回すだけで宙に浮くことも彼らには驚天動地の出来事だった。

まあとにかく、こうして工場で働くメイジたちは、自分たちが鍊金で製造している謎の液体の使用用途を理解したのであつた。

ところで、この時の話には続きがある。その日の夕方、マチルダは仕事を終えて、オ吉が用意した宿舎へと帰ろうとしていた。すると、工場の影で立つてゐる男の姿があつた。西日のせいで顔はよくわからなかつたが、その男は手に持つた何かで火をつけているようだつた。

工場の外は一応火気厳禁というわけではないが、それでも危なくないわけではない。マチルダはその男に近づいた。

「ちょっと、そこあなた！ここは火気厳禁よ……！」

マチルダが注意すると、男は振り向いて謝つてきた。

「あ、すいません。ちょっとタバコを吸いたかったもので。」

そう言って振り向いた男の姿に、マチルダは大いに見覚えがあつた。ハルケギニアではめずらしい黒い髪、見たこともない奇妙な服（これは自衛隊のパイロットスーツ）。脇にヘリコプターに燃料を入れていた男の1人だ。

「あら、あなた確か昼間いたわよね？」

「ええ。ヘリコプター・パイロットの山田明雄二尉です。よろしく。あなたは？」

パイロットや二尉と言われてもマチルダには意味が理解できるはずも無かつたが、とりあえず彼の名前は理解できた。

「タバコで働かせもらつているマチルダよ。」

そう呟乗ると、マチルダは田の前の男をもう一度眺めた。歳は四分と同じか、1~2歳年上ぐらじだろう。

「タバコを吸うなら、他の場所でしてくださいね。」

「やうします。それにしても、あなたみたいな若くて綺麗な女性が工場で働いているなんて、本当に意外ですね。」

明雄はそれを正直、誉めたつもりで言つたのだが、ハルケギニアで生まれ育つたマチルダはそうは受け取らなかつた。

「あら？ 今の言葉は嫁に行き送れた人間への当て付けかしら？」

そんなつもりは毛頭なかつた彼は、その返答に少しばかり狼狽してしまつた。

「ま、まさか。 なんでそつなるんですか？」

すると、マチルダが言い返す。

「だつて普通はそつでしょ？ 嫁に行くのは20歳までにいつの
が慣例じやない。 私は23だもん。 普通に行き送れよ。」

それに対して、明雄は面食らつてしまつた。一応言葉が通じてい
るから良いものの、日本とハルケギニアの文化や考え方の違いはや
はり大きかつた。

「こちらの常識じやそつなんですか？ けど、俺たちの世界じや、普
通にみんな30過ぎで結婚してましたよ。 俺だつて25ですけど、
未だ独身だし。 まあ、気分を悪くされたのなら謝りますけど。」

実際マチルダは気分を害していた。いくら他人の国の常識ではよ
くても、やはり人間自分の文化で物事の常識を測つてしまつた。

「まあ別に良いけど。」

一応はそつ言つたが、明らかに声には不快感が混ざつていた。

「そんな声で言われても説得力がないんですけど・・・じゃあちよつ
としたお詫びです。これあげますよ。」

そう言つて彼が懐から差し出したのは、銀紙に包まれた黒い塊だった。

「何それ？」

「チョコレートといつお菓子です。」

ハルケギニアにはチョコレートは存在しない。そもそもカカオの原産であるアフリカや南米にあたる地域があるかすら判つていないのだ。

マチルダは恐る恐るその塊をとつて、口に含んだ。

「苦い。けど、これはこれでおいしいかも。」

マチルダは、地球での大人向けの味をそれなりに氣に入ってくれたようだ。それを見て、明雄も一安心した。

「氣に入つていただけて良かつたです。」

「うん。ありがとう。といひで、あなたさつきからどうして敬語で喋つてゐるのや?別に普通に話せば良いよ。」

「ああ、そう。いや、なるべく初対面の人には敬語を使つよう心がけているもんで。」

「そうなの。」

それからしばらく2人はお互のこと喋りあつていた。

「それじゃあ、自分はやることがあるのでこれで。話が出来て乐しかった。」

「私も、じとなにお喋りしたのは久しぶり。」

「なら良かった。それと、わざわざ言つた事は本当ですかね。あなたは綺麗で若いから、歳のことなんて気にする必要ないよ。」

「えー？」

そして2人は分かれたわけだが。マチルダは少しばかりそのままその場に立ち尽くしていた。魔法学院にいた時や、泥棒稼業をしていた時は、若い男性と会うことなどほとんどなかつた。つまり、先ほどの様な言葉を掛けられることもなかつた。だから今回が初体験だつた。

これがマチルダの心に、何かが芽生えた時だつた。

盗賊の転職 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

予定ではマチルダの話は次話で終え、その後コルベールの話をす
る予定です。

その後は未定ですが、タバサが義勇軍に接触する話とか、オリキ
ヤラたちが地球へ行くとか、色々考えています。

盗賊の転職 下（前書き）

注意！－この話ではもう原作を大きく逸脱、といふか無視したような内容が含まれています。原作正統派の方は読まない方が良いと思います。

それでも良いとこつ方はどうぞ。

マチルダと明雄の2人は、それからちょくちょく会つみづになつた。その頃は別にお互い恋愛としての認識は全くしていなく、あくまで同世代で話しやすい相手としか見てていなかつた。

ただ回数を重ねていくうちに、徐々に2人の距離は狭まつていつた。

特に何かきっかけがあつたわけではない。ただ自然に付き合つているうちに、友人という関係から恋人という関係に変化し、そして夫婦という関係へ発展していった。

アルビオン解放戦争が終わつてからしばらくして、マチルダは明雄からプロポーズを受けた。もちろん彼女には断る理由などなく、それを受け入れた。

その後もしばらくの間、ハルケギニアは騒がしかつた。今度はガリアとゲルマニアが突如としてトリスティンとアルビオンに宣戦布告し、約1年に渡る戦争となつた。それとともに起きたガリア王室とゲルマニア皇室に対する内戦とロマリアの介入がその戦争の混乱を助長させた。

さらに、この戦争が終結すると今度は聖地を巡つての一騒動が起きた。これはほんのわずかな人だけが関わつたことであつたが、その後のハルケギニアの運命を左右する上での重大事であつたことは間違ひなく、5年後に各省政府によって正式に発表された時には大いに話題となつたものだ。

それら戦乱に明雄の所属する義勇軍は出撃し、異世界からもたらされた近代兵器との世界の魔法を融合した戦法で、幾度となく敵軍に大打撃を与えた。そして、小国トリステインを勝利の道へと誘った。

戦争が終わり、世の中が落ち着いた所でようやく2人は正式な結婚式を上げることが出来た。

その後もハルケギニア世界は大きく動き続けた。新大陸の発見や急速な科学技術の向上。そして異世界からの継続的な技術流入など、おそらくこの世界がこれまでに体験したこともないような大革新の連続だった。

「そしてそんな時代にあなたたちが生まれたというわけね。」

昔話を喋り終えると、今年40歳になるマチルダ・オブ・サウスゴータ・ヤマダはお茶を一口呑んだ。

椅子に座っている彼女の前には、机を挟んで3人の子供たちが座っていた。2人の女の子と1人の男の子。双子姉妹であるエリカ（恵理香）とソフィア（空飛亜）、そして山田家長男のイサオ（勲）である。

山田家の子供達は、今母親から両親の昔話を聞いていた所であった。

上の双子姉妹は14歳、長男は12歳。いろいろな事に興味をも

つ年頃であるが、そんな彼らは母親をせかして、両親の馴れ初め話を聞きだしたのである。しかしながら、色々すゞいことを聞かされて、彼らは困惑していた。

まず母親があのトリステインを騒がした「土くれのフーケ」であったこと。彼女の存在は現在、半ば伝説化している。彼女の話は貧しい人々をいたぶる貴族を出し抜いた手口から、広く市民に愛され今やラジオドラマや小説の主人公にさえなったその名を知らない人はいないぐらいだ。

そんな、異世界の某大怪盗の3世をなのる大泥棒のアニメキャラに匹敵するハルケギニアの女盗賊が目の前の人間と聞かれても、信じられなかつた。

「ええと、お母さん。その話は本当なんでしょうか？」

長女のエリカが尋ねる。すると、フーケは微笑みながら言い返した。

「エリカ、私が嘘を言つたことあるかしら？」

すると、彼女は黙り込んでしまつた。実際、目の前にいる母親は嘘などつかない。だからこそ周りの人からの信頼厚く、現在サウスゴータ市市長をしているのだ。

「けど、お母さんがフーケだったなんてとても信じられませんわ。」

そう言つのは次女のソフィアだ。彼女にとつて、自分の母親がフーケであつたことなど、異世界が存在する以上に疑問符がつくことだつた。もつとも、これは異世界の存在が正式に確認されているか

らだが。

一方、マチルダの方は夫との出会いとかは無視して、そつちに注目されたことに少しばかり複雑な想いを持ちながら答える。

「別に信じたくないなら信じなくとも良いわよ。」

フーケはそう言って彼女の疑問に答えた。

ソフィアは目の前の母親のことをもう一度よく考えてみる。普段は温厚で、物腰も非常に貴賓に溢れているが、いざ夫婦喧嘩となると粗暴な言葉を連発し、父親に対して土魔法を炸裂させるなど、確かになんとなく信憑性があるような気もしてならない。それに、市長として市議会などで相手の議員を黙らせるのも得意であるのだ。

マチルダは顔を、黙つたままの息子に向けた。

「イサオ。あなたはどう思つの？」

すると、息子は笑顔で言つた。

「僕はお母さんがフーケであつたと思つよ。ただし、こんなこと誰かに言つても信じてもらえないとは思うけど。」「

歳のわりにしつかりしてこむと言われる息子ならではの答えだつた。

「そう。」

マチルダは息子の答えに満足したが、それに対して2人の娘がイ

サオに襲い掛かった。

「！」の一。」

「あんた弟のくせして生意氣よーーー。」

「痛い！痛い！やめてくれよ姉ちゃんーーー。」

「「「わるなここーーー。」」

「「「ううううう、暴力は振るつもんじやないわよ。」」

「「だつてーーー。」」

「だつてじやないの。」

そう言って、フーケは今の状況と、かつて自分が人を殺すようなことをしていたのと比べて、苦笑いした。

「「「？」」「」

子供達は、その苦笑の意味がわからず。母親を変な顔で見つめていた。

そんな中、家の外から車のエンジン音がした。

「あら？早いわね！？」

「「「お父さんだーーー。」」

まもなく家の玄関の扉が開き、青い制服を着こなした40代の男が入ってきた。

「ただいま。」

男、ハルケギニア王国連合空軍大佐の山田明雄が帽子を外しながら言つた。

「「「おかえりなさい!」」」

3人の子供たちが父親を出迎えた。もう10年近くもつづくこの家の恒例行事だ。明雄の職務は、ヘリコプター・飛龍連合部隊の司令官だ。1週間前からトリステインで行なわれた各空軍との合同救難演習に出かけていたために、帰つてくるのは明日のはずだった。

「お帰りなさい。早かつたわね?」

「ああ。天候の関係で実施を前倒ししたから。はい、これ。アイスランドのテファアさんから。郵便受けに入つていた。」

明雄が手紙を差し出した。現在電話の普及が進んでいるものの、トリステインと浮遊大陸のアルビオンとの間では個人宅のレベルまで整備がされておらず、連絡は現在も手紙に頼られている。

「それと、これはお前たちにだ。」

明雄は持っていた紙袋を子供たちに差し出した。大方中身は地球から輸入された何かだろう。彼らは早速中身を出して、分配を始めた。

「留守の間ありがとうございました。」

「ええ。子供たちにせがまれたから、昔話をしたわ。」

明雄はそのセリフに表情を変えないとなく言へ。

「そうか。みんな驚いただろ?」

「もちろん。信じられないって評定したわ。」

「そうだろうな。」

彼は微笑んだ。

「けど、俺たちがこうして結婚しているつていのも本當だったりえないことだったんだよな。」

「そうね。もし地球とこの世界がつながらなかつたら、私はいまごろどうなつていたか?」

「小説そのまんまに生きてたかもね。」

「そうかもね。」

そして2人は、お互いを見合つて笑つた。

盗賊の転職 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ちなみに、ヘリパイロットの2人の名字は戦国自衛隊（初版）からもらっています。それと、明雄の肩書の王室連合というのは、時雨沢恵一作のアリソンの中のスーパーイールをモデルにしています。

力を持つ者として

トリステイン魔法学院教師であつたジャン・コルベールが、王室から新設の科学研究所所長に任命されたのは、アルビオン解放戦争が終つてから1ヶ月ほどたつた時だった。

最初、自分はそのような器でないとして辞退しようとも考えた彼であったが、才吉や才人らの強い勧めもあって、引き受ける事にした。

校長のオスマンも、「教師が減るのはちとキツイが、君が全力を発揮できるのなら、私は温かく君を送り出そうと思う。」と言って彼を送り出した。

魔法が広く使われているハルケギニアでは、工学、化学、物理学などの研究が地球ほど進んでいなかつた。あつても極初步的な物に限られていた。

その状況を大きく打破したのが、才人を中心とする異世界から飛ばされてきた人間で構成された義勇軍の存在だつた。彼らは魔法を一切使わずに空を飛ぶ飛行機や、高性能の大砲を搭載して地面を走り回る戦車などで、トリステインとアルビオン（王室軍）を勝利に導いた。

彼らの扱う科学という力を活用せねば、ハルケギニア世界の発展は有り得ない。そう判断したトリステインのアンリエッタ女王と、ウェールズ国王によつて、今回両国に科学研究所が設けられることとなつた。

「コルベールが科学研究所の所長に任命されたのは、彼が魔法使いには珍しく、科学を研究している人間であつたからだ。

その他に集められたスタッフたちは、いずれもハルケギニア世界にはめずらしい科学やそれに近い物を研究していた人間たちだ。魔法が主流のこの世界において異端者扱いされてきた彼らに、トリスティンとアルビオン王室からの王命によつて召集がかけられた。

集められた人間は総勢10人。この10人が後に、トリステインとアルビオンを科学先端国に押し上げる原動力となつた人々だつた。研究所が設立されて1日目、その研究所を才吉たちが訪れた。開設のお祝いを言うのと同時に、あることを伝えるためであった。

「コルベール先生、いや今は所長でしたね。研究所開設おめでとうございます。我々は心から祝福いたします。また今後も出来うる限りの支援をあなた方に行なつていこうと思つております。」

まずは社交礼儀で挨拶する才吉。

「ありがとうございます。科学が進歩した世界から来たあなたの方の支援を受けられる事は、こちらとしても大変助かります。」

頭を下げて礼を言うコルベール。

「今は来月の観闘式に備えなければならないので余裕がありませんが、来月には落ち着くでしょう。その時には、あなたを地球へご案内したいと我々も考えております。」

「」の言葉に、コルベールは色めきたつた。

「本当にですか！？それは今の私にとって、何よりも喜ばしい事です。

」

「私としても、あなたのこれから研究に大いに期待しています。それがあなた自身にどつても最善の道であるとも考えてあります。」

「そうですね・・・」

コルベールは言葉に詰まつた。かつて自分が犯した罪と、アニエスから言われた事を思い出していたのだ。

あの時から時間は経つているが、未だに彼女とは和解していないし、また彼自身自分が採れる最善の道に疑問を感じていた。

コルベールがそんな事を考えていると、才吉が話題を変えた。

「ところで、実は今日こちらに参つたのは、お祝いを述べさせていただくものもありますが、実は今後あなたがた科学を扱う人々に是非とも見ていただきたいものがあります。」

「ほう。一体それは何でしょうか？」

「見ていただければわかります。おい才助に才人！例の物を準備しろ！」

才吉は2人に声をかけた。この時、才助は映像投影機を持ち、また才人は同様に再生用のパソコンを抱えて持っていた。

2人は手早くコードを繋ぎ、電源を入れ、さらに部屋の窓際のカーテンを全て閉めて映写の準備にかかりました。その作業も2人にとつては手馴れた物であるから、数分で完了しました。

「曾爺ちゃん、出来たよ。」

「おう。それではみなさん、座つてこちらのカーテンの方を見てください。」

才吉に言わされて、コルベールを含めて研究所の全ての人間が、映写された映像が映るカーテンに向かつて座つた。

「じゃあ才人、始めてくれ。」

「オーケー。」

才人はパソコンを操作して、映像を投影した。

この段階で何人が研究者は、「おお！」とびよめいたが、もちろん才吉らの目的はこんなことではない。重要なのはこれから彼らに見せる映像の内容なのだ。

ちなみに、これまでに才吉たちは、数本の映画などを持ち込んでこちらの人間に見てもらつたが、どういうわけかちゃんと中で流れる言葉は理解されていた。しかも、英語、フランス語、韓国語、どんな言語で流しても理解された。

そういうわけで、字幕こそ読めないものの、ハルケギニアの人間が地球製の映像を見るのにはなんの不都合もない。

そして画面にタイトルが映し出された。そのタイトルは「原子爆弾の実相 広島・長崎」

この作品は、才吉や才人らが、これまでに放送されてきたN・Kやその他のテレビ会社のドキュメント番組を無許可で編集した物であつた。思いつきり著作権を無視しているが、ここは異世界なのでそんなことは関係ないのだ。

映像が始まると、まず映し出されたのは原子爆弾のメカニズムと、開発の経緯、さらに投下までの経緯に関する物だ。

このあたりの映像は、はつきり言えば地球の歴史を習つた事などないコルベール他人間たちには、理解できない物が多かつた。ただし、この原子爆弾なるものが科学によつて作られた兵器であると、いふことだけは理解してくれたようだ。

そして場面は広島と長崎への原爆投下に映る。

凄まじい、太陽がもう一つ現れたかのような火球の発生と、それとともに巻き上がる巨大なきのこ雲。さらにCG映像ではあるが、街が一瞬にして吹き飛ばされていくシーンに、コルベールたちは息を飲んだ。

広島、長崎というトリスターニアよりも大きな街が、全長5メイルもない爆弾1発によつて灰燼に帰してしまなど、ハルケギニア人の常識からすれば考えられないことだ。

驚く彼らを他所に、映像はさらに進んだ。続いて映し出されたのは、原子の火を浴びた人々の映像、厳密には写真や被爆者が遺した

絵であるが、それを見ただけで何人かの人間は目を背けた。中には失神する者も出た。

場面が代わり今度は放射線に関するシーンに移ったが、それを見て、というより解説を聞いてコルベールたちは再び驚愕せざるを得なかつた。人や街を汚染し、死ぬまで体を蝕み続ける放射線障害など、もはや言葉も出ない物だつた。

映像が全て終わつた時、表情を変えず平静でいられたのはコルベール一人だけだつた。その他の研究者は呆然としたり、泣いたりしていた。

「これはなんと言つたら良いのか・・・正直恐ろしいの一言だ。あなた方の世界の科学はあのような悪魔を生み出したというのですが？」

「コルベールが才吉に問い合わせる。

「ええ。この映像の内容はその多くが再現映像、つまり後から造つた映像ですが、まぎれもなく、60年前に起きた事実です。幸いにも、この後使われることは有りませんでしたが。」

「むう。それであなたはこれを我々に見せてどうしようと・・・まあ大体の見当はつきますが？」

「ええ。私達はあなたがたに理解して欲しかつた。科学、いや魔法にも通じる事でしようが、その力の使い方を謝れば、生きる物をとんでもない地獄へ貶める可能性を含んでいる事を。力は、人間の心ひとつでどう使われるか決められる事を。」

オ吉が言つてゐるのは、当たり前のことは言える。しかし、オ吉の知つてゐる人間はこれを知りながら、幾度となく愚かな間違いを犯してきた。地球を数回壊滅させられる核と、地球自身を危機にさらしている環境破壊がそれである。

オ吉、オ人もふくめて、それを知つてゐる人間の共通の考え方。それは「地球での失敗をハルケギニアに持ち込まない。」ということだ。だから、今回原爆の映像を見せて、コルベールたちにそれを知つておいて欲しかったのだ。

「コルベール先生、我々の過ちを、この世界で繰り返さないでください。」

すると、コルベールは驚いた。

「わかりました。いや、そもそも私は人々のためにしか科学や魔法を使わないと肝に命じています。あなた方の想いを決して裏切りません。またここの人間にも、それを周知させることをお約束いたします。」

コルベールは、強い意志でそう言い切つた。

この翌週に書き記されたトリスティン科学研究所の規範には、永久条項として次のような物が存在した。

「科学や魔法といった力を扱つものは、人としての矜持と道徳を決して失つてはいけない。」

力を持つ者として（後書き）

今回はコルベールネタでしたが、作者の文章能力が追いつかず、なんとなく中途半端な長さになってしまいました。すいません。

御意見・御感想お待ちしています。

次回は・・・考え中です。タバサ編にするか、皆で地球に行く話にするか迷っています。

シエスタの休日 上

トリステイン王国の首都であるトリスターニア。その街中的一角に、それなりに名が通つた飲み屋があつた。店名は『魅惑の妖精亭』。料理も酒もなかなかで、なにより店で働いているウェイトレスが露出の過激なビスチェを着て働いているのも人気の理由の一つだつた。

店を経営しているのはスカラロンといふ名のオカマであるが、性格はそれなりに良し、客との関係は良好だ。また、その娘のジェシカは店内のウェイトレスの中でも高い人気を誇る黒髪の美少女だつた。

だがこの日、そのジェシカは店の一 角に座つて、ワインを何杯も煽る同世代の黒髪の少女に付き添つていた。

「へんた・・・どうせ私みたいな田舎娘なんか・・・どうでも良い女だつたんだ!…サイトさんの裏切り者!…・・・ウワーン!…」

少女は愚痴を一言三つと、突つ伏して泣き始めた。さつきからこれの繰り返しである。

「あのさシエスタ。何があつたか知らないけど、営業妨害はやめてくれる。さつきからお客様たちが何度もこつちに向かって振り向くんだけど。」

ジエシカは目の前で自棄酒を煽る従姉妹、シエスタに向かつてもう何度言つたかわからない言葉を繰り返す。

「いいじゃない?従姉妹でしょ?お金はちゃんと払つてるんだから。」

「これまた先ほどから何度も繰り返される返答を聞いて、ジェシカは盛大な溜息を吐いた。

「あんたタルブの叔父さんや叔母さんが見たら泣くわよ。」

身内の話題を出して、なんとか現状を打破しようと試みるジェシカだが、シェスターは耳を貸さない。

「ふんだー！どうせ私はタルブには帰れないもん！」

その姿に、ジェシカは最早打つ手なしと見た。

才人とルイズの婚約にショックを受け、1ヶ月の休みを貰ったメイドのシェスターが何故今ここにいるのだろうか？それは次のようなことが理由であった。

怒りの余り彼女は長期休暇を貰つて学院を飛び出したわけであるが、頭を冷やして冷静になると、今自分がどのような状況であるのかをようやく把握した。

彼女はタルブの実家へ送金するために、魔法学院で奉公していたのである。それなのに一時の感情に任せ、1ヶ月分の給料をふいにしてしまった。そんな事情ではタルブに帰れるはずなどない。かといって、学院へ戻つて才人とルイズの顔を見るのも嫌である。

そこで彼女が考えたのが、トリスターニアで居酒屋をやつている従姉妹のことであった。今彼女が頼れるのはそこしかなかつた。

そういうわけで、シェスターは何の前触れも無くジェシカのもとへ

とやつてきたわけであるが、やつて来た途端彼女がしたのは、ひたすらネチネチと愚痴を言いながらの自棄飲みだつた。しかも真昼間から。

もつとも、ある意味真昼間から飲んでいるお陰でお客さんへの影響も最低限度に収まつてゐるわけだが。これが客の増える夕方や夜だったら大変だつたらう。

ジエシカはそんな従姉妹の自棄を止めようと何度も隣に座つては、説得を試みたが結局無駄骨だつた。最終的には・・

「あのくらゐの乙女心は複雑なのよ。特に恋愛関係はね。だから少しぐらい目を瞑つて上げなさい。」

と何故か父親であるスカラロンに言われて、彼女はシエスタの説得を諦めた。

そして夕方、昼間ひたすら愚痴を言い続けたシエスタは、ワインのボトルを抱いて、机に突つ伏して眠つてしまつていった。

そんな中、店の前が少し騒がしくなつた。

ドルルル・・・

エンジン音を高らかに鳴らしながら、2台のサイドカーが止まつた。このような文明の利器を使つてゐるのは、もちろん『東方義勇軍』の人間だけである。

今や『魅惑の妖精亭』の常連には彼らも入つてゐるのである。

サイドカーから降りた4人の兵士が、店の中へと入ってきた。全員茶色の開襟服にネクタイという出で立ちだ。この服装は義勇軍の2種軍装である。以前の海軍の軍服をモデルにした白い1種軍装は見た目は良かつたが、汚れが目立つ上に、礼装的な意味合いが濃く、どちらかといふと戦場向きの服ではなかつた。かと言つて迷彩の野戦服で街中を歩くのも気が引ける。そこで才吉は通常課業時の制服として、新たにこの服の採用を決めたのである。ちなみにモデルとなつたのは第一次大戦中の英國陸軍とアメリカ陸軍の服だ。

当初は格好よい旧独逸軍の服を採用する意見もあつたが、これはどうしてもナチスを連想させるということで才助が反対した。また旧日本陸海軍はいずれもダサいとして早々と却下となり、最終的に英米の制服をじちや混ぜにしたようなデザインとなつた。そのまま「ヒーロー」をしなかつたのは、旧軍兵出身者がどうして元も敵国の服そのままの物は着たくないと言つたからだ。

閑話休題。

とにかく、義勇軍の兵士が4人店にやつてきたわけである。すぐには、手の空いていたジョシカが出迎える。

「いらっしゃいませ。」

「やあジョシカちゃん。いつもの席に頼むよ。」

すでに顔見知りとなつてゐる兵士が、ジョシカに対して笑みを浮かべて言つ。

「わかりました。あら? そちらの人は初めての方よね?」

ジエシカは1人の士官の顔を見て言った。

「ああ、新しく入隊した上官さ。今日はこの人に、この店のことを紹介しようと思つてきたんだ。」

すると、その士官は帽子を脱いで挨拶した。

「初めまして、義勇軍の菅野直中佐です。よろしく。」

その士官、菅野中佐はジエシカに向かつて敬礼した。

「ジエシカです。お席の方へ御案内します。」

菅野をはじめとする4人はジエシカに案内されて、義勇軍の専用席に座つた。この時期、『魅惑の妖精亭』にとつて、義勇軍の兵士達は大事なお得意さんだつた。彼らは頻繁に来店するし、かなりのお金を店に落としていつたからだ。

菅野たちは適当に料理と酒を頼むと、宴を始めた。

彼らが宴を始めたのと同じ頃、店に今度は王室付きの衛士が3人やつてきた。彼らも、店員の女の子に案内されて、席につこうとした。

騒ぎが起きたのはこの時だった。

ちょうどその時、ようやく眠りからさめたシエスタが立ち上がりたのだが、彼女の袖が歩いてきた衛士に当つてしまつた。さらに持つていたワインの瓶を落としてしまい、その中身が衛士達に掛けてしまった。

「おい！何をするんだ！」

それまで眠気眼だつたシエスタは、この衛士達の怒声で一気に意識を現実へ引き戻された。

「あー、『めんなさい』……」

シエスタは頭を下げたわけであるが、悪い事にその衛士はメイジだった。最近になって魔法を使えない平民の地位が上がってきていたが、長年に渡つて形成された侮蔑意識がそう簡単に消えるものではない。それどころか、逆に彼らは自らの地位を脅かす平民に対してさらに傲慢にさえなつていた。

「『めん』で済む問題じゃないぞ平民！王室をお守りする我々にワイントを引っ掛けとは、いい度胸しているじゃないか！』の責任どう取つてもうおうかな？」

「やうだ。我々への侮辱は女王陛下への侮辱と同罪だぞ。」

「平民のくせして、舐めてるんじゃない。」

口々にシエスタを睨みよつとする衛士達。その言葉に、シエスタの顔色がみるみる青ざめていった。

「あ・・・あ・・・・」

衛士が彼女を見る目は、獲物をじつ料理しようか吟味する狼の物だった。おそらく、シエスタに対し、言葉に出来ないよつた暴力を加える氣に違いない。

だが、シェスターにはどうしようも出来ない。また周りの人間も相手がメイジでは対抗しようがなかつた。

「さあどうしようかねな？取り敢えずは俺たちに付き合つて……」

衛士がそこまで言つた時、横合いから声が入つた。

「それ位にしておいたらどうですか？」

「何？」

衛士が声のしたほうに振り向いた。

彼らが見たのは、席から立ち上がつた4人の義勇軍の男たちだつた。

シニスターの休日 上(後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

シHスタの休日 中

「何ー?」

衛士は自分たちの行動に横槍を入れてきた声の方に顔を向けた。そして、その服装を見て驚愕した。

「えい、義勇軍ー!」

義勇軍の存在は王都を守る衛士たちにとつても大きな物となっていた。ほぼ構成している全員が平民でありながら、現女王であるアントリエッタから高い信頼を誇り、さらにその使用する武器はこれまでの概念を覆すほど高い威力を持つていて物ばかりだった。

実際、義勇軍の兵士は外出する際も自衛目的での武器（拳銃や音響闪光弾）の携帯が許可されている。そのお陰で、これまで数回メイジとの乱闘騒ぎを起こしたが、いずれも死者も負傷者も出さずに済んでいる。

そんなわけで、この時点において義勇軍の兵士はメイジたちからは恐れられ、平民たちからはヒーローのように崇められていた。

衛士たちがつめく様に言ひと、先頭の男が敬礼しながら言つた。

「義勇軍航空部隊の菅野直中佐です。」

「中佐・・・」

再び衛士達が驚いた。中佐は軍隊内の階級では士官に入り、比較

的高い階級である。衛士達は姿勢をただした。

「失礼しました。」

彼らに対して、菅野は問い合わせる。

「何をやっているんですかな？大の男が3人で。」

「あなたには関係ないことです。我々は高貴ある衛士にワインをかけた不届きな平民に相応の罰を与えようとしただけです。」

貴族が侮辱してきた平民をいたぶるのは当然とばかりに言う衛士。しかし、菅野はせせら笑つように言い返した。

「別に悪気があつてしたわけではないでしょ。そんなことで一々目くじら立てるなんて、みつともないと思わないのですか？彼女だつて謝つているではないですか。」

言われた衛士の顔がカツと赤くなる。彼らメイジには平民を虐げても良いというのがこれまでのハルケギニアの社会的な通念であった。それなのに、目の前の男（しかも平民）は否定してきている。

彼の手が一瞬杖に伸びる。だが、義勇軍の兵士達も腰に吊つた拳銃のホルスターに手を伸ばす。

一瞬の内に、場の空気がピリピリした物に変わった。

だが、実際の所衛士達にはこれ以上言い返すことや力につつて出ることなど出来はしなかった。そんなことしたら最終的に痛い目に遭うのは自分たちだとしつかりわかっていたからだ。

これまでにも義勇軍とメイジとの間で乱闘騒ぎがあつたのは先にも述べたが、その全てで非があるとされたのはメイジ側だった。騒ぎの原因、またはふつかけたのがメイジ側であり、おまけに義勇軍兵士達にはいつも味方となつて証言してくれる平民たちがいたおかげだ。そして今回も悪いことに義勇軍側に非はないから、見ている客や店員たちは義勇軍側の味方をするだらう。

非があるとされたメイジは大概なんらかの制裁が加えられる。例えメイジといえど、理不尽な暴力を振るつたことが証明されれば、実刑が加えられると最近になつて法が整備されたからだ。これまでの最高刑は罰金2000ルギューだった。

じついうこともあり、メイジ達は義勇軍の人間、ましてや高い階級の人間にこれ以上楯突く事など出来なかつた。

「そ、そうですな。我々も大人気なかつたようです。失礼します。」

衛士達はそう言い残すと、バツの悪そうな顔をして店の外へと出て行つた。すると、客の間から拍手が巻き起つた。

「いいぞ兄ちゃん！」

「スカッとしたぜ！」

法が整備されたとはいゝ、未だに隠れて理不尽な暴力を振るうメイジは多い。平民たちの鬱憤は相当な物である。菅野たちが賞賛されるのも当然といえた。

もつとも、菅野はそんなこと気にすることなく、いまだに座り込

んでいる少女、シエスタに手を差し出した。

「大丈夫かいお嬢ちゃん？ケガとかしてないか？」

それまで恐怖のあまり思考停止状態だったシエスタは、ようやく
我に帰った。

「あ！は、はい。大丈夫です。」

菅野の手をとつて立ち上がるシエスタ。

「そうか。なら良かつた。」

「助けていただき、ありがとうございました。」

シエスタは菅野に頭を下げた。

「なあに、女がいじめられているのが気に入らなかつただけさ。そ
れにしてもあいつらが早い所退散してくれて良かつたぜ。後2・3
言何か言つてきやがつたら本当に殴つてやるつと思つてたからね。」

かつて憲兵隊に喧嘩をふつたことがある彼は、その事を思い出し
ながら言った。一方、シエスタは別な反応を示した。

「メイジに挑むなんて、まるで才人さんみたい。」

才人という名前に、菅野が反応した。

「うん？君は才人君を知っているのかい？」

「え？ はい。私は魔法学院で働いていますから。」

「そうかい。」

と、菅野彼女をじーっと見始めた。男として女を見定めているわけではなく、彼女の要望に引っかかる物があったからそうしたのだ。

「あの？どうかしました？」

さすがに変と思ったシエスタが問いただした。

「いや、ここに来て色々な髪の色の人間を見たけど、黒髪は珍しかったから。」

「ああ、これは曾祖父譲りなんです。私の祖父はこことは違う世界から来たんです。確かに才人さんと同じ世界だと。」

すると、菅野は納得したように言った。

「ああ、それじゃあ日本人の血が混じっているのか。そういうえば、平賀司令もそんなこと言つていたな。」

菅野は才助から、ずっと昔にこちらの世界に飛ばされた人間がいることを既に聞かされていた。

するとここで、シエスタも菅野が黒い髪と才人と似たような顔立ち（アジア系）であることに気づいた。

「それじゃあもしかして、あなたも才人さんや曾祖父と同じ世界から？」

その言葉に、菅野がうなずいた。

「まあそつなるかな。そつこえれば君を名乗ってなかつたね。俺は菅野直義勇軍中佐だ。ちなみに飛行兵をしている。」

遅ればせながら名乗る菅野。続いてシエスタも血口紹介をした。

「シエスタです。よろしく。・・・飛行兵ですか？それじゃああなたも才人さんみたいに『龍の羽衣』・・・ゼロ戦を飛ばせるんですか？」

少女の口からゼロ戦といつ単語を聞いて少しばかり驚いたものの、菅野は返答する。

「まあね・・・」

と、セイで後ろから声をかけられた。

「中佐、立ち話もなんですから座つたらどうですか？」

部下の少尉がそう声をかけてきた。

「ああ、そうだな。君も座りなさい、もひとつ話を聞きたい。」

「えー？ はい。」

断つても良かつたのだが、シエスタはその場の流れで菅野たちの宴席に加わることとなつた。

その後、シエスタを加えた5人による食事会兼お話し会は終始和やかな物となつた。やはり同郷の血が混じつているということが、菅野たちの心を和らげたらしい。

話の中では、やはりシエスタの曾祖父の話題が一番盛り上がつた。シエスタにとつては曾祖父の足跡をたどるいい機会であつたし、菅野らからしてみれば、こちらに来た大先輩のことであるから、興味は尽きなかつた。

そして2時間後、食事会を終えた菅野たちとシエスタは別れたのだが、人の繋がりとは意外な物で、彼らはこれ以後も顔を会わせることとなる。また、シエスタの心の傷はこの数時間のうちに完全に消え去つていた。

シヒスタの休日 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作者近況・・・ようやく10巻読破。

そして古本屋でゼロ魔11、

12巻とタバサの冒険漫画版を購入。

シエスタの休日 下

シエスタが菅野中佐と出会つてから一週間後、彼女はスカラロン店長から新しく開店する支店の仕事を手伝つよう頼まれた。

魅惑の妖精亭の支店は、義勇軍基地のすぐそばに作られた店である。スカラロンが何故そんなことをしたのかと言えば、常にかなりの金を払つていく義勇軍兵士の来店をより積極的に望んだことと、現在基地一帯の領主となつてゐる才助が、土地の税金を非常に低く抑えていたからだ。

大概貴族は平民に対して色々と税金やらなんやら理由をつけて金を吸い取る。しかし現代日本からやつて来た才助はそんなことはしない。むしろ税金を安くして、基地近くに商店や住宅が増えることを望んでいた。そして実際、既に目敏い商人たちが次々と店を建て、さらにその商人たちが住む家が建てられるという形で、街が形成されていった。

シエスタは魔法学院へ戻る時期になつていたがスカラロンからしつこく頼まれ、結局才人のいない魔法学院に既に未練はなかつたから、辞表を出してこちらの仕事をすることとなつた。

支店での手伝いを始めたシエスタであつたが、開店当初からてんてこ舞いとなつた。義勇軍の兵士にとつて、歩いて行ける範囲で可愛い女の子と会えて美味しい料理が食えるなど、夢のようなことだつたからだ。

そしてスカラロンの口論見どおり、この店の収入は良かつた。コストパフォーマンスという点からみたらトリスターニアの店よりこちら

の方が儲かつっていたかもしれない。

魅惑の妖精亭の支店は義勇軍の基地から400m程離れていた。これは才助が万が一の事故に備えて基地から300m以内に建物の建築を禁止したからだ。元自衛官である才助にとって、民間人を巻き添えにする事故は最も恐れる物だった。

そんなわけで、店 자체は基地の真ん前にあるわけではなかつた。しかし、離れている分逆に基地から飛び上がる飛行機が良く見えた。

そして開店から数日したある日、シエスタは義勇軍基地内から出前の注文を受けた。出前の注文と言つても、電話などないから基地から誰かが代表として数人分の注文を言いに來るのであるが、それはともかく、シエスタは早速注文された料理を作つて基地へと向かつた。

正門で衛兵から許可を貰い、注文した人物がいる場所を説明され、そこへ向かつた。その場所は飛行機の格納庫だつた。

「すいません。魅惑の妖精亭ですけど。」

彼女が声をかけると、中から聞きなれた声で返事がされた。

「やあ、君が出前か。」

「あー菅野さん。こんにちは。」

あの一件以来、顔見知りとなつてゐる菅野中佐だつた。

「あなたが注文を?」

「ああ、と言つても俺は食べないけどね。食ぐるのは午前の飛行を終えた俺の部下たち。」

そう言つて菅野は指差した。シエスタが見ると、そこには自分と同年代、もしくは1、2歳ほど若い少年たちが座り込んでいた。明らかに元気がない

「あいつらはパイロットの訓練生1期生なんだけど、体験飛行しただけであのぎまでね。まあ一度も空を飛んだことないから仕方ないといえば仕方ないけど・・・そう言えば君は飛行機に乗ったことがあつたんだよね？」

「はい、以前タルブに帰る時に一度乗せてもらいました。」

すると、菅野は彼女の方を見て何かを考えていた。そしてこんなことを言つた。

「じゃあこいつに乗つてみる？」

「はい？」

菅野が乗らないかと言つたのは、複葉のP-02練習機だった。

「こいつは風防もない吹きさらしだけど、その分風を受けて飛びこむが出来るから樂しいよ。こいつらが食事を終わらせるまで時間はまだあるし。」

菅野としては、とくに何か理由があつて彼女を乗せようと思つたわけではない。ただ何か心に引っかかる物があつたのだ。

「ええと、それじゃあ折角なので乗ってみようかな。」

シエスタは少しばかり迷つたが、乗る」と云した。

「よし。それじゃあ早速行くとするか。」

早速菅野は飛行帽子と飛行服をつけてきて、彼女に着るよつて指示した。

着てみると、中々決まつていて、おまけに体の線が綺麗に出るので、若い練習生たちにはかなり刺激的なようだつた。ただ菅野はそんなこと気にせず、整備兵に機体を格納庫から引き出させて飛行準備に掛かっていた。

菅野が操縦席に乗り込んでエンジンを始動させる。本来なら少しばかり暖機運転が必要だが、午前中練習生を乗せて飛行していたからエンジンは温められていた。

「じゃあ乗つて。」

「はい。」

シエスタは菅野に説明されて後部座席に乗り込んだ。

「じゃあ行くよ。ベルトは締めたね?」

「はい。」

「それでは出発。」

菅野はスロットルをフルにして離陸に掛かった。

離陸すると菅野は時速100km、高度1000m程での飛行を行なう。

「どうだい、直接空から眺める地上の景色は？」

菅野は無線越しに後部座席のシエスタに尋ねる。

「とっても綺麗です。それに風が心地良いです。」

「それは良かった。ところで、気持ち悪いとか、そういう感じはないかい？」

「いいえ、全然。」

「ふうん……」

練習生たちの多くがただ1回の飛行で飛行機酔いを起したのに対し、シエスタはいたつて元気そうだ。この違いは一体何であるのか？

(そういえば曾御爺さんがパイロットだったな……血かな?)

もしシエスタが佐々木少尉の血を濃く引いているなら、もしかしたらパイロットとしての素質があるかもしれない。

(ちょっと試してみるか。)

「シエスタさん、ちょっと機体を回すよ。腹に入れて。」

「は、はい。」

菅野はそこまで荒くはないが、通常よりきつい感じで機体を旋回させてみた。

「キヤー！」

急な動きに、シエスタが声を上げた。

旋回が終わると、菅野は再び尋ねた。

「大丈夫かい？」

「ええ、ちょっと冷つとしましたけど、大丈夫です。なんともありません。」

「そうか・・・」

この後、菅野は10分ほど飛行した後機体を着陸させた。そのまま格納庫の側まで滑走させた。

その頃には、既に練習生たちが食事を終えて2人が降りてくるのを待ち構えていた。

「楽しかったです。ありがとうございました。」

そう言いつつ、シエスタは足取りも軽く地面に降り立った。その光景に、練習生達は唖然としていたが。

「それは良かった。」

意外な人材の素質が発見できたかも知れないのに、菅野も「満悦である。

「それじゃあ私はお店に戻るので。」

「ああ、ちよつと待つで。」

菅野がシエスタを引き止めた。

「シエスタさん、飛行機の操縦を畳みは無いかい？」

「えー!? 飛行機ですか・・・そうですね、自分で空を飛べれば楽しそうですけど、お店もありますし。」

シエスタが断りつとするが、菅野は彼女の中に感じる物に賭けてみたかった。

「君は筋が良いと思うんだけどな。お店が休日の日とか、お店が開く前の早朝でもいいから習つてみる気はないかい? もちろん義勇軍としての訓練だからタダだ。ダメかな?」

その言葉に、シエスタはちよつとばかり考えていた。

「それでしたらなんとかなると思います。考えてみます。」

一応断言せざるを得ない答えた。

「さうか。だつたらこつでも良いから、また返事を聞かせてくれ。」

「はい。それでは。」

そして彼女は空いたお皿を持って帰つて帰つていった。

このときは曖昧な答えしかしなかつたシエスタであつたが、この数日後の定休日、彼女の姿が基地内で見られたから、その後どうなつたかは容易に推し量れるだろう。

彼女、そして菅野中佐がさひてその後どうなつたかは、本編に続
く。

シエスタの休日 下（後書き）

というわけでシエスタ編終わりです。というか、もうタイトルとは全く違う話になってしましましたが（笑）

彼女の活躍はいずれ本編で語ることとなるでしょう。

次のネタは一体誰にしようか・・・考え中です。アニメスか、それとも何か学院ネタにするか・・・どうしようかな？

トリステインの首都であるトリスター・アから西へ5km程行った場所は、かつて王家直轄領であった。しかし、現在はアルビオン解放戦争で手柄を建て伯爵となつた平賀才助『東方義勇軍』トリステイン方面軍司令官の領地となつていた。そしてその義勇軍の拠点もここにあつた。

新設された義勇軍の基地には、飛行機を飛ばすための飛行場、戦車やトラックの駐車場、歩兵の練兵場などが整備されている。さすがに、建てられた建物自体はこの時代の技術で作られているものが多いうがそれでも毎日飛行機が離着陸を繰り返し、時折戦車がキヤタピラの音も高らかに走り回る風景はさながら異世界の光景だつた。

実際彼ら『東方義勇軍』の幹部のほとんどが異世界である地球からやってきた人間であつたし、使用している武器も同様だつた。

戦争が終わつた現在、彼らのやることといつたらひたすら自分たちの訓練と、新兵に対する教育だつた。幹部陣はのきなみ地球出身者だつたが、兵士の多くはハルケギニアで募集した志願兵だつたからだ。その多くは行き場を失つていた若い平民たちだつた。

彼らの多くは文盲で、さらに他のハルケギニア人同様機械文明に触つた事などなかつた。しかし3ヶ月間の猛訓練で、なんとか最低限の戦闘が出来るレベルにまで練度を上げることができた。

しかしそうなつてくると、よりレベルの高い戦闘訓練が必要となつてくる。義勇軍内の訓練では、どうしても地球式の近代戦法しか知らない者同士の戦闘となる。しかし彼らが万が一の場合に戦う

のは、この世界、すなわちハルケギニアの人間だ。そうなると勝手が違つてくる。

総司令官である才吉や才助が警戒していたのは、ハルケギニア人がこの世界にある手段で、近代兵器に対抗する戦法を開発する事だ。

昔公開された映画で「戦国自衛隊」という話があつたが、この中ではヘリコプターをはじめとする近代兵器」とタイムスリップした自衛隊が、上杉謙信と協力して武田信玄の騎馬隊と戦闘するストーリーであった。しかし、それら近代兵器が敵の原始的な戦術でやられてしまつという描写がある。

同様なことがここハルケギニアで起きないという保証はどこにもなかつた。それに「戦国自衛隊」は抜きにしても、ベトナムでは原始的な戦法でベトナム軍が米軍を打ち破つている。また最近でも近代兵器を持っている米軍がアフガニスタンやイラクで武装ゲリラに悩ませれている。

そこで、才助たちはなるべくこちらの世界の軍隊と模擬戦を行なつてこれに対抗しようとした。ところが、この結果は才吉たちを非常に落胆させる物だつた。

トリステイン軍のメイジで構成された部隊の多くは、よほど魔法に自信があるのかバカの一つ覚えの戦法しかかけてこなかつた。すなわち正面からの魔法を使っての突撃攻撃である。

これでは義勇軍に勝てるはずなど無い。義勇軍の一人あたりの歩兵装備は、旧日本軍の99式小銃をモデルに開発したT1型歩兵銃に手榴弾、音響闪光弾である。これだけでも普通のメイジに対抗するだけなら充分だ。音響闪光弾で相手の動きを奪つて攻撃するか、

小銃でのアウトレンジ攻撃で倒せてしまつ。

さりに部隊装備として、陸上自衛隊からの払い下げである迫撃砲や無反動砲も備えている。（これは才吉が仕入れてきた物。例によつて出所不明。）

いひなるとお話しにならない。これらに正面から向かうなど自殺行為も良い所だ。しかも、プライドからか、1回負けてもその戦訓を根本的に生かそうとしない。とにかく向上心があまり見られないのだ。

どうも魔法に頼りきつているのと、貴族というプライドが冷静な判断力を奪つているようだつた。

一回だけマンティコア隊が義勇軍に大打撃を喰らわせたことがあつたが、これは義勇軍側のミスで起きたことだからあまり参考にはならない。

一方、戦訓を提供してくれないメイジたちであつたが、義勇軍にとつて頼もしい敵となつたのは、今やトリスターニア中にその名を轟かせている女剣士、アニエス率いる銃士隊であつた。

アニエスはアルビオン解放戦争の際は義勇軍と共にハヴィランド宮殿強襲作戦を行い、皇帝クロムウェルを捕縛する功績を残した。

そんな彼女率いる銃士隊は全員が平民、しかも女性で構成されている。そして最初の模擬戦からこの銃士隊は手強い相手となつた。彼女らは常に如何にメイジに勝つかを考えて訓練している部隊だ。だから思考の柔軟性という点ではメイジたちの比ではない。

最初の模擬戦はほぼ同数の兵士で、森の中で行なわれた。アーニエス率いる銃士隊はメイジたちのように真正面からの戦闘という愚は犯さず、分散しての少人数グループで戦つた。しかもその動きは機敏で、義勇軍兵士を一時混乱させた。

ただし、さすがに兵器の質はどうにもならず最終的には銃士隊の完敗で終わっている。

しかしそこからがメイジと一味違うのが、アーニエスだった。彼女は敗因を徹底的に分析し、例えば銃士隊の兵士の格好が森に溶け込めず目立つたとわかれば、すぐに隊員たちの服を染めさせた。また勝つた義勇軍兵士達への聞き込みも欠かさなかつた。

そんな彼女の態度に感心したのが、歩兵部隊隊長の梶田幸一少佐だった。彼はもと陸上自衛官の普通科（所謂歩兵科）出身者だ。別にこの世界に飛ばされてきたわけではなく、地球でスカウトされて、新月を使ってこちらの世界にやってきた人間だ。

なんでわざわざこんなことしたかといえば、こちらの世界に飛ばされた人間だけではカバーできない分野も結構多いからだ。

梶田がスカウトされたのは、近代的な歩兵戦術を知っている人間が少ない事と、ヘリパイロットの山田少佐の知り合いであったからだ。また陸自の兵器を使いこなすことも出来た。

田頃から政府の失政に失望していた彼は、最初こそ困惑したが、この話に直ぐに飛びついた。自衛隊では絶対無理な実戦を経験できるかもしれないというのも彼にとっては大きな魅力だつた。

そんな彼、アルビオン解放戦争の1ヶ月前にハルケギニアからやつて来たわけだが、結局歩兵部隊の編成が間に合わず、同戦争には出陣できなかつた。

だから模擬戦が彼にとつてのフラストレーションを発散できる場所であつたが、そこで出会つた銃士隊兵士たちは彼の興味を大いに引いた。そこで、彼はこんな提案をアーネスに申し出た。

「おれの部隊といひの部隊で共同訓練をしてはいかがだらうか?」

これがこの物語のスタートだつた。

梶田少佐からアーネスに申し出が行われてから数日後の早朝、義勇軍基地内に起床ラッパが鳴り響いた。

「総員起床!—!」

起床時刻を告げる兵士の声に反応して、兵士たちが一斉に飛び起きた。ただし、その兵士たちは見慣れた義勇軍兵士ではなかつた。

「全員もたもするな!遅れて銃士隊の名を汚すよつなマネをするんじやないぞ!—!」

「「「はい!—!」」」

飛び起き、急いで着替える兵士たちに向つてアーネスの強い意志

の籠つた声が掛けられた。

緊急出動！－連合歩兵隊 序章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況・・・自分の下宿（山梨県）ではゼロ魔が見えないことにやっと気付きました。

緊急出動！－連合歩兵隊 上

義勇軍の歩兵は、この時点においては5個分隊を併せた1個中隊約150名で編成されている。これに1個小隊60名で編成された補給隊が付属している。

補給隊は文字通り兵、前線の部隊に物資を補給する兵隊の事だが、基本的な訓練は歩兵と変わらず、トラックの運転を習い、迫撃砲と無反動砲の扱い方を習わないことだけが違う。

だから実質義勇軍の兵士の総数は210名だ。砲兵や工兵は現在のところ独自の部隊ではなく、歩兵がその役目を兼任している。とこうよりも、分離させて編成するだけの余裕がないと言つ方が正しい。

とにかく、トリスターニア近郊に在る義勇軍基地にはこの210名の兵隊と、アルビオンで編成された同規模の部隊が同時に収容できるだけの基地設備を設けていた。今回銃士隊の面々はその空いたスペースに入つて合同訓練を行なつっていた。

朝起床ラッパが鳴つて5分もしないうちに、飛び起きた兵士達は次々と兵舎の前の広場に整列していく。

「第1分隊異常なし！..」

「第5分隊異常なし！..」

「補給小隊異常なし！..」

整列した各部隊の責任者が、部隊の集合を確認して声を張り上げる。さすがに3ヶ月の訓練を行なつてきただけあって、各部隊とも動きは様になつていた。

一方銃士隊の兵士たちも負けじと整列を短時間で終えた。

「銃士隊90名、異常なし！！」

「ひらりもさすがに実戦を経験しただけある。その動きの良さと、歩兵部隊司令の梶田少佐も内心で舌を巻いた。

（さすがに王軍に所属する精鋭部隊だけあるな。）

今まで演習を行なつてきたメイジの軍隊も、軍隊としてはそれなりだったが、銃士隊からは何か別なオーラが出ているように感じる梶田だった。

「全部隊集合完了！－！時間4分21秒！－！」

従兵がストップウォッチを止めて、梶田に報告する。

緊急呼集に備えて5分内集合を目標としてきた、練度も上がつてそれも可能となつた。

梶田は満足しつつ、用意されたマイクを使って兵たちに向かって喋る。

「諸君おはよう。知つての通り、今日から1週間アーツ隊長率いる銃士隊のみなさんが訓練に加わる。しかし、訓練内容などの変更は特にない。だから諸君らはいつもどおりに訓練を進めてもらいた

い。以上だ。」

「敬礼！..！」

180名（残る1個分隊30名は基地警備や当直任務でない）の兵士達が一斉に梶田に向かつて敬礼した。

「国旗、軍隊旗掲揚！..！」

兵舎の前に立てられた2本のポールに、百合の花をあしらつたトリスティン王国旗と旭日旗を模した義勇軍旗が掲揚される。

ちなみに歩兵を表す部隊旗もあるが、こちらは兵舎の入り口に立てかけられている。歩兵部隊旗は、青地に2本の黄金色の銃剣が斜め十字に重ねられたデザインである。

その光景を銃士隊の面々が少し奇妙な物を見る目で見ていた。こうした国旗掲揚といった国威発揚の風景は、地球でも近代になつてから国民の感情を団結させるために始まったものである。だから銃士隊にはこのような習慣がないのだろう。

そんなことを梶田が考えているうちに2つの旗はポールの上まで上がりきり、風に靡き始める。

それを見届けて、梶田は命令を出した。

「それでは、いつもどおり朝食まで1万メートルマラソン！..！」

その言葉に、一部の兵士は明らかに憂鬱そうな表情をしたが、すぐに上官に促されて走り始めた。

一方、銃士隊の兵士は最初意味がわからないといつ表情をしていたが、すぐに義勇軍の兵士について走り始めた。

「梶田隊長？」

アニエスが梶田の側に歩いてきた。

「なんです、アニエス隊長？」

「一万メートルとは？」

梶田は「」で、ハルケギニアと地球とでは長さの呼称が少しばかり違っているのを思い出した。

「メートルは「」の言葉で、メイルですね。」

「一万メイル？ 結構な距離を走らせるんですね？」

「まあ基礎体力は重要ですから・・・それでは我々も走りましょう。部下だけにやらせるわけにはいかないので。」

梶田はアニエスを促して走り始めた。

1万メートルマラソンが終わり、朝食の時間が過ぎると午前の課業となる。分隊ごとにわかれで訓練を行なう。

ちなみに、義勇軍の食事は歩兵、航空、海上の3部隊によつて大

きく違う。どう違うかといえば、日本人の比率が多い部隊ほど、米の飯が多く出るということだ。文化とは概してこう言つてゐる現れるものだ。

さて、義勇軍の訓練内容はやはり銃士隊から見れば相当異質である。

銃士隊では訓練の時間の多くは体力づくりや射撃訓練、剣の扱いなどだ。つまり実戦的な訓練が多い。ところが、義勇軍では半分近い時間を座学に消費していた。これは義勇軍の兵士達が、マスケット銃よりも機構が複雑なT-1型小銃、12.7mm重機関銃、迫撃砲、無反動砲、さらには自動車などを扱うためだ。これらは整備が欠かせない。

また周辺各国の文化軍について教えるものや、義勇軍独自の軍規範、さらには対メイジ対処法を教える授業などもある。

義勇軍の兵士達はまず頭でこれらを叩き込まれ、その後実践する。だから文盲が多いこの世界では、最初の1ヶ月間はほとんど兵士に文字を教えるのに消費される。

アーニスら銃士隊も、15名単位のグループにわかれこれからの座学や演習に参加した。

銃士隊の兵士たちが特に興味を示したのは、やはり射撃訓練や実弾発射演習だった。

銃士隊の面々は、小銃、重機関銃、迫撃砲、無反動砲の発射風景を交代で見学した。そしてもちろん驚愕する事となつた。

小銃は見た目こそ、この世界で使っているマスケット銃に似て無くはないが、装弾数は7発、しかも発射速度、射程、命中精度は桁違いだ。

彼女らは早速義勇軍兵士に教わって射撃を行なつた。この時代の銃とは明らかに違う発砲音、反動に彼女らは身をもつてこの異国の銃の威力を感じたのだった。

小銃だけでもこうであるから、重機関銃や迫撃砲を見ると、もはや驚きをとおり越して呆然としていた。

重機関銃の連発能力は毎分600発以上だ。しかもその威力は軽々コンクリートの壁を破壊するだけの力がある。だからこの時代の甲冑など軽々貫通する。しかも有効射程は500m以上だ。（実際の射程自体はもっと長い。）

アニエス曰く「このショウジョウヒジュウキカンジュウが十分な数揃えば、もはやメイジなど恐れるに足りない。」

彼女らは迫撃砲や無反動砲などの発射も見たが、1000m近い距離で打ち出し、しかもどんな大砲よりも高い威力を發揮しているのだ。

アニエスはそれらを既に見た経験があるから免疫があつたが、他の兵士たちは先ほども書いたとおり啞然としていた。いや、むしろ悪魔でも見るような目をしていた。

そんな感じで、午前中の訓練は終わつた。そしてやつぱりと言おうか、その頃には銃士隊の兵士達は義勇軍の武器の威力に酔い、口々に「私たちもこんな銃があればなあ。」と愚痴つていた。

そして午後の訓練が始まる。

「午後は戦車部隊との合同機動訓練を行ないます。」

梶田が内容をアニメスに伝える。

「戦車？あの観闘式の時に出てきた？」

「ええ。恐らくあなたがたの概念ではとても考えられない訓練なので、取りあえず最初は見学していくください。」

確かに、アニメスには合同機動訓練などと言われても、何をするのかさっぱりわからなかつた。とりあえず彼女が考えたのは、見てしつかり学ぼうという事だつた。

緊急出動！－連合歩兵隊 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作中で数回出てきたT-1型小銃というのは、才吉が旧日本軍の9式小銃をモデルに開発した小銃で、口径は7.7mm、有効射程500～600m、最大射程は3000m、装弾数7発

ハルケギニアで制作不可能な部分は、地球の町工場に発注するか、持ち込んだ工作機械で製造。そのため、他国が仮に捕獲しても複製は不可能。アルビオンでも量産予定。

T-1の意味はトリステインで最初に採用された銃を表す。

作者近況・・・ようやく11巻読破。しかしテストが、レポート
が・・・

緊急出動！－連合歩兵隊 中

昼食の時間が終わり、午後の訓練の時間となつた。アーネスら銃士隊の面々は、演習場の外側に立つて、梶田少佐の言う機動合同演習を見学していた。そしてそれは、実際に彼がアーネスに言ったように、アーネス達の概念外の物だつた。

キュラキュラ・・・

キャタピラとエンジンの音を響かせて、3両の戦車が横一列にならんで前進する。その戦車の上には歩兵が乗り込み、さらに戦車の後ろには歩兵を満載したトラックや無反動砲を搭載したジープ（4輪駆動車）が後続する。

時速30kmの速さで綺麗に前進するそれら戦車とトラックの群だけでも、ハルケギニアの人間から見れば壮大な光景である。しかし本番はそこからである。

指揮官である梶田少佐が、指揮官用ジープの上から白い信号弾を打ち上げると、戦車やトラックの動きが急に激しくなる。

今回の演習では演習場の端に作られた、仮想敵陣地の攻略を行なう。もちろん演習であるから、その陣地には敵はない。あくまで想定として行なう。

戦車とトラックはジグザグに動いて陣地に接近しながら、一定の

距離まで近づくと歩兵を降車させる。そして再び前進するが、それとともに戦車は戦車砲を発砲する。もちろん空砲であるが、その衝撃はかなり離れた場所にいるアニエス達にも伝わってくる。

さらに無反動砲や、歩兵の迫撃砲の攻撃が加えられる。これらも撃たれるのは空砲であるが、午前中に実際の発砲シーンを見ているアニエスには、一体どれほどの火力が敵陣地に降り注いでいるか容易に想像できた。

「すさまじい火力だ・・・」

さらに、歩兵の動きにも目を見張った。戦車が動き回る中で踏み潰されないかと不安になるが、実際そんなことはなく、しっかりと連携が取れていた。

戦車は歩兵の動きに合わせるために速度を落としているが、アニエスは直ぐに敵の歩兵やメイジが戦車へ接近することをさせないための動きである事を見破った。

そして最終的に歩兵の支援を受けた戦車が陣地を蹂躪し、そりで歩兵が完全制圧した。

今回は訓練であるから、敵の反撃などは全くない状況である。しかしアニエスは、あつても状況は変わらないと考えた。

いまだ強力な砲や、自走兵器のないこの世界では歩兵や騎兵が砲撃支援をしてもらひながら前進するというのは不可能で、正面から突撃する以外に手段がない。

ちなみに、この戦法は梶田少佐が戦車部隊司令官の長田少佐と話

し合つて採用した戦法で、旧日本陸軍の戦法を参考にしている。

旧日本軍では、歩兵を軍の主力としていたため戦車を歩兵支援用兵器と見なす風潮が終戦まで残っていた。そのため戦車、戦法共に世界の潮流から見れば時代遅れの物となっていた。

しかしこの世界では、相手は歩兵や騎兵中心である。戦車の脅威になる戦車や、対戦車砲、バズーカ砲もない。だからこの戦法も充分有効だった。

唯一恐れるとすれば鍊金魔法や『火』系統の魔法だが、魔法の有効射程がそれほど長くはないから、戦車からの戦車砲や機銃によるアウトレンジ攻撃で何とかできる。仮に戦車に接近しても、鍊金魔法に対しては固定化の魔法が掛けられているし、『火』魔法に対しても歩兵の支援があれば充分に阻止できる。

もつとも、梶田少佐としては、「APCがあればより高速で陣地を蹂躪できるのだが。」と決してこの戦法に満足しているわけではなかつた。

ちなみにAPCとは兵員輸送装甲車のことだ。

訓練が終わると、梶田少佐は見学していたアーニエスに感想を尋ねた。

「如何でしたかな? アーニエス隊長。」

「いや、なんとも。凄まじいとしか答えようがないです。あの最初の砲撃が実弾だったとすると、恐ろしい。それに歩兵と戦車の動きの速さや連携の上手さも驚嘆する物です。」

「そうですか。しかし、戦場では実際どうなるかわかりません。例えれば上空から竜が攻撃してこれば、さすがにこちらも無傷とはいかないでしちゃうし。それに非常に原始的ですが、落とし穴などを造られると厄介です。だから実戦では航空部隊の支援が必要不可欠になるでしょうし、斥候による綿密な戦場偵察も多用する事になるでしょう。まあ如何に連携するかが重要です。」

梶田は他の部隊との連携を重要というが、アニエスにはそんなことは簡単でないことがくらいわかる。ハルケギニアには無線どころか野戦電話さえないので。頼りに鳴るのは伝書鳩や伝書フクロウ、伝令ぐらいだが、そんな物では先ほど見たような戦闘は出来ない。

「あなたがたは、確かに無線機という機械を多用していましたな。あれはどれほどの距離まで通じるのですか？」

アルビオンで無線機を使い、非常に便利だと身をもってわかつていたアニエスだが、その性能の詳細までは知らなかつた。

「そうですね、戦車同士の通信なら半径5km程度なり。歩兵部隊同士の野戦無線機は半径10kmまで通用します。ちなみに野戦無線機は周波数を変えれば航空機や戦車との直接対話も可能です。」

周波数といふ言葉はよくわからなかつたが、とにかく歩兵から直接空をとぶ航空機や戦車に連絡が取れるということは理解できた。

「むづ・・・・」

彼らの使う兵器の凄まじさは知っていたが、直接戦う武器だけが戦場の勝敗を決めるわけではないと考えるアニエスだった。

「しかし我々としては本来歩兵1人1人に持たせたいというのが正直な所ですね。まあいざれそなうなるでしょうけど。」

この言葉にまたも目を見開くアーネス。これまで説明を受けた物だけでも驚異的に、歩兵1人に1台持たせるというのだ。

「これが東方とハルケギニアの差なのか・・・わかつていたつもりだが恐ろしい。」

「まあ遅れている分はこれから努力して追いつけば良いのです。確か先日科学研究所で電話の実用化に成功したと聞きましたから。」

科学研究所と聞いて、アーネスは眉をひそめた。彼女は所長のコルベールと未だ和解出来ていなかつたからだ。

とその時、彼らの方に赤旗を立てて向かってくる1台のバイクが見えた。

「何か起きたみたいだな。」

梶田が表情を厳しくする。赤旗の伝令は緊急の命令か連絡を運んでいる事を意味する。

「梶田少佐！アーネス銃士隊隊長！！」

オートバイに乗った若い兵士が叫ぶ。

「どうした！？」

「王室から、銃士隊の引き上げ命令です！！それと我が軍への出動要請です！！」

「Jの言葉に、梶田もアニエスも目を丸くした。

「一体何が起きたんだ！？銃士隊はともかく俺たちにもお呼びが掛かるなんて！」

義勇軍はトリステインとアルビオン王室から侵略以外の名目なら、要請を受ければすぐに出動とはなつてない。しかしどちらともに近衛を始め様々な騎士団を指揮下に治めている。だから義勇軍に対しての出動要請はこれまでに、1回災害派遣があつただけだ。

「それが王都にて、要人を狙つたテロが発生したそうです。既に近衛各部隊が動いているそうですが、犯人が街の外へ逃げ出している可能性が高いので、人手が足りないそうです！！」

「何！？わかつた。すぐに各部隊を集めろ。・・・アニエス隊長、そういうわけです。我々も急いで出動準備を整えるので、あなたたちも準備してください。」

「わかりました。銃士隊集合！！」

アニエスが部隊に整列をかける。続いて梶田も命令を発する。

「義勇軍各部隊集合！！」

緊急の命令が出され、両軍の動きが慌しい物となつた。

そして、義勇軍にとつては思いもかけない初の王室からの要請に

よる戦闘参加であった。

緊急出動！－連合歩兵隊 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回の話はかなり趣味を丸出しにしてしまっていい下さいません。
ちなみに、この話の時系列は現在の本篇から見て少しあとの話です。
次回はシェスターも少しですが登場予定です。

緊急出動！－連合歩兵隊 下

出動準備を終えた義勇軍歩兵部隊は、トラックやジープ、サイドカーといった車両に乗り込み、次々と出発した。ちなみに、これらトラックやジープはこちらに持ってくる際、すべて自衛隊の車両に近い迷彩色に塗り変えられており、以前どのように使われていたのかは全くわからない。

彼らは基地を出ると、複数のグループに分かれて行動する。これは王都トリスターニアへは向かわず、それぞれ街から少しあなれた街道を封鎖する事にしていたからだ。

一方空からの監視も加わる。既に歩兵部隊同様、連絡を受けた航空部隊から複数の機体が飛び立ち、歩兵部隊を空から掩護することになっていた。

出動から30分ほどで各街道を封鎖した義勇軍歩兵隊は、早速王都からやって来る馬車や人の臨検を始めた。その間にも、基地を通じて詳しい情報がもたらされた。

今回襲撃を受けたのはガリア大使を乗せた馬車で、トリスターニア中心部を走っていた所でテロに遭つたらしい。しかも相手は風魔法を使つてきたらしいので、明らかにメイジだった。幸いと言えたのは、死者はなく、護衛の騎士が2名負傷しただけだった。

しかしこれは少しばかり厄介な事だった。

現在ガリアとトリステインの関係は必ずしも良好ではない。アルビオン解放戦争以後このかた、トリステインとアルビオンは政治的にも経済的にもその結びつきを強くしつつあった。それが表向き、ガリアやゲルマニアを刺激する形となっていた。

さらに両国に駐屯する『東方義勇軍』の存在も、その疑惑の火に油を注ぐ事となつた。

もつとも、実際の所ガリア王ジョゼフにそのような深い考えはなかつたのであるが、とにかくガリアとトリステインの仲は悪くなる一方だつた。そして今回のテロ事件である。

もし犯人を捕まえなかつたら、ガリアが国際信義に反する行為として、なんらかの強行手段を取つて来ることだつて考えられた。

だからなんとしても犯人を逮捕して、ガリア側に引き渡す必要があつた。

そう言つわけで、出動した各近衛部隊はそれこそ血眼になつて犯人を追つたのであるが、犯人は中々見つからなかつた。

そんな中で、義勇軍歩兵部隊は各部隊無線連絡を取り合いながら行動する。

「こちら第一分隊隊長ニコラ少尉。現在トリスターニア西方の街道を封鎖中。今の所不審者はなし。各部隊状況を教えてください、どうぞ。」

するとすぐに返答がなされた。

「「」から第一分隊山下中尉、東方街道上を封鎖中。同じく異常なし。」

「「」から第二分隊ローレンス少尉、北方街道上を封鎖中。同じく異常なし。」

「「」から第五分隊内田少尉、南方街道上を封鎖中。同じく異常なし。

無線から各部隊の状況が伝わってきた。

それを聞き終わると、一〇四は無線機の送信機を置いた。そして胸のポケットから紙タバコとマッチを取り出して吸い始めた。

一〇四是義勇軍の兵士が、地球出身か平民の貧困層者出が大半といつ中で、元傭兵出身という比較的珍しい経歴を持っている。5ヶ月前のアルビオン解放戦争では独立大隊付き軍曹として従軍し実戦参加、義勇軍以外では数少ない武勲勳章を授与されている。

その後王室軍に見切りをつけて義勇軍に入隊した。そしてその実戦経験を買われて少尉に任命されて、分隊長となつた。

ちなみに義勇軍の兵士は、彼のような王室軍からの編入者や実戦経験者を除く全員がまず3等兵として登用される。そして3週間の基礎訓練で成績優秀者はそのまま1等兵か兵長となる。さらに1等兵曹までは1年から半年単位で自動昇進し、そこから先の尉官昇進は戦功などから判断されることになつていた。その他にも賞罰によつてや成績優秀者には特別昇進がある。

これは軍隊としては少しおかしな昇進人事であるが、もともとが士官や下士官専門の養成制度を持たないことと、部隊全体が少人数

であるために、これで一応成り立つてゐるのであつた。

「隊長、本当に犯人は来るんでしょうかね？」

1人の若い兵士が一団にそんな質問をしてきた。

「そんなこと俺にわかるわけないだろ。来るかもしれないし来ないかもしないとしか言いようがないよ。とりあえず相手はメイジらしいから、心構えだけはしておけ。わかつたなオーウェン1等兵。」

「わかりました。」

兵士はさつと敬礼すると、仲間たちのもとへと歩いていった。

初陣のせいか、兵士達はどことなく緊張していた。一団はそんな兵士たちに発破をかけつつ、自分自身このような任務は始めてであつたから、若干の戸惑いがないわけではなかつた。

その後1時間ほど、彼らは時折王都の方向からやつてくる車両や人間を臨検したが、いずれも白だつた。

その場を通る人々は、彼らの多くが義勇軍と知ると「お勤めご苦労様です。」と言つて頭を下げていつた。人々の義勇軍に対する人気は相変わらずであつたが、こうしたことが兵士たちの士気をさりげなく上げているのだった。

しかしそれ以外に動きはなく、兵士たちも退屈を感じてきたようだ、手空きの兵士達は地面に車座になつてトランプやチェスをして時間を潰し始めた。

「うしたけだるい空氣は、実戦配備中の軍隊としてはちょっとまづいが、状況に変化がない以上、仕方がなかつた。

そして動きが現れたのは、街道の封鎖を始めてから2時間ほど経つた時だった。

「こちら歩兵部隊隊長梶田！…全部隊に告げる！！銃士隊が目標らしき人間を発見、これを追跡中！…」

「コラは直ぐに無線機の送信機を取つた。

「目標の現在位置報せ！…」

「目標はトリスターニア中心部より場所を西方方向に逃走中！…相手は一人組のメイジだ！！現在銃士隊が追跡しているが、魔法攻撃を受けて負傷者が出てている模様！！第二分隊は必ずこれを止めろ！…」

「了解！…」

「コラは荒らしく送信機を置くと、すぐに兵士たちに命令を下した。

「お前ら！…直ぐに車とトラックを街道に横向きにして並べろ！…完全封鎖するんだ！…それとサイドカーはいつでも追える様にしておけ！…」

彼の言葉に、今までのんびりしていた兵士達が飛び上がつた。

「了解！…」

兵士達は車やトラックに飛び乗るとエンジンを起動し、街道に並ぶ。街道と言つても馬車が2台ならべるほどの幅しかない道だ。ジープとトラックが一台ずつあれば事足りる。

それを見廻ると、二台は周波数を操作して再び無線機を取つた。

「上空の航空部隊！ 一番近い機は誰だ？ 航空支援を要請する……」

するとすぐに戦事が帰つてきた。

「ひがら航空部隊シエスタ特務兵長機です。現在トリスター・アの西の上空を飛行中です。」

「ひがら歩兵部隊の一〇四少尉だ！ 西に向かつ街道の5km地点にいる、直ぐに来てくれ……」

「わかりました。直ぐに行きますね……」

ビーチが調子が狂つ可憐らしい返事をされたので、二台も面食らつたが、とりあえず航空支援を取り付けたので、『気にしない事にした。

「ああ！ 着やがれ！ …」

二台は街道の東、トリスター・アの方にじっと目を凝らした。

緊急出動！—連合歩兵隊 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

追跡！！ 上

無線交信から一分ほどして、一コラたちの真上に一機の複葉機がやつてきた。空に溶け込むように塗られた青色の塗装に、主翼と胴体に描かれた百合のマーク。義勇軍の機体だった。

「いらっしゃエスタ、上空につきました。このまま旋回に入りますがよろしいですか？」

先ほどの少女の声が無線機から流れる。すかさず一コラが返信する。

「一コラ、そうしてくれ。もし一味がここを突破したら空からの追跡と、出来るなら支援攻撃を頼む。」

「了解です！！」

一コラは送信機を置き、空を飛ぶ複葉機を眺めた。

「女神様の登場か・・・」

「コラはもうボソッと呟いた。

女神様と言つのは、シエスタに与えられた隊員たちからの愛称である。

菅野中佐からその能力を見出された彼女は、その期待に見事に答えた。なにせわずかな時間で飛行に必要な計器類の読み方等の知識をマスターし、飛行開始20時間で単独飛行を成し遂げ、50時間

で一人前と認められた。

これは異例の事だ。機械文明が全く発達していなかつたこの世界の人間で、ここまで早く一人前のパイロットになれるとは誰も予想していなかつた。旧日本海軍でも飛行時間が100時間でようやくひよっこ扱いであつたから、教えた菅野中佐もビックリであつた。

ちなみに、彼女と同時期に訓練を開始したパイロット練習生は30名ほどいた。この世界でもパイロットは人気が高かつた。これまでメイジの専売特許であつた空を飛ぶという行為を、平民にも可能にしたこの職種に多くの人間が募集してきたからだ。

しかし、まず文盲という時点で9割以上が脱落し、さらに模擬飛行で体質的にあまりにも適さない人間も落とされ、先ほどの人数になつた。そうして残つた人間でも、機械に触れた事がない人間ばかりであるから、養成には手間取つており、現在までに単独飛行可能と認められた人間は、シェスタを除いてたつた2人だけだつた。

だからシェスタが、義勇軍養成パイロットで卒業した最初のパイロットだった。

ただし、彼女は制式に義勇軍には入つていない。彼女は今もつて、スカラロンから頼まれた『魅惑の妖精亭』の支店店長であるのだ。だから常にパイロットでいられる人間ではない。

しかし彼女の腕は捨て難い物だつた。そこで基地司令官の才助は、特務兵と言つ新たな階級を作つた。これは、簡単に言えば予備役身分のことだ。非常時にのみ兵隊として呼集され、平時は指定された訓練時以外は普通に民間人として暮らすというもので、予備自衛官をヒントにしている。だから旧日本海軍の特務とは意味が全く異なる

る。

現在のところ、この特務兵はシエスタあわせて数人だけである。ついでに本来なら1等兵が妥当な彼女が、2段飛びの兵長であるのは、非常に腕が良かつたことによる。

そんな彼女、訓練のときに面倒くさがって妖精亭で着ているビスチエのまま基地にやつてくることもあつてか、兵士たちの憧れ的になつていた。それが女神様の愛称の元である。

そんなわけで、現在ほとんど彼女の専用機になつているP-02練習機の尾翼には、白ペンキで長槍を持った戦乙女の絵が描かれていた。

閑話休題。

そのシエスタ機が支援に到着してから数分後、トリスターニアの方から何かが近づいてくるのが見えた。

「おいでなすつたな・・・総員配置につけ!!」

一ノコラの命令が飛び、兵士達が銃を持ち、スライドを引いて初弾を装填する。そこへ再びシエスタからの連絡が入る。

「いらっしゃりシエスタです、数頭の馬が来るのが見えます。前に2頭並んで走つてます。その後ろは銃士隊の方のようです。」

「了解!・・・となると軸線が銃士隊に重なるな・・・」

そうなると、味方撃ちを演じる危険性があつた。

「全員発砲は極力控えろ！－まず音響閃光弾で攻撃する！－」

－「コラは対メイジ戦法の常套手段となつたある音響閃光弾による攻撃を選んだ。この攻撃は敵の目と耳を塞ぎ、たとえ呪文を詠唱できたとしても狙いがつけられないことからこの時点でも有効な戦法だった。

－「コラの命令を受けて、兵士達は持っていた音響閃光弾を取り出した。

その間に、銃士隊に追われた犯人と思われる二人組と銃士隊の姿が、肉眼でもわかるようになつた。

「来たぞ！－！」

街道はトラックによつて塞がれている。相手には止まるか、それとも道を反れるかしか道はない。

「ジープと、サイドカーはいつでも発進できるよつとしておけ！－！」

「了解！－！」

兵士達がエンジンを掛け、いつでも発進できるよつとしておぐ。

相手との距離がどんどん近づく。その距離は50m程にまで迫つた。その時である。先頭を走っていた2頭の馬は一歩に分かれて、道を反れた。

「道を反れたな。ようし、追え！－！」

「二コラの命令のもと、エンジンをかけていたサイドカーとジープがエンジンを全開にして追尾を開始した。

敵は道をそれると、そのまま森の中へと入った。その後をアーチス率いる銃士隊の5騎の馬、そしてジープ1両とサイドカー3両が追う。また空からはシエスタが旋回して、敵の逃走経路を探り当て、下にいる義勇軍の兵士達に無線越しに伝える。

「相手は森の中をひたすら西に逃げています。そのままとにかく西へ向かつて追つてください！」

「了解……」

道なき道を走っているために、激しく揺れるジープの上で、二コラはなんとかシエスタに返答を送る。さらに、ダイヤルを回して、味方にも通信を送る。

「二コラ隊長の一コラだ。トラックの連中は先回りして展開しろ！ 敵はもう一度街道沿いに出るかもしねれない。とにかく街道を西へ行け！－」

命令するだけ命令するど、二コラは無線機置き、逃げる敵を凝視した。敵は巧に森の中を左右に走り、後を追う銃士隊と義勇軍を時こつとしている。

狭い森の中での追跡は難しい。木にぶつからないために、二コラらはいきおこスピードを落とさざるを得なかつた。

「相手はプロか？」

敵の動きを見ながら一一コラは呟いた。

敵との距離は開いてはいないものの、縮みもしない。

「隊長、このお詫び壇があれあれなんやー?」

運転している1等兵がそう語ってきた。

やうだな・・・がい」 かよ」と書かれてある。」

「コラは激しい運転で揺れるジープの上になんとか立ち上がり、備え付けられている12.7mm重機関銃のスライドを引く。

- < . . .

激しく揺れて、しかも間に銃士隊の騎馬がいるためになかなか発射するタイミングを掴む事が出来ない。それでも一コラはなんとか撃てる瞬間が来るのを待つ。

そして2分ほどして、ようやくその瞬間が訪れた。ジープの動揺が少しあまり、さらに敵との射線が確保された。

「おめでたす！」

「コラが引き金を引いた。

T₁ T₂ T₃ T₄ T₅

重々しい重機関銃の発射音が森の中に響きわたり、曳光弾の作つ

た赤い線が走つていった。

追跡―― 上(後書き)

御意見・御感想お待ちしています。
それにしても、長引いてしまった。

追跡！！ 下

重々しい重機関銃の発射音が森の中に鳴り響いた。

発射された12・7mmの銃弾は、残念ながら命中しなかつた。揺れる車の上で、しかも木が林立する森の中で撃つたのが原因だつた。ただし、赤い曳光弾は相手にそれなりに恐怖心を与えたのか、すこしづかり動搖して馬の足並みが乱れた。

そして。

ドスン！

2人の内、後ろを走っていた1人がバランスを崩して落馬した。

「よつしゃーー！」

ニコラが歎声を上げる。だが、落馬した人間は無傷なのか直ぐに立ち上がり、今度は走つて逃げ始めた。しかも、もう1人とは別の方に向く。

「2手に分かれたか・・・」

隊を2分しようかと一瞬考えたニコラだが、後ろから声を掛けられた。

「あいつは我々にお任せを！あなた方はもう1人を頼みます！！」

後ろから追いかけてきたアーネスが叫んだ。

「了解！全員、落馬した野郎は銃士隊が引き受けてくれるそうだ。
俺達はこのままもう1人を追うぞ！！」

というわけで、二「」から義勇軍歩兵部隊は馬で逃げるもう1人を追う事にした。しかし、やつぱり森の中では車やサイドカーより馬のほうが小回りが利く。離されはしないが、距離も中々縮まらない。もう1回威嚇射撃するのも考えたが、同じ手が2度利くか不安である。

「参ったな・・・」

そこで二「」は再び無線機のスイッチを入れた。

「二「」だ。シエスタ兵長、俺たちが見えるか？」

二「」は上空で旋回しているはずのシエスタを呼び出した。木々のせいで二「」からは見えないが、プロペラとエンジンの音が聞こえているから近くにいるのは間違いない。

「二「」シエスタです。はい、見えています。」

「森を出るまでもうどれくらい距離があるかわかるか？」

「そうですね・・・300m、あ、いえ、300メイルですね。」

義勇軍では通常地球で使う単位を使っている。そのためシエスタはわざわざハルケギニアの単位に言い直した。

「別に同じ義勇軍だから言い直す必要はないのに・・・まあ良い、

じゃあシエスタ兵長、向こうが森から出たところで威嚇射撃をしてくれ。別に当てなくて良い、向こうの足止めになればそれで良い。」

「一ノコラはシエスタに、空中から支援攻撃をするよ」要請した。

「わかりました。」

シエスタの返事を確認すると、一ノコラは無線機を置いた。

一ノコラたち歩兵部隊は、とにかく相手を追つて森から追い立てようとする。獲物のウサギを追う犬のように。

その途中でサイドカーが木にぶつかって横転し、他の1台が救援のために落伍した。そのため、最終的に追跡しているのは一ノコラのジープと、サイドカー1台だけになった。

そして木が途切れ、森から出るところに犯人が差し掛かるのが見えた。その直後。

グワーンー！タタタタ・・・

飛行機のエンジン音と、軽快な機関銃の発射音が聞こえた。間違いない、シエスタの飛行機による機銃掃射だ。ちなみに銃の音が軽快なものだったのは、彼女の乗っているP-2の搭載機銃が7mmだからだ。

「やったなーー！」

そしてすぐに無線で連絡が入ってきた。

「やりました！…今度こそとつ捕まえるぞ…！」

「よひし…今度こそとつ捕まえるぞ…！」

部下を叱咤し、一団たちも森の外へと出た。そして視界の中に、馬から落馬し、先ほどの男と同じように走つて逃げようとする男の姿が入ってきた。一団はある程度距離が縮んだ所でジープを止めさせた。

「止まれ！…もう逃げられないぞ…！」

一団が12.7mm機銃の銃身を向けて言い放つた。だがそれに対して、男は懐から杖を出した。

「メイジか！？後退！」

そして数秒後に飛んできたのは、鋭い空氣の矢だった。幸い相手がジープの動きを読みきれなかつたのか、当たりずに済んだ。

「野郎、舐めやがつて！…メイジだからつていい気になるなよ…！」

平民傭兵の一団は拳を震わせて呟いた。

「全員あつたけの音響閃光弾を投げつけろ！…それと例の新兵器もだ！…」

「…ア解…！」

彼と部下達は一齊に音響閃光弾と、新兵器である催眠弾を投げつけた。それと同時に一団はサングラスを掛けて指示する。

「全員目を閉じて耳を塞げ！！」

全員分のサングラスがあれば良いのだが、生憎とそれだけの数はまだ揃えられていなかつた。

そして次の瞬間凄まじい閃光と音響、さらに白い煙が場を包んだ。白い煙は今回初使用の新兵器、催眠弾によるものだ。

催眠弾は科学研究所の研究員の1人が、地球から持ち込まれた催涙ガスをヒントに開発したもので、対メイジ用の兵器の1つである。ちなみに化学薬品で調合された物と、アカデミーの協力で作られた魔法薬で調合された2種類が開発されている。実験では魔法薬のほうが強力だが、持続性の調整が出来ないというデメリットがあつた。

付け加えると、このガスは化学薬品、魔法薬かまわずガスマスクをしていれば効かない。そして魔法役バージョンの方は、煙を無色無臭にする研究も進められている。

今回はその両方を混用して使つた。もつとも、1個でも人間相手なら充分なはずだから、数個も投げるのは明らかに過剰である。

「どうだ！？」

二コラが犯人のいたあたりを見るが、催眠弾の発した煙のせいで見えない。そして、煙が晴れると、男が倒れて眠りこけているのが見えた。すかさず、兵士達が捕縛する。

「よつしゃー！」

彼は笑顔になると、無線機を掴み取った。

「一から第一分隊二コラ、残る犯人の一人を捕縛した。繰り返す、残る犯人の一人を捕縛した！！」

任務完遂の叫びが、無線機を通して義勇軍中に知れ渡った。

銃士隊が追つた犯人の方も捕まり、ガリア大使襲撃事件の犯人は全員捕まつた。義勇軍歩兵隊司令の梶田少佐は、アニエス銃士隊隊長とともに王室から派遣された衛士に犯人を引き渡した。

「本日はお互に無事損害もなく任務成功でしたね、アニエス隊長。さすが精銳の銃士隊だけある。本当に感心しました。」

「いやいや、あなたがたこそ武器もさることながらよく訓練されていましたよ。」

お互いの部隊を褒め称える二人。

「しかし、義勇軍の使っている装備はすごい。我々も是非とも欲しい。」

アニエスには、義勇軍基地や今日の追跡劇で見た兵器の威力に感心し、やはり自分たちも使えたらと思った。しかし、それはかなわぬことだと考えていた。

ところが、梶田から思いも寄らない言葉が発せられた。

「もしかしたら、さすがに重機関銃や無反動砲は無理でも、近々あなたがたにも小銃や手榴弾が供与されるかも知れませんよ。」

「えー？」

いきなりの梶田の発言に田が点になるアニメス。

「アルビオンに造った工場がなんでも稼動を開始したそうですから。生産にいくらか余裕が出たとかで、全員が平民から構成されているあなた方にならもしかしたら・・・まあ確実な情報ではありませんけど。」

「そうですか・・・しかしありが欲しいです。あの小銃や手榴弾があるだけでも、戦争が変わります。」

「ハハハ・・・そろかもされませんね。それでは本日はご苦労様でした。」

「ひづらこそ。」

2人はお互いに敬礼した。そしてこの会話の内容が現実になると、2人はまだ知らなかつた。

追跡一一 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ようやく本田テストが終了しました。再びバンバン小説を・・・
と行きたいところですが、来月は3日から7日まで広島へ行くので、
また更新が滞るかもしれません。

そして外伝のネタがまた死んでいます・・・

マルトー親父の衝撃

トリステイン魔法学院で働くマルトー料理長は、かなりレベルの高い料理人である。日々メイジの子女たちが満足する料理を作り、教師のコルベールも彼に高い評価を与えていた。

そんな彼はハルケギニア世界の料理のほとんどを知っていた。しかししながら、さらに外の世界、ましてや異世界の料理など知るはずが無かつた。

学院内で『ゼロ』と言われるルイズの使い魔である平賀才人。彼は平民の使用人たちからは一時期、ギーシュとの決闘に勝利したことや、『土くれのフーケ』を捕まえた事から、『我らが剣』と呼ばれていた。ある日その彼の両親が突然魔法学院に現れた。まあ、そのこと自体は特にマルトーの知ったことではないし、その彼女の母親の瑞江が調理場で仕事を手伝うようになったことも、別段仕事をちやんとしてもらえれば、気にすることではなかつた。

しかし、彼女が働き出して数日後、彼は生まれて初めてみる光景に大いに驚かされることとなつた。

その日、瑞江は厨房の一角で借りた道具を使って料理をしていた。既に彼女が異国の人間であることを知っていたマルトーらは、彼女が一体どんな料理を作るのか興味を持ち、遠巻きにその様子を見ていた。

ところが、彼女はまず米を水でどぎ、さらにそれを鍋に水とともにいれて炊き出した。一応ハルケギニアにも米はあるにはある。しかし、それを主に使うのは炒め物などで、炊いて食べたりはしない。

さらに、彼女がご飯を炊きながら横でスープのよつなものを作り始めたが、それもまたマルトーらには理解が苦しむ料理だった。まづダシを取るのににやら小魚のミイラのよつな物を入れ、さらにその後には茶色の塊を溶かして混ぜていた。またそのスープの具も肉はなく、ニンジンや大根と言った野菜ばかり入れていた。

ここまで来ると、一体何を作っているのかさっぱり検討がつかない。

「ねえ料理長、あの人は一体何を作っているんでしょうね？」

部下の1人が首をかしげながら聞いてきた。

「俺にもわからん。あんな料理、俺も初めて見る。」

マルトーも首を傾げざるを得なかつた。

そしてしばらくして、彼女は炊けたご飯とスープを鍋に入れたまま持つて、厨房から出よとした。ここでマルトーは、彼女に一体何を作ったのか聞いてみる事にした。

「おー、あんた？」

「はい?なんでしょうか?」

「あんたが作つたその料理、一体なんだい?」

すると、瑞江は笑顔を浮かべて言った。

「ああ、そんなことですか。さっきから変な視線を感じると思ったら、眞さんそんなことを気にしていたのですね。これはご飯と味噌汁です。」

「ミソシル？」

マルトーは怪訝な表情をした。そんな名前のスープは見たこともなければ聞いたこともない。

「そうです味噌汁です。あ！ヨーロッパに近いこの世界じゃ味噌がないって才人が言つてたわね・・・知らなくて当然か・・・飲みたいのならまた作つて差し上げますので。今はこれを旦那と義祖父に持つていかなければいけませんから、失礼します。」

結局この時は、マルトーらミソシルなるスープがどんな物か確かめる事は出来なかつた。しかし、数日後瑞江は約束どおり彼らに味噌汁を作り、彼らに振舞つた。

マルトーらハルケギニア出身の人間達は、渡された茶色の野菜ばかりが浮かぶ異様な外見のスープを最初は怖々と飲んでいたが、一口飲んで直ぐにその感情は払拭されて、夢中で飲み始めた。

「あ、おいしくー！」

「変わった味だけど、これはこれでいいけるかも・・・」

「うん、美味しい！」

口々にそんな感想を漏らし始めた。

マルトーも少しばかり感心した表情で味噌汁を飲んだ。

「こつは・・・初めて飲む味だな。だが美味しい。結構濃い味がするのに、しつこさはない。それに野菜ともよく合っている。一体どんな材料で作っているんだ?」

マルトーはこれまでの知識を総動員してこの料理の正体を考えてみるが、見つかるはずが無かつた。

あーだこーだと呟くマルトーに、瑞江が言った。

「お悩みのようですね。これは名前そのまま、味噌で作ったスープです。」

「ミソ?」

「味噌とこつのは、大豆を発行させて作った私たちの国の調味料です。」

その説明に、マルトーは驚きを隠せなかつた。

「なんと…それじゃあこのスープは全部野菜で出来てゐるのか?」

マルトーは味噌汁の味が濃いので、肉をビコカで使つていて予想していた。その予想がもの見事に裏切られた形となつた。

「まあ、最初はダシは煮干を使いましたから100%野菜で出来ている訳ではありませんが。」

「煮干?それはあの魚のミイラかな?」

「魚のミイラですか、そんな表現で言われるのは初めてですけど、確かに見た目も中身もそつですね。あれは小魚を干した物ですから。」

「なるほど・・・けど、こんな料理初めて見たぜ。ハルケギニア中探したってこんな料理はないはずだ。『我らが剣』といい、あんたら一体何者だい?」

さほど気にしてはいなかつたが、自分の専門分野と関係していると人間気になるものである。彼は料理と言う面から、瑞江達の正体が気になつた。

しかし、それに対して瑞江は笑いながら。

「うふふ、秘密です。」

とだけ言つた。またマルトーも、それ以上は詮索しなかつた。

「そうかい。しかし、その味噌つて言つのは一體どうやって作るんだい。俺はこいつの味が氣に入った。是非とも自分で作つてみたいんだが。」

すると、瑞江は今度は困つた表情をした。

「さすがに、作り方までは・・・また調べておきます。」

この時は結局それで2人の会話はお終いであつたが、この後瑞江

は魔法学院にいる間に多くの料理をマルトー親父に伝授していった。肉じゃがやロールキャベツ、カレー、ハンバーグ、コロッケなど、それはもう多岐に渡った。最初の頃は、地球から持ち込んだ味噌に醤油、みりんと言った調味料を使っていたが、その後作り方がわかると、マルトーはそれを自分で作り始め、瑞江がトリスターニアで開いた店へ卸すまでとなり、一種の逆転現象が起きた。

また、マルトーは瑞江から習つた日本料理だけでなく、自分で自由にアレンジした料理などを魔法学院のメニューに加えるようになり、それによつて貴族たちの間で一種の日本食ブームを巻き起こすことになり、ひいては味噌や醤油と言つた日本産の調味料や、各種の日本料理がハルケギニアに広がる原因となるのだが、それはしばらく後に起きた別の物語である。

さらに付け加えると、数年後のこととなるが、魔法学院を退職したマルトーは、トリスターニアにハルケギニア初めてとなる料理学校と食品生産会社を作り、それなりに成功したという。

マルトー親父の衝撃（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ティファニアの使い魔召喚 上

アルビオン解放戦争が終わってからしばらくして、シティ・オブ・サウスゴーダ近郊の新たな領主となつた平賀才吉公爵のおかげで、それまでひつそりとアルビオンの森の中で暮らしてきたハーフエルフの少女であるティファニアは、外の世界を見ることが出来るようになった。もちろんハルケギニアでは不俱戴天の敵（厳密にはメイジにとつては）として扱われるエルフの尖った耳を持つ彼女が、公にその姿をさらすことなどできはしない。しかしながらこそどはいえ、外の世界を見られるようになつたことは彼女にとって大きかつた。

そんな彼女は才吉の勧めもあって、これまで住み慣れたウエストウッド村を子供たちとともに離れて、彼らともども今は才吉の屋敷に住まわせてもらつっていた。ただしそれまで色々と自分自身の力で働いてきた彼女にとって、ただ養つてもらうということは出来なかつた。

彼女は時には屋敷の仕事を手伝つたり、時には義勇軍で不足していた臨時野戦看護士などの仕事をしたりと精力的に働いていた。特に義勇軍の仕事を手伝つてシティ・オブ・サウスゴータ郊外にある同軍基地に出入りすることが以外に多く、一部の兵士からは「南の女神シエスタ、北の女神ティファニア」とまで言られた。

ただし、それで良いことばかりが起きたわけではない。確かに義勇軍基地に入る事で多くの人と交流を持つことが出来たし、また時折飛んでくるトリステインとの連絡便に乗つてミライの町（トリステニア近郊の義勇軍基地の側に出来た町）へ遊びに行く事も出来た。

しかし、彼女の整つた顔立ち、長く美しい金髪、そしてどうやつて支えているのか不思議に思つくらいの、ぶつちやけ在りえない大きさの胸は男の氣を引いてしじょうがなかつた。彼女が行く所全てで、食えた狼のごとし男どもの視線があつた。だが、長く世間から離れて暮らしていて天然の彼女は、生憎とそうした視線に気付くことが出来なかつた。

それに気付いて行動を起こしたのは、彼女の義理の姉とも言つべきマチルダだつた。彼女がある日義勇軍基地で働く彼女の様子を見に来た時のこと、彼女はティファニアに向けられている鋭い視線をいくつも感じた。そして彼女はすぐに気付いた。

(ティファニアが狙われている！—)

このままでは義理の妹の貞操が危ないと悟つた彼女は、どうするべきか悩んだ。まさか彼女に四六時中ついているわけにも行かないし、かといって折角働いている義勇軍から離れさせるのもまづい。第一義勇軍から離れたところで、問題の根本的な解決にはなつていな。彼女をどう守るかが肝心なのだ。

と、そこで彼女はあることを思い出した。それはティファニアがメイジであることだつた。ちなみにその事を知っているのはマチルダとオ吉、オ人、ルイズくらいのじく限られた人間であつた。

さらにこの時点では、彼女が『虚無』の担い手であることに気付いている者は皆無だつた。古い付き合いであるマチルダさえ、彼女が使つた魔法を四系統の魔法のどれか、もしくはその中でも新たに発生した何かと考えていた。

とにかくメイジであるなり、使い魔を呼び出せる筈である。もちろん、どんな使い魔が出るかはわからないが。それでも四六時中付いてくれる使い魔であれば、なんらかの役に立つはずだ。

「やうと決まれば、明日にでも早速あの娘にやらせてみるか。」

そう結論を下した彼女は早速、翌日平賀公爵の屋敷に着つて彼女に会つた。

「テフア、あんた使い魔を召喚してみたらどうだい？」

自分の部屋にやってくるなり、開口一番そつ告げた彼女に、テファは少しばかり困惑した。

「ええと、いきなりどうしたのよマチルダ姉さん？」

「うん？ いやね、最近あんた大分忙しくなったように見えたからね。それに世の中まだまだ物騒だし、だから手となり足となる使い魔があんたにもいた方が良いんじゃないかなと思つて。」

テファからの反論は計算済みであつたマチルダが、あらかじめ考えていた理由を言つ。もちろん、半分は嘘だ。

「うーん……確かに忙しくなったと言えば忙しくなったのかな？ けど、子供たちを世話を時間が減つたから必ずしもそういう気もするけどな……」

先ほどの会話の内容を真正面から捉えて考えるテフア。

「まあ、とにかくやるだけやってみたらどうだい？別にいて悪いってことじゃないだろ？」

彼女に積極的になつてもひひみづ、わづはづマチルダ。

「それはそうだけど・・・けど、魔法なんかほとんど使つたことのない私にちゃんと出来るかしら？」

今度は別の心配にし始めるテフア。このままでは埒が開きそうしない。マチルダはなんとか彼女をその気にさせようと/orする。

「だったら、とりあえずやつてみよ。なんなら私がお手本示すかう。」

この時点で、マチルダには使い魔は存在していなかつた。彼女はまず自分がお手本を見せることで、彼女を安心させる方法を選んだ。

「そこまで言つなら、やつてみようかな・・・」

どこか歯切れの悪い感じがしたが、とりあえずマチルダは彼女が使い魔召喚するように持つていふことが出来た。

その日の晩、平賀家屋敷近くの森の中で、2人は使い魔召喚の儀式に挑む事となつた。

「我が名はマチルダ・オブ・サウスゴータ……」

数ヶ月前、ルイズらがしていたのと同じように杖を構えて、呪文を唱えるマチルダ。もなく目の中に鏡のような物が現れ、その中から何やら棘がたくさんついた生物が現れた。

「マチルダ姉さん、それは？」

怖々と聞くテファ。

「これは・・・ハリモグラだね。普通のモグラと違つて穴を掘るスピードが速いし、地上での攻撃能力も高いわ、中々良いのが来てくれたわね。」

彼女は早速そのハリモグラと『コントラクト・サーヴァント』を行い、主人と使い魔としての契約を交わした。

「ほら、結構簡単なもんだよ。テファもやっていらん。」

「ええ。」

使い魔召喚を無事終えたマチルダをみて、テファも安心したようだ。彼女は一步前に出ると、まるで鉛筆のような小さな杖を取り出して、さっそく儀式を開始した。

「我が名はティファニア・・・」

マチルダと全く同じように呪文を唱えるテファ。間もなく、彼女の目の前にも鏡のような物が現れた。それはマチルダの時の物よりも大きくなり大きく見えた。

(一体この娘は何を召喚するのかしら、水系統みたいだからカエルか何かしら? けどそれにしちゃゲートが大きいような・・・)

マチルダはティファの『忘却』を水系統の魔法と勘違いしていた。

そしてゲートが開いて凡そ10秒後、それは現れた。

「痛! ! !」

ガシャンという音と共に地面に尻餅をついたその生き物の姿を見て、マチルダも召喚した本人であるティファニアも目が点になってしまった。

「「に、人間! ?」」

ゲートから現れたのは、どうみても20歳前後の若い黒髪の男であつた。しかも、義勇軍で使つてているような野戦服（これは迷彩服のこと）に身を包み、銃らしきものを抱え、さらになにやら多くの荷物を肩からぶら下げていた。

これが4番田の『虚無』の担い手であるティファニアと、その使い魔となる葛西豊との出会いだった。

ティファニアの使い魔召喚 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なお、ティファニアが召喚したキャラは、以前読者より提案されたキャラクターを使っています。なお、彼の使い魔としての能力がまだ決まっていないので、意見があつたらお寄せください。

ティファニアの使い魔召喚 中

ゲートから現れた青年、葛西豊は正直何が起きたかわからなかつた。政府軍にアジトが見つかり、周りにあつた武器の入つたバッグを持てるだけ持つて走り始めた直後、目の前に鏡のような物が現れたのだ。既に勢いのついていた彼は止まることが出来ず、そのまま鏡の中へ入つてしまつた。

そして数秒後、彼は盛大に尻餅をついていた。

「一体何が起きたんだ！？」

彼は置きながら悪態をついた。

一方、その光景を見ていたマチルダとテファの2人は茫然としていた。まさか使い魔召喚で人間が現れるなど全く考えていなかつたのだ。

「・・・」

2人とも何を言つて良いのかわからず、ただ黙つて現れた青年の方を見ていた。

一方豊の方も、視界内に入つてきた光景に啞然としてしまつた。先ほどまでは確かに東京にいたはずであつた。それなのに、今日の前に広がっているのは透き通つた様な青空と、緑豊かな森の光景だつた。

「これはどうしたことだ！？」

理解し難い事態が起きたのは間違いなかつた。豊は周りの様子をさらに確かめようと、後ろを振り向いた。そしてようやく自分の側に2人の人間が立っているのに気付いた。

「うわ！？」

いきなり豊が声を上げたもんだから、マチルダとテファアが一瞬ビクッとしてしまった。

「あんたたち一体誰だ！？」こは一体どこなんだ！？」

豊に聞かれ、それまで黙っていたマチルダがよつやく口を開いた。

「私はマチルダ。こっちにいる娘はティファニア。別にあんたに危害を加える気はないから安心しな。それであんたの名前は？」

マチルダとティファニアという明らかに日本人離れした名前に違和感を当然のことく覚えた豊であつたが、とりあえず目の前の2人が政府の警察の人間でない事は理解できた。だから彼も大人しく名を名乗つた。

「俺は葛西豊。自由日本戦線のメンバーだ。さつきまで東京にいたはずなんだが、一体これはどうなつているんだ？もうわけがわからぬ。」

マチルダとテファアはもちろん自由日本戦線だの、東京だのと言わても理解出来る筈がなかつた。しかしながら、彼の名前を聞き、その発音の感じからして彼女らと縁深い平賀才人や山田明雄と同じ国の出身だらうなということは直感できた。

「ええと、言つてることの意味があまり理解できなかつたけど、あんたもしかしてニッポンていう国の人間なの？」

マチルダが確認する。

「わうだけど。」

すると、マチルダは顔を手で抑えた。義勇軍の人間とそれなりに縁深い彼女は、日本がハルケギニアとは違う次元に存在する国であるということを聞いていた数少ない人間であった。そしてその異次元へハルケギニアから帰る事が難しいといつことも。

「ええとね、ちょっと言はずらいんだけど、ここはハルケギニアっていう二ッポンていう国がある世界とは違う世界なんだよ。」

マチルダがそう言つと、豊は怪訝な表情をした。

「え？ つまり・・・ここは異世界だと仰りたいんですね？」

「まあ、そう言つ事になるかな。」

どこか歯切れの悪い言葉で返事するマチルダ。対する豊は、普通の人間であつたなら抱く心情をそのまま口にした。

「からかっているんですか？ そんなことあるわけないでしょ。」

何をバカなことを、と言いたげな表情でマチルダを見る豊。そこで彼女は、少し前に恋人の明雄から聞いたことを思い出し、もっと手っ取り早い手段でここが異世界であることを証明する事にした。

彼女は懐から杖を取り出すと、呪文を唱えた。すると、その途端すぐそばの地面の中から巨大なゴーレムが形成された。

「おおー!？」

こきなり現れたゴーレムに、腰を抜かさんばかりに驚く豊。その様子を笑って見ながら、マチルダは再び杖を振った。先ほどと同じように、唐突にゴーレムは消え去った。

「い、今のは一体?」

もはや何がなんやらわからないという表情で聞く豊。

「今のは魔法だよ。確かあなたの暮らしていた世界には魔法がないそうじゃないか? これならここが違う世界だと信じられるだろ?」

マチルダがそう言つと、豊は考え込んだ。今のがなんらかのトリックではないかと疑つたのだ。しかし、周囲には特に何かの仕掛けがあるようには見えなかつた。さらに、目の前の女性があのようなく仕掛けまでして自分を騙す理由も検討がつかない。挙句の果てには、もしかしてこれは全て夢幻の類ではないかと考えて、自分の頬をつねつてみた。

その結果は。

「痛い。」

それは今自分に起つてゐる事態が現実である事を示していた。そして彼は再び考えた。今自分は先ほどまでいた東京とはどう考へ

ても全く違つ場所にいる。そして目の前で女性が見せた魔法は本物の可能性が高い。この二つを併せれば、彼女が言つたここが異世界であるという言葉も信憑性の高い物となる。

最終的に彼の至つた結論は、「こじが異世界である可能性が非常に高い」といふことだった。

それがわかると、彼の疑問はどうしてこのような事態が起きてしまったのかといふこと、どうして彼女が日本のことを探っていたのかだった。

「こじが異世界だと言つことは、とりあえずわかつた。けど、一体どうしてこんなことになってしまったんだ？それに、なんで異世界の人間であるはずのあなたが日本のことを知つている？」

豊に聞かれて、マチルダが再び答える。彼女はとりあえず彼の質問の内、前者について答える事にした。後者については事情がやや複雑であるし、なにより詳しく述べる人間が他にいたからだ。

「ニッポンのことを私が知つていては、いろいろ説明しなくちゃいけないからまたゆっくり話すとして、どうしてあんたがここにいるかについては答えられるわ。あんたがこの娘の使い魔として召喚されたからよ。」

すると彼女は、それまで完全に蚊帳の外におかれていたティファニアの方へと視線を向けた。

「いったいどうしてんだ？ 説明してくれ？」

豊はテファの方へ顔を向けると、彼女に問つた。

「ええと、実は・・・」

いきなり話をふられたために、テファは戸惑つてしまつたが、すぐにしどろもどろになりながら説明を始めた。自分が魔法を使えること、この世界では魔法使いが使い魔召喚の儀式が慣例として存在すること、そして彼女が召喚の儀式を行なつたら彼が現れたことを話した。

説明を聞いている間、豊は何も言わずただじつと彼女の言葉に耳を傾けていた。そして彼女が説明を終えると、静かに聞きかえした。

「つまり、俺はあなたの使い魔としてこの世界に召喚されたってことか？」

「そういうことになるのかな・・・」

テファが言いにくそうに言い返した途端、豊は叫んでいた。

「それは困る！！俺は平和で人が幸せに生きていける日本を作るために仲間と一緒に政府軍と戦つていたんだ！！あいつらは今この瞬間も戦い続けているはずなんだ！！俺だけがこんな所にいるわけにはいかないんだ！！すぐに俺を元の世界に戻せ！！」

豊がテファに掴み掛からんばかりの勢いで言つ。それに対してもテファはたじろぎ、ただ・・・

「『』めんなさい。」

とだけ言った。

「謝る暇があるのなら、俺をすぐに日本へ戻してくれーー！」

彼は先ほどと同じことを言った。だが、彼に掛けられた言葉は同情な物だった。

「それは無理だよ。」

そう彼に言ったのはマチルダだった。

「えー？」

「あなたが元の世界へ戻るのは無理なんだよ。」

「それは一体・・・どうこいつなんだ？」

彼の質問に対し、マチルダは何も言えなかつた。

ティファニアの使い魔召喚 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ティファニアの使い魔召喚 下

召喚された日の夜、葛西豊は平賀公爵家の庭で1人夜空に輝く星を見ながら考え込んでいた。

「・・・・・」

あの後マチルダとテファに案内された屋敷で、彼は平賀才吉と引き合わされた。日本人が目の前に現れた事で、彼は再び驚くと共に喜んだ。もしかしたら帰れる可能性があるかもと考えたからだ。しかし、才吉が彼に語った話は彼のかすかな希望を粉々に打ち砕いてしまった。

才吉から言われたのは、元の世界へと戻れる見込みはほとんどないという無情な事実だった。彼の話によれば、才吉以外にも現在ハルケギニアには地球から流れ着いた人間は数多くいるが、元いた世界の次元はそれぞれバラバラで、唯一新月と日蝕を利用して手段で行き来出来るのは才吉たちのいた日本だけであるといつ。

才吉のいた日本について聞いた豊は、自分がいた世界の日本とは全く違う歴史を辿っている別世界であることをすぐに理解した。彼のいた独裁者によつて多くの人々が圧制され、数多くのレジスタンス組織が反政府運動を行なつていた日本と、才吉の天皇はいるが民主政治体制となつてゐる平和な日本とではまったく違つていった。

一応最近になつて研究がスタートしているので、元いた世界へ戻れる可能性はゼロではないらしい。しかし、現状では限りなくゼロに近かつた。こうした事実を突きつけられた時、彼の頭の中は真っ白になつてしまつた。

出された夕食を無理矢理腹の中へ入れると、彼は許可を貰つて庭で考え方をしていた。今後自分はどうするべきなのか、それが眼下の課題であった。

オ吉からは、彼ら地球からやつてきた人間たちが、この地で自らの生存権を確保するために、『東方義勇軍』を組織して戦っている事や、それ以外でも民生面でこの世界のために働いている事を説明された。もちろん、それに協力して欲しいとも言われた。

だが、いきなり飛ばされたわけのわからない異世界で、はいそうですかと簡単に答えられるはずがなかつた。とりあえず、その場はしばらく考えさせてくださいと言つて答えを先送りにした。

星空の下で考えてみると、頭の中に浮かんでくるのは元の世界で戦っていた戦友たちの顔ばかりであつた。彼らは今も苛烈な戦いに身を投じているはずである。それなのに、彼は何も出来なくなつてしまつたのだ。そして彼に出来るのは、このハルケギニアと呼ばれる異世界で生きていく事だけになつてしまつた。

「階に何でお詫びすれば良いんだろう・・・」

自分がだけがこうしてのうとしている事に、彼は自分自身が情けなくなつていた。もっとも、今回の件は不可抗力であり、どうしよつもなかつたのであるが。

そんな彼に近づく人影があつた。長年戦いの場に身を置いていた豊は、すぐにその人物ことに気付き、振り返つた。

歩いてきたのは、自分を召喚したという金髪の少女だった。

「ああ、確かティファニアさんだつたよね？」

彼を召喚したのは彼女だつたが、マチルダやオ古とばかり話していたせいで、彼女とはほとんど余話らしい余話はしていなかつた。

「ええ。ティファアで良いわ、豊やつ呼んでいるから。」

「やうか、じゃあ俺のことも豊で呼ぶよ。」

「わかつたわ。・・・あの、隣、座つても良い?」

「別に良いよ。」

豊に促されて、彼女は彼の隣に腰掛けた。

しばらくの間2人は無言であったが、ティファアがまず口を開いた。

「あ、あの・・・

「?」

「「」みんなさー。」

ティファアが突然頭を下げて豊に謝つた。これには豊も面食らつてしまつた。

「ちよ、ちよっと顔を上げてよ。なんだよこきなり?」

慌てて頭を上げるよつて言つた。ティファアもそれで頭を上げた。

「一体なんだよ？いきなり頭を下げる謝つて？」

「だつて、その豊を召喚したのが私だから・・・最初はよくわからなかつたけど、豊はここ（ハルケギニア）とは違う世界から来たんだよね？」

「ああ。」

実際それは間違いなかつた。しかし、豊は別にテファアに対しても恨みなどの感情は覚えなかつた。マチルダから、使い魔を呼び出した側が相手を指定する事は出来ず、その場の行き当たりばつたりであると聞かされていたからだ。

むしろ、本来召喚されることなどありえない人間である自分が呼び出されてしまつたことに、同情の念さえ抱いていた。

彼自身は、レジスタンス運動に身を投じてきた事もあり、銃をはじめとする近代兵器はおおよそ扱う事ができる。それに加えて、各種武芸もそこまで上手いというわけではない程度だが学んでいる。しかしそれ以外には特に特技も何もない一青年に過ぎない。それが現実であり、彼の自分に対する認識であつた。

しかしテファアはかなり今回の事を重く受け止めたようだ。これが普通のメイジだつたら、意識改革が進められているとはいえ、彼のことを魔法の使えない平民とバカにする可能性が高い。だが、彼女はそうした先入観に毒されてはいなかつた。

「だから、私のせいでこんなことになつたから・・・本当にごめんなさい。」

そう言つて再び頭を下げるテファ。

「顔を上げるよ。別に俺は今回の件があんたのせいじゃないと思つてゐる。確かに召喚の儀式をやつたのはテファかもしれないが、別に俺を狙つてやつたわけじゃないんだろ?」

「え? ··· うん。」

「だつたらそこまで深く考えなくて良いよ。今回のこと是一種の事故みたいなもんだろ? あくまで俺の運がわるかつただけで。だからテファが謝る必要はないよ。」

怒られると思つていただけに、この豊の言葉は意外だった。

「やせしーのね、豊は。」

「そつかな? ただ親からは人には寛容であれつて言われていたから。」

「

そう言つて彼は笑つたが、テファの方は親と云う単語を聞いた途端、表情を曇らせた。

「あれ、何か悪い事言つた?」

「え! ? いいえ、なんでもないわ。それより、豊はこれからどうするの?」

テファの問いに、豊は表情を険しい物にした。

「まだ、決めてない……正直どうすれば良いのか俺にもわからな
い。」

「あのね豊……その召喚しちゃった償いつてわけじゃないけど、
もし困っているのなら遠慮なく言つて。私の出来る範囲で、あなた
を助けてあげるから。」

そのテファのセリフを聞いた途端、豊はキヨトンとしてしまった。

「えー？あの、何か気にいらない」とでもあった？

「いいや、本来なら召喚された使い魔は主人の手となり足となつて
働くつて聞いたから。そんな言葉を主人になるはずのテファが言つ
なんて不思議だなと思つて……君つて本当にやせしいんだね。」

やせしことこ「言葉に、テファは少しばかり照れた。

「そ、そつかな？」「いや豊。実はあなたとの儀式の続きについて
なんだけど。」

この時点では、二人は僅聞の「いたのせい」で、まだ『コントラク
ト・サーヴァント』を終わらせていなかつた。

「ああ、マチルダさんがそんなこと言つていたね。」

「それでね、実は私はあなたと主人と使い魔つていう関係に別にな
りたいとは思わないの。さつき言つたこともあるじ。ナビ、友達に
はなつてほしの。それで良いかしら？」

すると、豊は即座に言い返した。

「ああ、正直俺も使い魔になるのはちょっと抵抗があつたから。けど、友達ならいくらでもなつてあげるよ。」

こうして、テファと豊は本来主人と使い魔という関係になるところを、友人という関係にするという、前代未聞の選択をした。そしてこれが後々ハルケギニアさえ揺るがす事態を巻き起こすのだが、それは別の話である。

それから数日後、悩みぬいた末に豊は義勇軍に協力する道を選んだ。銃器を扱える上に、シユミレーションで訓練しただけとはいえ、飛行機の操縦が出来る彼には少尉の階級が贈られた。

異世界に移動しても、軍人という仕事に就いた彼であったが、休日にはテファとともに子供たちと遊んだりする時間が出来た事に、彼は何よりも幸せを感じることになる。

一方で、彼もまたこのハルケギニアで起きている大きな歴史のつなりの中に身を投じていくこととなる。

ティファニアの使い魔召喚 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

豊の能力については先送りしてしまいましたが、考へていてる案としては、時空を自由に操る能力を考へています。

作者近況・・・ここ数日遊び続き。13日は「スカイ・クロラ」を見に行き、14日は自衛隊の友人と食事し、15日は名古屋の古本屋回り、昨日は伊勢神宮へ行つていました。そして明日は山梨へ一端帰ります。また小説が滞るかもしれません。

ハルケギニア海軍興亡史

ハルケギニア世界において、海軍が独立して存在しているという国は稀であった。なぜなら風石を利用して空中を航行する船が、そのまま着水して水上を動くことも出来たからである。そのため多くの国では空中と水上両方での戦闘を想定した両用艦隊として艦隊を運用し、その所管は主に空軍であった。海軍が存在する国でもその規模は小さく、後の世で言つ海上警察程度の実力しか有していなかつた。

そうした状況が実に6千年近くも続いたのである。

しかし、その状況に大きな変動が起きた。折しもそれはアルビオン内戦（又はアルビオン解放戦争）が終わつた直後のことであった。

この時期はハルケギニアといつ世界自体が大きな変革を迎えていく時代であった。そしてこれもその内の1つと言えるだろつ。

この時期、それまでの飛行船では風石の搭載量の限界から行なわれることのなかつた遠洋航海が試みられるようになつた。折しも異世界地球から流れ着いていた船が、燃料である重油や軽油の精製成功で動くよつになつたことがそれに拍車を掛けた。

この地球製の船、「ニギツ丸」は後の世で言つ航空母艦で、アルビオン解放戦争のさいにはその艦載機が神出鬼没にアルビオン各地に現れ、『レコン・キスター』軍を翻弄させた。

同船は航空母艦としての任務が戦争の終結とともに終わると、これまでまったく調査がなされなかつた海上の調査に入った。同船は

燃料さえ満載すれば、風石搭載の飛行船の数倍の航続距離を発揮出来た。

同船による調査航海は短期間の間で数十回にも及び、実に80近い大小の島々が発見され、その内の3分の2近くが金、石油、石炭などの天然資源を豊富に埋蔵していた。また最大の島でアイスランドと名付けられた島は、資源こそ少なかつたものの土地が豊穣で平坦、しかも高緯度でありながら暖流のおかげで温暖な気候であり、農地、そして漁業の地として最適の土地であった。そのため後にトリスティンやアルビオンから万単位で人々が移住した。

ちなみにこれら島々の3分の2はトリスティン領、残る3分の1はアルビオン領とされ、アルビオンにとつてはじめての地上の領土となつた。またアイスランドは共同管理地となつた。

アイスランドを含む各島は便宜的に外洋諸島群と呼ばれることとなつたが、これら島々は小国であり無資源国であつたトリスティン王国とアルビオン王国の立場を大きく変えることになつたのは言つまでもない。

そしてこれら島々からの輸送にはそれまでの風石使用の飛行船が使われることとなつたのであるが、ここである問題が発生した。それは飛行船では遠距離にあるこれら島々までは風石を満載して飛んでいくのが精一杯で、とても採掘した資源を運べないということであつた。

そこで、仕方がなく普通に海上を走る大型船の建造が行なわれた。もちろん、飛行船を海上に走らせるという方法も採られたが、旧式であるこれらの船はいずれも大量の鉱物を運ぶのに適していなかつたために、初期の数ヶ月を除いてほとんど使われなかつた。

その後、新規に投入された輸送船はいずれも開発されたばかりの蒸気機関が搭載され、飛行船と対等まではいかないまでも、それまでの帆船よりも遙かに速いスピードで走れた。

こうした船の初期の型はいずれも異世界地球から持ち込まれた設計図を元に開発された模倣船であったが、ロマノフ公国からの売却船であった。ハルケギニア戦役も終わり世の中が落ち着くとハルケギニア独自の船も開発されていった。また船員を養成する商船学校、設計技師を養成する技術学校も併せて創設されている。

話を元に戻す。これら外洋諸島群とトリステイン本国を繋ぐ航路はわずか数ヶ月でトリステインとアルビオンにとってなくてはならない物となつた。それとともに、この航路の防衛が必要となつてきた。石油や石炭はよかつたが、金や硫黄を運ぶ船は頻繁に狙われた。しかも当初は沿岸部のみの海賊を警戒していれば良かつたが、ガリアとトリステイン、アルビオン両国の関係が悪化するとかなり外洋を航行する船舶も、襲撃に対する警戒が必要となつた。

こうした問題が本格的にクローズアップされたのは、ガリアがトルステインとアルビオンに対する挑発を繰り返すようになつてから、厳密にはハルケギニア戦役が始まる3ヶ月前のことであつた。

その時点におけるトリステインとアルビオンが持つ海軍力は、ハルケギニア初めての近代型軍艦「ビフレスト」級の「ビフレスト」、「ヨツンハイム」、「イラストリアス」、「ヴィクトリアス」の4隻のみという状況だつた。3番艦の「オストラント」は武装が半減された探検船であつたために数の内には入れられなかつた。

ちなみにこれら「ビフレスト」級は異世界日本の防護巡洋艦「吉

野」級を参考に建造されている。

またこの少し前に現れた地球の巡洋艦「オオヨド」、駆逐艦「コキカゼ」、「サカキ」、「カエデ」を含めても8隻だけだった。

対するガリアとゲルマニアは両用艦隊として併せて150隻あまりの艦艇を保有しており、ほとんどが旧式の飛行船であったが、近海海域での襲撃に使うだけなら充分だった。また蒸気機関こそ搭載していなかつたが、外洋まで走らせることも出来る艦艇も少數ながら存在した。さらにたつた1隻だけだったがガリア軍が自軍に編入した地球の潜水艦「シェルクーフ」に、弾薬が限られていたがやはり地球製の100機余りの伊仏空軍機による攻撃も脅威であった。

この状況に、トリステインとアルビオン各政府は泥縄式で立たが、さっそく対策を立て始めた。そして『東方義勇軍』からの提案に従つて、試験船「スピカ」号を一回り大きくした駆逐艦の生産に入つた。それまでの艦艇はゲルマニアのツェルップストー領に発注されていたが、この時点では新たに国交が樹立されたロマノフ公国にも発注され、さらにラ・ロシェールに新設された海軍工廠でも建造が行なわれた。

さらに乗員の養成も全力で行なわれた。海軍士官学校が新設され、あらたに4つの術科学校（航海術、砲術、機関、その他）も新設された。

こうして突貫で建造された艦艇、ならびに養成された乗員たちは開戦数ヶ月前によつやく戦場に登場した。その頃は開戦直後ガリア国境沿いの各領地の諸侯軍、さらに功を得ようと焦つて戦闘に突入した各所領軍がガリアの物量と、ガリアについていた伊仏軍の前に大敗北を決して、その後義勇軍他の残存戦力によってなんとか戦線が立

て直された時期であった。

前線に出た各海軍部隊は、外洋諸島群とロマノフ公国との通商路の防衛のみならず、『東方義勇軍』によるガリア逆上陸作戦の支援、ゲルマニアにおけるクーデター支援作戦など重要な作戦をいくつもこなした。また、計画で終わつたがガリアとエルフ諸国との交易ルート破壊作戦への投入もあった。

ハルケギニア戦役後、重油燃焼ボイラーの発達により艦船のスピードが上ると、浮遊大陸であるアルビオンへの航路を除く各航路のシェアは、誰でも動かせる通常船に移行していく。それと共に海軍の役割も大きくなり、後にハルケギニア各国が連合制に移行すると、トリステインとアルビオンの海軍はその中核となっていくこととなる。

ハルケギニア海軍興亡史（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。次の話のネタなどもドンドン
お寄せください。

義勇軍VS空中装甲騎士団（前書き）

今回の作品は、本編で言えば本来は第4部の頃にある話です。ですが本編で書けるか解からないのと、書きたいといつ作者の独断で書きました。その点ご容赦ください。

才人が召喚されて1年が経ったころ、ハルケギニアは春を迎えていた。気温が上がり、動植物の活動も活発になつてくる。しかしながら、ハルケギニアの情勢は穏やかな季節の到来とは正反対に、日々険悪なものへとなつていた。

この時期、ガリアとトリステインの国境地帯では小規模な衝突が頻発していた。主に両国の軍隊同士による小競り合いがそれであつた。もつとも、それはガリアによるあからさまなトリステインに対する挑発であつた。なにせ、わざと国境地帯で演習をしているのだ。

ガリア軍が国境地帯で演習すれば、トリステイン側は各領主に命じてガリア軍の監視を行つた。そしてその時には、必ずと言っていいほどガリア軍に対して、何者かによる何らかの攻撃が行われている。時にはガリア側の村が大規模な武装集団に襲われるという事件も発生していた。

こうした事件が起きる度に、ガリアはトリステインに対しての謝罪要求と抗議を行つた。しかし、トリステイン側にはそのような事実は無く、これらに逆抗議するか黙殺している。だいたい、小国トリステインが大国ガリアに戦争を吹つかけるような行為をする理由などどこにもなかつた。

もちろん、これはガリア側の謀略であつた。ただし、トリステイン政府の大臣達はどうしてガリアがこのような回りくどいことをしているのか首を捻つっていた。まさか、ガリア国王のジョゼフがわざとトリステイン側の敵意を煽り立てる為にそのようなことをしているなど想像出来る筈が無かつた。

ただし、このおかげで義勇軍や銃士隊と言つた部隊は装備の忠実や、兵士の訓練などの時間を稼ぐ事が出来た。近代兵器に慣れた彼らは後々ハルケギニアに大きな影響を与えることとなる。

そんな中、才人もトリスターニア郊外のミライにある『東方義勇軍』トリステイン方面軍の基地で訓練や、新兵の教練を行つていた。この日も、剣の絵が描かれた愛機の零戦『デルフリンガー』号に乗り込んで部下と空戦訓練を行つていた。

ほんの半年ほど前まで、義勇軍は機材不足に悩んでいたが、その後地球製の多数の機体が発見されたのと地球からの機体補充が可能になつた事で、1人が1機に乗ることが可能となつた。

才人の乗つているゼロ戦は地球で製造された機体で、才吉や才人たちは非公式に『零戦改』と呼称していた。外觀こそ昔のままだが、機体の各部に使つたカーボンをはじめとする新素材のおかげで重量は軽減され、逆に強度はアップしている。エンジンも改良されており、オリジナルの1~5倍近い出力を誇つた。

国籍マークも全てトリステイン国籍を示す百合マークで、さらにパイロットのオリジナルマークが描きこまれている。才人の『デルフリンガー』号の場合はコックピットの横に、彼の相棒である大剣が描かれている。

才人は伝説の使い魔『ガンダールヴ』である。だから武器である戦闘機は簡単に扱える。もつとも、親からは「自分の実力もしつかり磨け!」と言われているので、彼自身常にルーンに頼るなど心に言い聞かせて操縦している。

これは飛行機の操縦以外にも言えていたことで、特に剣や武道についてはアーツや義勇軍にいる元日本軍兵士に習つてかなり上達していた。

さて、才人が午前中の訓練を終えて搭乗員待機所に入ると、父親の才助が彼を待っていた。

「おい、才人。すまないが午後の訓練は中止して、昼食を食べ終えたら魔法学院まで飛んでくれないか？」

「はあ？ なんで魔法学院に？」

創設期の頃こそ色々と世話になつた魔法学院であったが、現在の所特に何か深い繋がりがあるわけではない。

「ちょっとオスマン校長に届けて欲しい物があるんだ。」

その一言で、才人の表情はそれまでの怪訝なものから一転して真剣な物となつた。

義勇軍ではトリステインやアルビオン政府と組んでガリアやゲルマニアに対して様々なスパイ活動を行つてゐるが、そこからもたらされる情報の中には魔法関係の物も多い。そうしたものは義勇軍では専門外であるから、両国の魔法研究所で調べられるのが普通である。

しかしながらアカデミーでも解析が難しい魔法道具や魔法に関する情報も時たま出てくる。そこで年の功に頼れとばかりに、魔法学院校長のオスマンに分析を依頼することがあるのだ。今回も恐らくそれである。

ちなみにアカデミーから魔法学院に直接依頼しないのは防諜上の理由からだつた。つまりは、アカデミーから移送する際に文書を奪われる事を恐れたのである。現にアカデミーの職員が盗難などに遭う事件が数件起きている。幸いなことに今のところ重要な情報が漏れただけでないが、それ以来魔法学院への情報輸送は義勇軍が担当していた。

「わかつた。それで届けるものは一体何？」

「これだ。」

才助は持つていた鞄から封筒を一通出した。

「よろしく頼むぞ。それから届けたらそのまま帰つて来ても、魔法学院で友人に会つなりしてきても良いぞ。明日の正午までに帰ればよろしい。」

「これは才助から才人の気遣いだつた。」

「わかつた。あと、午後はこのまま編隊訓練をするつもりだつたら、2番機のカルロ兵長には何て言つておけば良いかな？」

カルロ兵長は、現在才人の2番機を勤めているパイロットのことだ。

「別に一緒に連れてつても、置いてつてもそれは小隊長のお前が決めることがあるから。」

「了解。」

結局、2人の会話はそこで終わり、才人は昼食を済ませて先に格納庫へ戻っていたカルロ兵長と一緒についてくるか聞いてみた。そして予想外にも彼は着いてきたいと言った。

「貴族の子女ばかりが集まつた名門校でしょ、だつたら一回ぐらい見てみたいですよ。」

というのが彼の弁であった。

結局そう言つわけで、彼もついてくる事になった。

さらに何故か隣の格納庫で待機中だった菅野中佐とシェスタ特務2等兵曹の小隊も付いて来る事になった。

「話を聞いたら私も久しぶりにマルトーさんたちに会いたくなりました。」

というのがシェスタの弁である。しかしこれは明らかに私用飛行だ。それを才人が指摘すると、彼女は悪びれることなく言った。

「だつたら訓練飛行でそばを通つて、ちょっとエンジンの調子が悪くなつて立ち寄つたとでも言えれば良いんです。何事も臨機応変に。」

「うサラリと言いのけたシェスタに、才人は思つた。

(シェスタ、菅野中佐と結婚してキャラが変わつたんじゃないかな
? それとも慰労会で上映されたアリ ンの影響でも受けたのかな?)

などと考えたものの、結局才人は付いて来ても害はないと判断し

て、一緒に行く事にした。

「コンターック！！」

曇下がりの飛行場に、4機のエンジン音が鳴り響いた。

義勇軍 VS 空中装甲騎士団（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、タイトルの通り、次回はあのキャラが登場します。

魔法学院へ向けて飛び立つた4機は、ベテランの菅野中佐を先頭にして綺麗なV字編隊を組み、一路飛行する。もっとも、馬で4時間以上掛かる距離も飛行機なら20分もしない内に着いてしまうが。

離陸し、編隊を組んでからそれこそあつという間に4機は魔法学院上空に到達した。才人たちが引き揚げた現在、魔法学院の城壁の外に造られた格納庫も、吹流などを備えた簡易滑走路もすでに撤去されている。だから各機はそれぞれ独力で着陸場所を見定めて、降りなければいけない。もっとも、ハルケギニアの大地は平地や草原が多いから、飛行機が着陸できる場所は結構ある。

そういうわけで、菅野を先頭にして早速着陸に入ろうとしたのであるが、ここでもシエスタから意外な提案が出た。

「中佐、せっかくですからあれやりませんか？」

この2人結婚しているとはいえ、義勇軍内ではちゃんと階級で呼び合っている。

「もうだな。ようし、ならやるか！」

「「？」

才人とは2人が一体何をしようとしているのかわからなかつた。そこへ菅野から無線で指示が飛んだ。

「平賀中佐とカルロ兵長は少し離れてくれ。これからシエスタ兵曹

と一緒に編隊宙返りをやる。」

「の言葉で、ようやく才人らは彼らが何をやるかとしているのかを理解した。

「了解！でもくれぐれも気をつけてくださいよ。特にシエスタは飛行経験が浅いから。」

この世界にたどり着く以前から飛行機を操縦し、さらに48機撃墜の菅野は飛行時間が既に4桁に達している。しかし、昨年から習い始めたばかりのシエスタは飛行時間がようやく200時間を越えたばかりだ。佐々木少尉の血を継いでいて、なおかつ運動神経の良い彼女の腕は悪くないが、経験という点からはさすがに心配になつた。

しかし、無線からはシエスタの自信満々の声が返ってきた。

「あら、私の腕を見くびらないでください。それに経験で言つたら才人さんも同じでしょ？安心して下さい、ちゃんと中佐とみっちり訓練してきましたから。」

そういうと、彼らはそれまでの4機編隊を解いて才人たちからは距離を取る。幸い今日はちょうど授業のない虚無の曜日であるから、授業の妨害にもならない。

菅野機とシエスタ機はピッタリと並ぶと魔法学院の真上まで飛び、そこでグルッと垂直に円を描く形での宙返りを始めた。

「へえ、上手いじゃないか2人とも。」

「惚れ惚れするぐらいの息が合ってるね。」

才人とデルフがそう言つほど、2人の息はピッタリであった。2機は美しく円を描いて飛ぶ。それこそアクロバットチーム顔負けの腕だった。才人が感心するのも無理ない。

菅野とシェスターの2人は計3回の編隊宙返りを披露した。もつとも地上の生徒たちが一体どのような反応をしたかはわからないが。

「よし、お遊びはここまでだ。着陸する。」

「了解。」

菅野の命令により、才人らも着陸態勢に入った。ちなみに、才人と菅野は階級は同じ中佐だが、軍歴の関係で菅野の方が先任指揮官となっている。

4機はそのまま魔法学院の城壁の外の野原に機体を着陸させたが、幸い事故は発生しなかった。才人の2番機であるカルロ兵長は飛行時間がようやく100時間を越えた所であつたが、彼も危なげなく着陸した。

着陸すると、4人は機体に車輪止めをかませて飛行服を脱いだ。一応今回は魔法学院という高貴な場所を訪問するために、全員飛行服の下に茶色の軍服を着込んでいた。白い礼装でないのは、なるべく目立たないようにという配慮からだ。

ちなみにこここの所めつきり出番が少なくなつたデルフもちゃんと才人はもつていく。

4人は中へ入るために城門まで移動した。まずそこで衛士に止められるが、才人が才助から女王名義の許可状を見せたことで、通ることができた。もつとも許可状などなくて、かつて魔法学院に暮らしたことのある才人なら通れたであろうが。

魔法学院内に入ると、シエスタはマルトーや元同僚のメイドたちに会うと言い、菅野とともにに行ってしまった。その姿を見ながら、才人は思った。

（多分マルトーさんたち、すごく驚くだろうな。）

シエスタが魔法学院をやめたのは半年以上前のことであるが、それこそいきなりという言葉が良く当てはまる物だった。それだけでマルトーたちにはビックリであつただろうに、さらにそのシエスタがいきなり旦那を連れて現れたら、驚きも100倍になつて当たり前である。

才人の脳裏には、驚愕の表情となつたマルトーらの顔が思い浮かんだが、すぐにそれを打ち消して、自分の仕事をすることにした。

「それじゃあ、俺たちはとりあえずオスマン校長に渡す物、渡してくれるか。ようし、カルロ行くぞ。」

「はい。」

才人は部下を連れて校長室へと向かった。

虚無の曜日であるせいか校内は静かで、時折生徒や教師の姿を見かけるだけであった。そうして出会う人の中に、見知った顔はいなかつた。また相手も最初はこちらを訝しげに見ていたが、制帽にハ

ルケギニア語で書かれた『東方義勇軍』の文字を見ると、何も言わずにそそくさとどこかへ行つてしまつ。

最初一歩の世界に来たばかりの時や、義勇軍が創設されたころは平民ということで随分と馬鹿にされたが、タルブやアルビオンでの活躍がトリステイン国内に響き渡ると、そうしたことはなくなつた。

才人は校長室へと着くと、扉をノックした。

「誰じや？」

中から聞き覚えのある老人の声がした。

「『東方義勇軍』の平賀才人です。」

「入りました。」

そう返事が来るなり、才人は扉を開けて中へと入つた。

「おお、よく来たね。」

立派な白ひげをたくわえ、タバコを吹かしている老人、魔法学院校長のオスマンが才人の顔を見るなり言つた。

「お久しぶりですオスマン校長。」

才人も帽子をとつて挨拶した。

「うむ。おや、そつちは誰かな？」

「ああ、俺の部下です。カルロ、これからちょっと大事な話をするからしばらく外で待つてくれ。」

「わかりました。」

彼は部屋の外へと出て行つた。それを見届けたところで、才人は本題に入った。

「それじゃあまず、」こちらをお渡しします。」

才人は才助から頼まれた書類をオスマンに渡した。

「ふむ。確かにあずかった。どこまで出来るかわからないが、やれるだけやろう。」

既に何回もしていいことなので、受け渡しも非常にスムーズだった。オスマンは書類を受け取ると、机の引き出しにそれをしまった。

「よろしくお願ひします。」

才人は頭を下げた。

「ああ。といつで、どうかね最近は？」

用件は終わつたとばかりに、

「そうですね・・・」

2人は世間話を始めた。才人はこの世界にだいぶ慣れたことや、

義勇軍でのこと、国際情勢について話した。また、そうした暗い話題ばかりじゃダメだと思い、ルイズとのことも話した。

「……まあ、そんな感じです。」

「そうかね。ところで、君は確かグラモン家の息子とは仲が良かつたね？」

急にオスマンがそんなことを言った。グラモン家の息子とはギーシュのことである。

「え？ええ、ギーシュとはそうですが、それが何か？」

「実は先日、学生の志願者を中心として新たな近衛部隊として水靈騎士隊が創設された。その隊長に彼が抜擢されたんじゃよ。今日彼らは学院の裏庭で訓練中の筈だから、会つてしたらどうだね？」

オ人はそういえば、そんなことをルイズに聞いたところを思い出しながら、彼にも会つてみたくなってきた。

「そうですね。やります。ありがとうございます。」

ソラにしてオ人はオスマンとの会話を切り上げ、部屋を出た。

御意見・御感想お待ちしています。

才人は校長室を出ると、部下のカルロ兵長を連れて魔法学院の裏庭へと向かった。そこでは、オスマン校長の言つたとおり、男子生徒を中心に編成された水靈騎士隊が訓練中であった。

才人は訓練をしている所を邪魔してはいけないと想い、その様子をじつと少し離れて見ていた。しかしながら、その内に口にこそ出さなかつたが不安になつてきた。

水靈騎士隊の動きはお世辞にも良いとは言えなかつた。むしろ、かなり乱れている。今才人たちの目の前ではちょうど行進している所であつたが、どうも動きがぎこちない。ちゃんと行進する意識があるのか疑いたくなるくらいにバラバラである。

「これは、何かの悪い冗談でしょうかね？」

才人の隣にいたカルロがあまりにもひどいその動きを見て言った。
義勇軍の近代的な動きを知つている彼の場合、もしかしたらそれ以上のことを見つたかもしれない。

さらに才人が背中に担いでいたデルフも言つ。

「相棒、あれならオーク鬼にやらせた方が、まだましだぜ。」

デルフの評価は文字通り、ズタボロだった。

しかし才人もそれも仕方がないと思つた。なにせ魔法学院では魔法や貴族としての礼儀作法は教えてくれるが、騎士としての戦い方

などは教えてはくれない。

有事に備えてせっかく編成したというのに、これではとても戦闘になど出せないだろう。もちろん経験不足という点もあるが、ちゃんとした教官がつかか、彼ら自身しつかり学んでいくかしないと改善しないと才人は思った。

そんなことを才人が考えていると、少年たちの先頭で指揮を執っていた1人が、才人の存在に気づいた。

「おお！ 才人じゃないか！？」

才人にとつて聞き覚えのあるその声は、ギーシュだつた。

「全員小休止！」

彼は他の隊員たちにそう言つと、才人の方へと走つてきた。

「ようギーシュ。騎士隊隊長だつてな。おめでとう。おつと、そうなるとお前の方が上官か。失礼しましたギーシュ隊長殿。」

才人が敬礼しながら、笑つて言つた。

義勇軍の登場もあつて、最近になつてトリステインとアルビオンでもこれまでの軍関係の組織に関する階級呼称が見直されている。すなわちそれは、本格的な階級制度の取入れで、これまでの大雑把なものから、近代的で厳密な物へと変えられている。

これに伴つて騎士隊隊長の場合階級は大佐、もしくは准将となつてゐる。だから中佐の才人よりも騎士隊隊長のギーシュの方が偉く

なる。

だが、ギーシュは笑いながら言った。

「そんなにこだわらなくても良いよ才人、この騎士隊はまだ出来たばかりで、僕が隊長に就いたのだって、アルビオンでの従軍経験と勲章をもらつたからにすぎないよ。」

実際派閥にとらわれなく、また将来の軍人を育てる意味で作られた水靈騎士隊であつたが、まともな教官がないことでもわかるよう、実際期待されているとは言い難い。一応隊員のほとんどはアルビオン戦争に従軍し、簡単な軍事教練を受けてはいたが、アルビオンでの戦争が3日で終わつたために、実戦参加した隊員はなんと隊長のギーシュだけだった。これでは他に隊長など選べられる筈がない。

「けど隊長は隊長だから。」

「別に学院内にどこかのお偉いさんがいるってわけでもないから。前みたいに普通に接してくれれば良いよ。」

「そう。それじゃあ改めて、久しぶり。騎士隊の隊長なんて、出世したなギーシュ。女の子にわざやもてるんだろうな。」

才人がちゃかすように言ひつと、ギーシュが自慢するように喋り始めた。

「なんだよ。もうすでに3人の女の子からラブレターをもらっちゃつてね、いや、本当に嬉しくてたまらないよ。」

(相変わらずの女好きだな。)

と心のなかで思いつつ、才人は警告の意味を含めてギーシュに一
言。

「まあモンモランシーにばれないようこ気をつけるよ。」

その言葉を聞いた途端、ギーシュの顔は一気に青ざめ、引きつ
た。

(あ、まずい!)と呟いたみたいだな。)

才人がそう思つた途端、ギーシュが話題を急に変えた。これ以上
その話をすると何かやばいらしかつたようだ。

「ところで才人、そつちにいるのは誰だい?」

ギーシュがカルロを見て言った。

「ああ、紹介するよ。俺の部下のカルロ兵長だ。」

「お会いできて光榮でありますギーシュ隊長殿。『東方義勇軍』航
空部隊所属のカルロ兵長です。」

才人に紹介されて、カルロがギーシュに対しピシッと敬礼した。
もちろん、ギーシュも答礼する。

「へえ、君もついに部下を持つたんだ。」

そんな感じでしばらく談笑を続けていたが、その時空中を何かが

横切つた。

「うん?」

「竜だ。」

才人が呟いた。彼らの頭上を通り過ぎたのは、数羽の竜だった。

「野生・・・なわけないよな?」

野生の竜が何羽も群れを成して飛んでいたら、それは恐るべき事態である。しかしギーシュも、そして少しばかり離れた場所で休んでいる水霊騎士隊の隊員たちも驚くようなことはしなかった。

「あれは空中装甲騎士団の竜だよ。」

「空中装甲騎士団?」

才人にとって、それは聞いたことのない名の部隊である。

「今年の新入生に、グルデンホルフ公国ベアトリス殿下が入学されているんだ。それでその警備に派遣されてきたらしいんだけど、たかが一人のために30羽近い竜と騎士を派遣するなんて、僕には理解できないよ。」

ギーシュの言葉を聞いて、才人は半分納得し、半分ギーシュの意見に頷きたい気持ちだった。

グルデンホルフ公国はトリステイン近郊にある小国で、外交権や軍事に関してはトリステイン王国の手中に置かれているが、曲がり

なりにも内政権を独自に持つた国であった。しかしながら、才人の感覚からすれば外交と軍事を明け渡している国を独立国と呼んでも良いのか迷う。

そのため、才人はついついこんな言葉を口にしてしまった。

「ふーん、けどあの国って言っちゃえばトリスティンの傀儡国家だよな？」

その言葉を言った途端、ギーシュの顔が再び青ざめた。

「あれ、俺何かまずいこと言つた？」

「バカ才人、もしそのことをベアトリスに聞かれたら、君と言えどただじや済まな『もう手遅れですよ。』

ギーシュが話している途中で、どこからか少女の声がしてきた。才人が声のした方へ顔を向けると、そこには2人の少女を付き従えたツインテールの少女が立っていた。

その姿を見て、ギーシュはさらに顔を真っ青にして、才人はわけがわからずきょとんとしていた。

そして同じじぶん、学院長室ではオスマン校長が『遠見の鏡』を見ながら笑っていた。

「ほほお、これはまたおもしろくなってきたわい。」

魔法学院に、波乱が起きようとしていた。

義勇軍 VS 空中装甲騎士団 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。なお、ベアトリス登場の1-2巻が下宿があるので、1週間ほど更新が停滞するかもしれない。

噂をすればなんとやら、才人ギーシュのもとへやってきた少女こそ、クルテンホルフ大公国からの留学生であり、その大公家の娘であるベアトリスであつた。

その姿を見て、ギーシュは顔を死人もびっくりなくらいに蒼くしていた。一方の才人は噂していた張本人が現れたことに少しばかり驚いたものの、それと同時に少しばかりうんざりする気もした。

なんでそんな気持ちになつたかといえば、それはベアトリスを見て一瞬の内に彼女が生まれを鼻にかけて自慢し、威張り散らすような、言わば性質の悪い貴族の典型であることが直感的にわかつたからだ。

顔と容姿はそれなりに可愛いのだが、才人とギーシュを見るその表情はまるでいたぶる獲物を見つけたような憎たらしい笑顔であった。さらに、そばに2人の少女が子分よろしく、くつつくように立っているのも才人には気に入らなかつた。これではどこかの安っぽい学園ドラマ出てくるような、意地悪生徒会長そのものである。

もつとも、だからといつていきなり嫌味で返すほど才人も子供ではなかつた。ハルケギニアに来たばかりのころならそうしてしまつたかもしれないが、今は才吉たちから軽拳妄動は絶対にしてはいけないと厳しく教えられたこともあり、とりあえず理性を保つことができた。

「ええと、もしかして君がベアトリスさん?」

すると、ベアトリスは才人をバカにするように言った。

「普通人に名前を聞く前に、自分の方から名乗るのが礼儀というものの。そのくらいのことも知らないなんて。」

その言葉にムツと来る才人だったが、なんとか抑える。

「失礼しました。自分は平賀才人。見てのとおり、『東方義勇軍』の軍人です。」

才人が名乗ると、ベアトリスは再び人をバカにしたような態度で言ひ。

「『東方義勇軍』？ああ、確か平民で構成された田舎軍隊よね。そんなところの兵士がこの由緒正しいトリステイン魔法学院に入り、なおかつ我が国に対する侮辱の言葉を平然と言うなんて、いつたいどういうつもりかしら？・・・それと、私がそのクルデンホルフ大公家のベアトリスよ。」

「そうよ、以後失礼のないようになさい。」

「本来ならあんたのような下賤な人間が口を聞けるようなお方ではないのよ。」

まるで挑発するかのように言ひベアトリス。さらに傍につき従う少女たちも彼女を持ち上げるかのように発言をする。外国出身のベアトリスならともかく、トリステイン人なら『東方義勇軍』の実力を知っているはずであろうが、彼女に対する気兼ねからか全く否定しそうとしない。

才人は目の前の少女たちに腸が煮えくり返るような気持ちになるが、なんとか堪える。ここで怒つては負けである。そこで、彼は嫌味には嫌味で返すことにした。

「失礼しましたベアトリス殿下。先ほどの非礼をお詫びいたします。いやしかし、あの程度のお喋りを聞きつけるなんて、なかなか優れた耳をお持ちのようだ。クルテンホルフの貴族は平民が言う戯言一言一言に気を配られるようで。しつかりと覚えておきます。」

才人は敬礼しながら努めて冷静に言った。それが逆にベアトリスたちにはストレートに言うよりも憎たらしく思えた。そして才人の言葉を聞いた瞬間、ベアトリスたちはまるで時が止まつたかのように口をあんぐりと開けて固まった。

そしてギーシュと才人の部下であるカルロ兵長はその様子を戦々恐々の気持ちで見守っていた。

才人の予想外の言葉に一瞬固まつてしまつたベアトリスたちであつたが、すぐに復活した少女たちが顔を真つ赤にして才人に向かって言い始めた。

「な、なんて無礼な…！」

「自分が言つた言葉の意味がわかつていますの！？」

そんな中で、ベアトリスはしばらく何事かぶつぶつ言つていた。

「べ、ベアトリス様？」

少女の1人がベアトリスの様子に気づいて恐る恐るたずねた。

「フフフ・・・どうやら貴族に対する礼といつもの教えてあげる必要がありそうね。」

本気で怒りを含ませた声で言つベアトリス。

「へえ、どのよつに？」

才人が顔に笑みを浮かべて聞いた。

「あなたは曲がりなりにも軍人でしたわね、だつたら戦いの場で教えてあげるというのが礼儀というもの。私の連れてきた空中装甲騎士団がお相手してあげます。それにさきほど飛んでいた鉄の竜はあなたのものでしょ？」

その言葉に、才人は笑いを堪えるのに必死だった。

なんとか本心を押し込めて、才人は答えた。

「良いでしょ。では20分後に上空でその貴族の教育とやらを見せてもらいましょ。ああ、手加減は無用でよろしいですから。」

そう言い切ると、才人は彼女に背を向け、会話している間に距離をとつたギーシュとカルロの方へ向けて歩き始めた。

「さ、才人。君はなんということをするんだ！確かにベアトリスは氣に入らん奴だが、相手は小国とはいえ独立国の姫殿下なんだぞ、たとえ勝ってもあとで外交問題になりかねんぞ。」

ギーシュがまくし立てるように言った。

「大丈夫だよ。まあ確かに俺が言つたことも失礼だったかもしけないけど、相手がトリステインの属国のようなもんのは事実だし。それなりにあそこまでバカにされて黙つていろつて方が無理だつて。」

才人が平然と言つ。それにいざといふ場合には、切り札をちらつかせればベアトリスは黙るはずだった。

「それにしても、どうしてギーシュはあいつにそんなビクつくんだ？いくら姫様だからって、相手は小さな国なんだぞ？それに俺のことをだつて知つているだろ？・・・まさか、何か弱みでも握られているのか？借金とか？」

才人が問うと、ギーシュの体がビクッと震えた。どうやら借金、もしくは金に関する弱みを握られているようだ。才人は呆れてしまつた。

そんな彼がしばし放心状態になつた間に、今度はカルロが声をかけた。

「中佐、良かつたんですか？中佐は平民ではなく男爵なんだし、それに奥さんは・・・」

カルロが口を噤んだ。

「いいんだよ。ああいうプライドの高い貴族様には、口で言つより実際に目の前で現実を見せたほうが効果的だつて。それに実戦に近い空戦訓練が出来るんだぞ、こんなチャンス滅多にないつて。」

ベアトリスに手加減無用とか言っておきながら、才人には竜と戦うことなど訓練にしか思えないらしい。

「まあとにかく、出撃準備しなきゃな。」

才人は空中装甲騎士団との空の決闘をするべく、まず学院の外へ着陸させたゼロ戦へ向かって歩き始めた。その後をカルロも慌てて追いかけた。

「ああ、待つてください中佐ー。」

御意見・御感想お待ちしています。

才人たちとわかれシエスタと菅野の2人は、厨房でマルトーラと会っていた。案の定、マルトーラかつてのシエスタの同僚であるメイドたちは、いきなりやつてきた義勇軍の制服を着た彼女の姿を見て驚いた。

さらに傍にいた菅野の腕に抱きついで、「私の夫です。」なんて言つたもんだから、厨房は一時パニックになつてしまつた。

幸いにも、指揮官として場を纏めるのが上手い菅野のおかげで、すぐにつの場は納まつた。

その後は、マルトーラによる質問攻めとなつた。最初は若い男たちからは白い目で見られていた菅野も、彼らと話すうちに認めてもらえた。

そんな感じで、場が和み、シエスタはかつての同僚たちとキャラッキヤワイワイとお喋りに興じ、菅野がマルトーラ男性スタッフらと机に座つてワインを酌み交わし始めた頃、外のほうが騒がしくなつてきた。

「なんだ一体？」

「あ、俺見てきます。」

マルトーラの言葉に答えるように、一人の若いスタッフが厨房を出て行つた。そして彼は3分後に血相を変えて帰つてきた。

「た、大変です！あのクルテンホルフの竜騎士団と義勇軍の飛行機が戦うそうです！！」

それを聞いて、当たり前のことだがシエスタも菅野も驚く。

「直さん、もしかして才人さんたちが？」

直さんは、シエスタがプライベートで使う菅野の呼び方だ。

「他に考えられんよ。」

シエスタの言葉に答えるやいなや、菅野はコップを置いて上着を着て、帽子を被つて立ち上がった。

「行くぞ、シエスター二飛曹。」

「はい！」

2人は唖然とするマルターたちを差し置いて、軍人モードバリバリで厨房から出ていった。

2人が建物の外へ出ると、今まさに2機のゼロ戦が城壁外の草原から離陸し、上昇していくところだった。

「あら、飛んじゃいましたね。」

「ああ。」

2人は上昇しているゼロ戦をただ眺めるしかなかった。今から飛

び立つたところで間に合いあわないのは目に見えていた。

「大丈夫でしょうか？」

シエスタが心配そうに2機を見つめ……はせず、彼女が見たのはゼロ戦と戦うために同じように上昇を始めた空中装甲騎士団の方だった。

「才人さん、最近は大分冷静になりましたけど、頭に血が昇つて実弾を使つたりしないかしら？」

すると菅野が笑いながら言つた。

「まあ才吉さんや才助さんがしつかり教え込んでいるからさすがにそれはないだろ。しかし、やられるあの竜騎士たちは本当に気の毒だな。・・・お、空戦に入るぞ。」

才人は飛び立つと、列機であるカルロ兵長に無線で支持する。

「いいかカルロ、俺の後ろにしつかりと付いて来い。竜のスピードじゃこの零戦改には追いつけるはずはないけど、手加減はしてこない。まぐれでも魔法を喰らつたら大変だ。無理に攻撃をする必要はない。とにかく、今回は最後まで無事でいることだけ考えておけ。」

「了解。」

少し緊張交じりの威勢の良い返事が、才人の耳に入ってきた。

最初才人は自分一人で勝負を受ける気だつた。しかしカルロが自分は才人のパートナーであるから絶対についていくと言つて聞かず、やむなく連れてきた。

カルロはハルケギニアの現地採用パイロットの中では優秀である。しかし、実戦経験はない。一応義勇軍内で行つ模擬空戦とか、マンコティア隊や竜騎士隊との共同演習は一通りやつてきている。

だが今回の相手は演習とは違つて手加減しないはずだ。こちらが実弾を使わない以外は実戦同様と言って良い。だから才人は先ほどのように、自分の防御を優先するよう念を押しておいた。

「さあ、お客様が来たぞ。」

見ると20騎近い竜が上昇してくる。才人たちは彼らを待つために、上昇してから魔法学院の上空でグルグル旋回を続けていた。

「使う機銃は模擬弾を積んだ2挺だけだぞ、間違えるなよ！」

「わかつてます。」

零戦改の武装は主翼に備えられた4挺の12・7mm機銃である。この内2挺には緊急時いつでも使えるように実弾を装填することが義務付けられている。しかし残る2挺には通常弾がないか、演習用の模擬弾が装填されている。

相手は本気で魔法を撃つてくるだろうが、才人らには人を殺す氣など毛頭ない。12・7mm機銃弾は人の体をバラバラにするほど威力があるのだ。だから今回使つのは模擬弾が装填されている2挺のみにし、それを何度も確認する。

そして2機が戦闘準備を完全に済ませる頃には、相手はほぼ同高度に達していつて。

「よし、戦闘開始だ！！行くぞカルロー！！」

「はいー！」

オ人はスロットルを押してエンジンの出力を最大にした。カルロも少し遅れてほぼ同じ動作をする。それまでグルグル旋回を続けていた2機は、水平飛行に移行すると、一気に空中装甲騎士団目掛けて突撃を開始した。

一方、2機と向かい合う形で飛んでいた空中装甲騎士団の騎士たちは、隊長以下ほぼ全員が戦いの行方に樂觀していた。確かに彼らも『東方義勇軍』の戦いについては伝え聞いていた。しかし、やはり平民から構成されている軍隊ということが、彼らの判断力を狂わせていた。

人間中々変わるのは難しい。例えそれが自らに不利益なこととなつても、自身の中にある価値観を捨て去ることは容易ではない。そして大概、こうした古い価値観のみに固執する者はなんらかの代償を支払わされることとなるのだ。

「速いー！」

装甲騎士団の隊長は、まず向かってくるゼロ戦の速度に驚かされた。

義勇軍が王軍の協力の下で行った速度計測では、火竜、グリフィオ

ンなどの最高速度はどんなに出せても 200 km が限界と判断されている。また速力でそれらに勝る風竜でも 500 km が限界で、さらにはそのスピードを出せるのは相当なベテランのみと結論付けられた。

今回装甲騎士団の乗っている竜はいずれも火竜で、部隊全体での平均飛行速度は 150 km 出るか出ないかだった。対して零戦改の最高速度は 620 km 。巡航速度も 415 km である。はつきり言ってスピードではお話にならない。

そしてスピードの差は、騎士たちの田測を誤らせた。冷静さを取り戻し、ゼロ戦とすれ違つ瞬間に攻撃をかけようとした騎士もいたが、竜のブレスも、騎士自身が撃つた魔法もゼロ戦が通り過ぎた空に、空しく放たれただけに終わった。

その間に才人とカルロは装甲騎士団の後ろに出ると、ターゲット・スナップ・ロール最後尾の竜に狙いを定めた。

照準気のど真ん中に目標を捕捉し、間を置かずに2人は機銃の発射ボタン（零戦改は機銃の発射装置をボタンに変更している）を押した。

ダダダダダ・・・

重々しい発射音を轟かせ、大気を切り裂いて、機銃弾が発射された。

御意見・御感想お待ちしています。

重々しい発射音と共に発射された銃弾は、曳光弾による赤い尾を引きながら狙つた竜に吸い込まれていった。

そして次の瞬間には、2匹の竜とそれに乗つていた騎士が弾けたペイント弾の染料によつて真つ赤になつた。実弾だつたら墜墜確実である。

もつとも才人とカルロの方はそれを見届けている暇などなかつた。なにせ300km近いスピード差がついているのだ。100mそこそこの距離など、それこそあつという間に追いついてしまう。つまり機銃弾を発射させた直後に操縦桿を倒し、フットバーを蹴つて避けないと衝突してしまう。

才人とカルロは一撃を加えると、そのまま竜騎士の編隊の右下方をすり抜けた。

「カルロ、大丈夫か？」

「はい、ちゃんと中佐の後ろについています。」

今回が実戦（もしくは実戦にかなり近い演習）初参加のカルロが何かアクシデントを起こすのではないかと心配していた才人であるが、さすがに訓練生の中でも優秀な成績を収めていただけあって肝が座つていて上手い。

才人はそんな彼の腕前を大いに満足していた。

「よつし、今度は敵の前方から上昇しながら一撃をかけるぞ……」

「了解……」

2機は降下を止めて、急旋回すると、今度は竜騎士の右下方からの攻撃を掛けるために上昇した。

一方、攻撃された竜騎士の方は大混乱に陥っていた。才人たちの乗る零戦改の高速もさることながら、その高い機動性に全くついていけないのだ。さらに20騎という数が逆に足かせになっていた。

相手が同程度の運動性しか持たない竜や幻獣、それに地上目標なら特に問題にならないが、驚異的な速力と上昇力、急降下能力を持つ零戦改に対抗するには迅速な対応力が必要である。そうなると、リアルタイムで連絡を取り合う必要があるのだが、生憎とハルケギニアに無線機という便利な代物はない。

竜騎士の隊長は風魔法での通信を試みるが、そんな悠長なことをやっている余裕はなかった。2騎の竜を血祭りに上げた才人らはあつという間に旋回してくると、下方からの一撃を放つたのだ。

竜騎士が竜にブレスを、自身も魔法で攻撃を掛けようとしたが、それも結局間に合わなかつた、才人らは悠々と攻撃を行つた。再び2騎の竜と乗り手がペイント弾によつて真つ赤になつた。

さらに才人は旋回するほんの一瞬の間だけ照準に入つた竜にも一撃を与えていた。まさに『ガンダールヴ』の真髄を發揮した瞬間だつた。

わずか2分もしないうちに、空中装甲騎士団は20騎の内の5騎

士に被弾していた。もちろん被弾した竜はそのまま戦線を離脱している。戦力の4分の1がそれこそあつという間にやられてしまった。

これは装甲騎士団の竜騎士たちにとてつもない恐怖を植え付けた。

「化け物め！」

また地上で見ている魔法学院の生徒をはじめとするギャラリーたちも、タルブ上空で起きた『東方義勇軍』の伝説を目の当たりにし、メイジたちのほとんどは呆然としていた。またマルトーラ平民たちはメイジの前であるから、表立つて喜べなかつたが、内心では才人らに喝采を浴びせていた。

その中で冷静にしている人間が2人。菅野中佐とシエスタである。2人は持つてきた双眼鏡で空中戦の様子をしつかりとみていた。

「すごいですね、さすが才人さん。それにカルロ君も中々やるじゃないですか」

「いやいや、才人君はともかく、カルロ兵長の方は旋回の時の切れが甘い。それに弾を少しばかり無駄にばら撒いている感じがするぞ。やっぱり100時間じゃ訓練不足だな。基地に帰つたら、しつかりしぐかないとな。」

歴戦の撃墜王だけあつて、中々辛口の批評をする菅野。だが言葉とは裏腹にその表情は明るい。これはカルロが100時間という飛行時間で戦っていることに、内心満足していたからだ。

彼のいた旧日本海軍の航空隊はパイロットの養成を怠つていた。とくに、戦争末期の頃は80時間から100時間の飛行経験しかな

いパイロットを特攻に投入していた。そのほとんどは基礎の飛行が出来る程度で、敵戦闘機の追尾を撒くことも、場合によつては敵に辿り着くことさえおぼつかない者もいた。それを知つてゐる彼からしてみれば、100時間で空戦をしているカルロは期待できるパイロットであった。

なお余談だが、けつして飛行時間と腕が比例するわけではない。現にかつて沖縄の米軍基地に夜間攻撃を仕掛けていた芙蓉隊という飛行部隊では、飛行時間200時間のパイロットでもレーダーもない飛行機で夜間攻撃を行うだけの腕を持ち合わせていた。

閑話休題。

5騎の竜騎士を撃破されたところで、ようやく空中装甲騎士団は態勢を立て直して反撃に移つた。部隊を2個に分けて、一隊が攻撃を受けても、その隙にもう一隊が攻撃を掛けようと考えたらしい。

「2隊にわけたな・・・カルロ！相手は2隊にわかれだぞ。恐らく1隊に攻撃をしている内に、もう一隊が攻撃を掛けてくる気だ。だから油断するな！！いいか、とにかく相手に隙を見せるな。攻撃したらすぐに離脱しろ！！」

「わかりました！！」

2機は攻撃を再開した。空中装甲騎士団は左右にわかつて挟撃を図ろうとしていた。才人は右の編隊に攻撃を掛けた。もちろん、狙いは外さず2騎の竜騎士にペイント弾をぶち込んだ。

その間に左側の竜騎士は才人の先回りを図つた。だが才人は攻撃をし終わると、全速での急降下に移つた。もちろん竜騎士は同じ

ようには急降下で追跡を図った。だが、ゼロ戦はオリジナルでも 600 km 、機体を強化した零戦改なら 750 km は出る。そんなスピードに竜が追いつけるはずがない。たとえ追いつけても、乗つている騎士が耐えられるはずがない。

才人とカルロは急降下で彼らを撒くと、先ほど攻撃を掛けた方の編隊に一撃をかけ、またも2騎を血祭りに上げた。しかも上昇して旋回すると、さらに一撃を与えて2騎にペイント弾を撃ち込んだ。

この時点では既に残存する竜騎士は9騎にまで減っていた。空戦が始まつてわずか5分で敵は半減した。そして竜騎士からしてみれば、たつた2機の敵によつて味方の半分が落とされたことになる。

ここまで来ると、竜騎士の恐怖はピークに達していた。さらに竜の方も零戦改のエンジン音と、重い機関銃の音に完全に恐怖心を持つてしまっていた。

こうなるともはや編隊など組む余裕はない。ただでさえ、竜騎士は編隊を組むほど意思疎通が利かないのだ。ついにバラバラになって遁走をはじめた。

だが最高速度が違いすぎる零戦改から逃げられるはずがなかつた。それどころかバラバラに逃げたために、各個撃破するチャンスを敵に与えただけだった。

結局残る9騎士もわずか5分の間に全滅してしまつた。

一回蛮勇を發揮した竜騎士が、カルロに向かつて風魔法を最大威力で発射して才人も地上で見ていた2人も冷やりとしたが、彼はこれを見事に交わした。

戦闘開始20分もしない内に、空中装甲騎士団は全滅してしまった。

「やりましたね中佐！」

初めての実戦を勝利に終わらせたカルロが興奮しながら無線連絡してきた。

「ああ。よし、カルロ。学院上空でヴィクトリーロールをして決めるぞーー！」

「了解ーー！」

2人はギャラリーたちの真上で、ヴィクトリーロールを行い、自分たちの勝利に華を添えた。

一方、自慢の装甲騎士団を短時間で全滅させられたベアトリスは、わなわなと震えていた。

御意見・御感想お待ちしております。

才人が零戦改を城壁の外に広がる草原に着陸すると、早速菅野中佐とシエスタ、さらにギーシュが走りよってきた。

「やつたな才人君。見事だつたよ。」

「旧海軍の撃墜王にそう言つて貰えるなんて、夢にも思いませんでしたよ。まあ、今回は相手が相手ですから、勝てる当然ですよ。」

才人がゴーグルを取りながら答えた。

その菅野の後ろから、今度はシエスタが声を掛けてきた。

「才人さん、私とて心配だったんですよ。いつ才人さんが実弾を使わないかと。」

才人が別の心配をしていたことを正直に言つた。

「ハハハ・・・心配してくれてありがとうございます。シエスタ。けど、俺だってさすがにそんな無茶はしないよ。」

今度は苦笑いをしながら答えた。

「いやあ才人、お見事だったよ。おかげで胸がスカッとしたよ。」

ギーシュが満面の笑みを浮かべながら、才人をたたえる。彼としては普段から威張り散らしているものの、家の関係で注意ことすら出来ないベアトリスと、その親衛隊とも言つべき空中装甲騎士団の

存在は気に入らないものだつた。それを才人がコテンパンに叩いたのだから、胸がスカツとして当然だつた。

才人はコックピットを出て、機体の外へと出た。そして翼の前にやつてきたギーシュの側に行く。

「ありがとう、ギーシュ。けどこれで、あの姫さまもちょっとは俺たちの実力を認める気にはなつたかな。」

「彼女だけじゃないさ。君たちの実力に半信半疑だつた学院にいる他のメイジたちも、きっと考えを変えたはずだ。」

そこでギーシュは表情を、何かを心配したようなものにする。

「けど大丈夫かい？ あそこまでコテンパンに打ちのめしちゃって。きっと彼女はカンカンだよ。」

だが才人は表情をまったく崩さずに答えた。

「ああ、それなら大丈夫。万が一の時は、あんまり出したくはないけど、強力な切り札があるから。」

「切り札？・・・ああ、なるほどね。」

ギーシュが首を傾げた。

「そういうことですよ、ギーシュ大佐。おっと、早速噂のお姫様が来ましたよ。」

才人に続いて着陸したカルロ兵長が、いつの間にか2人の傍へと

来ていた。そして視線を別の方向へと向けていた。彼の視線の先には、顔を真っ赤にして才人の方へと歩いてくるベアトリスの姿があった。

彼女は才人の前にやつてくると、まくし立てるよひに言った。

「よ、よくも私に恥をかかせてくれたわね。いえ、これはもはや私だけではないわ。グルテンホルフ大公国全体への侮辱だわ！！この事は代王殿下にもお伝えしますからね。覚悟しなさい！！」

才人が挑発したとはい、空中戦を言い出したのは彼女である。それに負けてなおこう言つるだから、完全な逆恨みである。しかししながら、才人はバックに強力な手形を持つているだけに、余裕の態度で言い返した。

「あんたを挑発したことは一応謝りましょう。けど、戦いを仕掛けてきたのはあなたの方だ。その戦いに負けてなおそんなことを言って、見苦しいとは思わないのか？」

その言葉に、ベアトリスの怒氣はさらに大きくなる。

「まあ、平民のくせに生意氣な……」

彼女の言葉に、ついに我慢が出来なくなつたのか、カルロが一步前に出て言った。

「ベアトリス殿下、失礼ながら言わせて貰います！平賀中佐はメイジではありませんが、平民ではなく、前女王陛下直々に男爵位をいただいたれつきとした貴族です。それに今は、王族の中に名を連ねておられます！」

彼の言葉に、ベアトリスは一瞬キヨトンとしたが、すぐに彼の方へ顔を向けると、先ほどと同じく、捲くし立てるように言った。

「はあ！？そんなことがあるわけないじゃない。あなた、今の言葉は王室を侮辱する立派な不敬罪よ！！」

だが、カルロは彼女を無視するように、才人に向けて言った。

「中佐、この頑迷な姫様に、あれをみせてやってください。」

すると、才人は苦笑いしながら言った。

「あんまり俺は着たくないんだけどな、ああいう堅苦しいもんは。けど、こうなつたら仕方がないか。」

才人はゼロ戦に上りて、操縦席に頭を突っ込んだ。どうやら何かを探しているようだ。

20秒ほどして、彼はようやくお皿当ての物を見つけた。

「あつた。」

それは折りたたまれた一枚の布地であった。彼はそれを広げ、自分の肩にかけた。

「ああ……」

それを見て、ベアトリスが叫んだ。才人が広げた布地は、マントであった。それはこのハルケギニアにおいて、羽織っている人物を

貴族と証明する何よりの証だ。ところが、才人のつけているマントは、明らかに普通の物とは違っていた。

まず布地 자체が、明らかに高級な物で、それこそ公爵家のような高貴な家柄にしか許されないような代物だった。さらに、そのマンドの首元にあたる部分には、2つの紋章が刺繡されていた。1つは、彼自身が男爵であることを示す紋章。そしてもう一つは、王族に名を連ねる者だけが許された百合の紋章だった。

「そ、そんな・・・どうして! どうして魔法も使えないような平民が男爵なの! ? どうして王族の紋章を付けているの! ?」

ベアトリスが体を震わせながら言った。ただし先ほどのような怒りによるものではなく、それは恐怖によるものだった。トリスティンの王族に喧嘩を打ってしまったかもしれないことによる。

「あなたには教えてあげても良いでしょう。今代王になっているルイズとは、あいつが王宮に入る前に正式に婚約しました。その後政府内からの反発で正式な結婚式をあげることは出来ませんでしたが、7ヶ月前に一応内々で結婚の儀式を上げました。ですから、俺といつは今じや夫婦で、しかも俺は末席ですが王家に名を連ねています。まあもつとも、アルビオンのウェールズ国王や、アンリエッタ姫殿下の応援もあって、近いうちに本当の結婚式をあげることになるでしょうけど。」

最後の方の言葉は、すでにベアトリスの耳には入っていなかつた。彼女は才人の言葉で、自分が一体何者に喧嘩を吹っかけたのか、よく理解した。

彼女は父親から逆らってはいけないものを3つ教えられていた。

一つはマザリー二極機卿。一つはラ・ヴァリエール家。そして最後の一つはトリステイン王室であった。

彼女はその内の二つを事実上敵に回していいたわけだ。いく彼の正体を知らなかつたとはいえ、彼女はトリステインという国を敵に回したも同然だつた。もし今ここで彼女がルイズに才人のことを訴えたところで、良くて無視されるか、悪いとグルテンホルフ公国になんらかの罰が与えられかねない。

そしてベアトリスは知らなかつたが、ルイズはグルテンホルフをゲルマニアの成金が創つた国に過ぎないと考えていたから、後者の可能性が高かつた、だいたい才人がグルテンホルフを傀儡国家と発言したもの、そもそもがルイズと話していたときの印象が強かつたからだ。

口をパクパクさせて、もはや言葉すら出なかつた。そんな彼女に、才人は一言声を掛けた。

「これからはちょっとばかり、人に対する態度を改めると良いですよ。もうちょっと謙虚にならないと、後でとんでもないしつペ返しを貰いますよ。」

そう言いおえると、才人は菅野やシエスタ、カルロに向かって言った。

「さ、そろそろ帰りましょうか?」

「ああ。」

「ええ。」

「了解です。」

3人は才人の言葉に頷いた。

この後、結局ベアトリスが王室へ才人のことを通報することはなかった。そして彼女は、以前とは人が変わったかのように、謙虚な姿勢を取るようになったという。また、この事件が魔法学院生徒たちの平民に対する考え方を変えるのに一役買つたのだった。

そうした様子をみて、オスマン校長は笑みを浮かべていた。

御意見・御感想お待ちしています。

桜花飛行機は、北海道の十勝平野に本社を持つ小さな飛行機会社であった。社長の大田は日本の衰退した飛行機産業の復活を夢見て、大学の航空工学科を卒業するとグラライダー製造会社を立ち上げた。

グラライダー製造での業績はそこそこ良く、自信を深めた彼は北海道に工場と飛行場を構えた。さらに動力機の製造と試験に備えてパイロットを雇うべく、遊覧飛行会社も併設した。

しかしながら、たとえセスナ機程度の機体でも飛行機の製造に関しては、やはり後発の小企業に発注がくることなどなく、せっかく拡張した工場も、大企業の下請けで来る部品の製作に使われるという有様であった。

もちろん、大田は積極的に宣伝を行い、さらに実際に自社でセスナ機を設計して機体を造つてみた。しかしながら、それでも注文が来ることなく、造った機体は自社の遊覧飛行部門で使うしかなかつた。

結局これ以降、桜花飛行機が本格的な飛行機を造ることは出来なかつた。

「優秀な設計者も、腕の良い工員もいると言つのに、飛行機を造ることも出来ないとは。」

大田は何度もそう言つてため息をついた。

会社を立ち上げて10年経つても状況は変わらず、それどころか

平成不況のおかげで会社の経営は悪化するばかりだった。せめてものなぐさめは、自社の飛行場を外部に貸し出し、遊覧飛行部門を積極的に活用したおかげで赤字には陥らず、優秀な社員たちを首切りせずに済んだことだった。

そんな桜花飛行機に転機が訪れたのは、ある年の12月のことであつた。北海道は例年通り雪に覆われ、大地は白く染め上げられた丁度その頃、1人の男が訪問してきた。

「はじめまして、社長の大田です。」

大田は突然アポなしでやつてきたその男に怪訝な表情でしたが、仕事の依頼と言われば無下に追い返すことなど出来ない。しかも相手はわざわざ東京から冬の北海道にまで来たと言つたのである。

「はじめまして太田社長、私は平賀才蔵と申します。東京で大学の教授をやっておりますが、今年いっぱいで退職する予定です。」

大田は平賀と名乗つた男から名刺を受け取りつつ、その顔を見た。確かにその風貌から歳は60代に見える、退職という言葉は嘘ではないようだ。

「今年いっぱいで退職ですか？すると、個人用グライダーか何かの注文ですか？」

最近になつて、リタイアしたサラリーマンが趣味にハンググライダー・パラグライダーを始めるという話を耳にしていた大田は、目の前の男もその類だろうと考えてそう言つた。

ところが、予想に反して才蔵は首を横に振つた。

「いいえ、違います。実は貴社に造つて欲しいのはこの2種類の機体です。」

そういうと、彼は鞄から2枚の写真を出した。

写真はいずれもカラー写真で、感じからして極最近になって写されたものらしい。そしてそこに写っていたのは、橙色に塗られたレシプロの複葉機と、優美なデザインのレシプロの単葉機であった。

大田は軍用機に詳しいとは言わないまでも、飛行機を製造している人間であるから、その両方に見覚えがあった。前者は旧日本海軍の93式中等練習機、通称赤とんぼ。後者はやはり旧日本海軍の代表的な戦闘機である零式艦上戦闘機、通称ゼロ戦であった。

「これは旧日本軍の軍用機ではないですか?」
「……」
「……」
「これは旧日本軍の軍用機ではないですか?」
「……」
「……」

日本でも戦争映画を撮る際に、1分の1スケールのハリボテ飛行機を造ることは良くある。大田は彼がそのような機体を造つて欲しいのではないかと予測した。

だがまたしても才蔵はその予想を裏切る答えを言った。

「いいえ。実物を造つて欲しいのです。」

最初大田は、その言葉が冗談ではないかと思つた。個人で本物の飛行機を造つて欲しいなどというのはよほどの金持ちでなければ無理である。しかし才蔵は大学教授と言つたから、そんなの無理である。

さらに、大田の度肝を抜いたのが才蔵の次の言葉であった。

「なお、複葉の練習機は8機、戦闘機の方は4機造つていただきたい。もちろん、飛んで戦えるだけの性能をお願いします。」

「ちょ、ちょっとお待ちください！一体どうこいつですか、レシプロとはいえ、10機以上の軍用機を発注するなんて、正気とは思えません！しかも戦えるだけの性能だなんて、一体何に使うつもりなんですか？」

いくらんでも個人で10機以上の飛行機を発注するなどバカげている。これがせめて映画会社とか、アクロバットチームとかならまだわからなくもない。だが、相手はどう見ても普通の一般人である。その彼が軍用機をまとまと数注文することに、大田ならずとも誰だつて不審に思うに決まっていた。

さらに才蔵は爆弾発言を続けた。

「もちろん戦うためです。」

もはや大田は驚くことが出来ず、呆然としてしまった。

「あなたはテロリストか何かですか？」

すると、才蔵は笑つた。

「テロリストではありますよ。それに戦闘に使うのは確かですが、誰もこの日本、さらに大きく見れば地球上での戦闘に使う気は毛頭ありません。」

もはや大田には理解不能だった。

「地球じゃなければどこで使う氣なのですか？」

「まあ信じられないでしょうけど、実は異世界なんです。」

大田はその言葉に、口をあんぐりと開けてしまった。

「異世界？」

「ええ、実はですね・・・」

才蔵はハルケギニアと、そこで編成されている『東方義勇軍』について説明した。

「・・・というわけなんです。」

才蔵が話を終えたが、簡単に信じられる話ではなかつた。現代日本において、見ず知らずの人間に、いきなり異世界の話を聞いて信じるような人はよっぽどのお人よしである。

「いきなりそんな話を言われても、こちらとしては簡単に信じるわけにはいきません。」

だが才蔵はそう言われる事など百も承知であった。

「もちろん、信じられない気持ちはわかります。ですからこちらとしても、そちらの人間を異世界へ『案内しても』こちらとしては構いません。」

「はああ・・・そう言われましても、私だけでは決めかねます。役員会議に掛けませんと。」

「それは当然でしょうね。ただし、受注さえしていただければそちらの言い値で機体を買い取りますよ。ただし、この話は社内以外では他言無用で願います。」

その言葉に、大田はすぐ惹かれたが、上手い話に裏があるといふことも少しつかりとわきまえていた。

結局大田は、この時は明確な回答を避けた。ただし、本格的な飛行機をまとまつた数で造れるというのは、大田にとつて魅力的であることにはかわりない。

彼は急いで役員会議を開いて、この申し出を受けるか否かを協議した。もちろんあまりにも突拍子のない話に、会議は紛糾したが、才蔵は写真や映像資料、さらには前金で払う用意があるという言葉を残して帰つていったので、[冗談で済ませる話でもなかつた。

最終的に、若手の社員を派遣して彼の言つことが正しいかをまず確かめることとなつた。

御意見・御感想お待ちしています。

それから2週間後、疑心暗鬼ながら、才蔵についていく形で東京へと派遣された若手社員が興奮しながら桜花飛行機へと帰ってきた。

「社長、あの人と言つていたことは本当でしたよ！—異世界は確かにありました。そして彼らはそこで軍隊を作っていました！—飛行機の発注は本気だったんですよ！—」

さうにその若手社員が撮つてきた写真や映像によつて、異世界の存在と、平賀才蔵が言つていた『東方義勇軍』の存在も裏付けられた。

その翌日、才蔵が桜花飛行機を再び訪れた。

「信じただけましたかな？」

大田と話し合いを始めるなり、才蔵は微笑みながらそう言った。

「取り敢えず、あなたの言つていた異世界存在と、あなた方が戦闘機や練習機を欲しがつていてる理由もわかりました。しかしながら、なぜ我々なのですか？うちの会社は確かに飛行機を製造出来るだけの実力を持っていると自負しています。だが経験はほとんどないし、取るに足らない弱小企業ですよ？」

才蔵はその質問の答えを、表情一つ変えずに説明した。

「我々としてはだからこそあなた方に頼んだということでしょうか。大手企業や、飛行機の生産経験がある中核企業では、生産ラインに

余裕があるかわかりませんし、だいいち与太話として取り合ってもらえない可能性も高い。それに我々の秘密が漏れる可能性も同時に高くなる。失礼かもしだせませんが、この会社位の規模がそういう点で丁度良かったのです。加えて、北海道という立地も好都合です。試験飛行の時に目立たなくて良い。」

その説明に納得すると、大田は受注契約を纏め始めた。

「なるほど。わかりました。」

「それではお受けしてもらえるのですね？それなりにリスクもつきますよ？それでもよろしいのですね？」

才蔵が念押しの意味で問うと、大田は深く頷いた。

「もちろんです。」

こうして、桜花飛行機は『東方義勇軍』に協力してくれることとなつた。2人は堅く握手をして、協定締結の書類にサインした。

「それで、発注してもらえる飛行機はこないだ話された数で宜しいのですか？」

「取り敢えずは。ただし、場合によつては今後定期的に航空機を発注するかも知れません。しかもより多い数で。」

「わかりました。その場合は改めて方策を考えましょ。それと、費用は複数発注とはいえ、1機あたり1億前後になる可能性が高いですが、よろしいでしょうか？」

「ええ。最近は金の値段が上がっているので、我々が向こうの世界から持ち込んだ金の量で十分支払えます。」

現在金の値段は世界的な金属高騰でかなり上がっていた。そのため、一回に地球へ持ち込む量で十分支払える筈だった。

「それでは機体の納期について……」

「」の時の話をまとめると、以下のよつた感じで商談がまとった。

発注する機体の第一陣は赤とんぼ練習機6機、ゼロ戦4機の計10機。いずれも武装は義勇軍引渡し後の搭載とするが、無線機などは義勇軍側の指定した製品を搭載する。

材質に関しては、オリジナル通りにこだわる必要はなく、新素材などを使っても構わない。つまりカーボン等の素材を使つても良い。」の発注については他言無用。役所等に聞かれた場合に對してはアクロバット用、もしくは映画撮影用の機体と説明すること。

義勇軍側は前金として1億円を支払う。

なお北海道から東京への空輸は困難なので、分解して移送する。その費用は義勇軍側が負担する。（後に、これは北海道からも新月を利用してハルケギニアへの輸送が可能と証明されたために不要な条項となつた）

ゼロ戦については22型をモーテルとすること。

航続力はオリジナルよりも多少下がつても良い。その代わり防御力と武装を高めること。

今後の発注を見越して、改良型や新造機の設計を行うのは構わないが、発注要請がない機体の場合、桜花飛行機側が全責任を持つこと。（この条項も後に廃止となつた）

こうして商談が結ばれ、早速桜花飛行機はそれまでの大手の下請け仕事を全てキャンセルして、注文された飛行機の生産に全力投球することとなつた。

いずれの機体も昔実際に生産されていた機体であるので、設計図を手に入れるのは用意であつた。桜花飛行機の技術陣、といつてもこの時点においては、社長の太田含めたつた4人であつたが、彼らは早速オリジナルの改良を数箇所に施した。

しかしながら、その改良もこの時はまだまだ経験不足であつたために、小規模な物を数箇所行うに留めた。それでも機体の一部素材をカーボンに取り替え、さらに機銃の取り付け位置の変更（機首銃を翼内へ移設。）や新型防弾ガラスの設置、燃料タンクの防弾化などを行つた。

こうした改良は外見的には大して変化はなく、この新造ゼロ戦はこれまでに『東方義勇軍』が使つていた物と外見的には変化がなかつた。

ただし機体強度はオリジナルよりもはるかに強化されているので、

急降下して空中分解ということは絶対に起きない。さらに防御力もアップしているので、一発被弾したら火達磨といふこともないはずであった。

一方練習機の赤とんぼの方も、外見の変化はなかつたが、機体のフレームの一部にカーボンが使われたことにより、重量の軽減と機体強度が上がっている。

また両機種の共通事項として、エンジンを当時の設計のままで、現在の技術により造つた物を搭載した結果、軒並み出力は2～3割アップし、機体自身の性能も速度や燃費などが1～2割アップしている。

これらの設計は桜花飛行機設計陣が不眠不休で取り組んだ結果、約1週間で終わり（彼らは大晦日と正月を返上した）、1月4日の仕事初めのころには機体の製造に取り掛かっている。

機体の製造は、義勇軍側から2月の新月には空輸したいという注文があつたため急がれた。それまで月に1、2機のグラайдーや、大手企業の下請けで航空機用部品を作つていた工場では、突貫で10機の製造が進められた。

最新の機材と労力を惜しみなく投入した結果、赤とんぼの1号機は1月20日、ゼロ戦の方も2月1日にはそれぞれロールアウトした。

完成した機体はさつそく晴れの日を狙つて試験飛行が行われた。

もちろん、飛行するのだから当然国土交通省の監査が入つたのであるが、なんとかアクロバット用と飛行学校用の機体として検査を

バスできた。まあ、飛べるよに造ったのだからバスできた当然だつた。

桜花飛行機の技術者たちは、監査委員が機銃の取り付け位置などに気づくのではと警戒したが、結局怒るべきか笑うべきか、全く気づかなかつた。

そして2月10日までに赤とんぼ6機、ゼロ戦2機全てがロールアウトし、北海道の大地に翼を連ねることが出来た。

これらの機体はその後領収に来た義勇軍の空輸部隊のパイロットによつて試験飛行が行われた後、義勇軍に引き渡された。この時1人のパイロットの提案によつて、北海道でも新月を通れるか実験を行つた。その結果、通ることが出来た。ただし、通じていた先はトリスターニア上空ではなく、ラ・ロシェール上空だつたが。

この結果、地球製航空機輸送用のルートは変更となつた。そちらはそれまで使われていた物資の空輸ルートも、それまでの東京近郊の飛行場～ミライ飛行場へといつルートから、北海道桜花飛行機本社工場～ラ・ロシェール飛行場に変更となる。

とにかく、こうして義勇軍は地球での新造航空機の生産と輸送が可能となつた。もちろん、物語はここで終わりはしない。

御意見・御感想お待ちしています。

桜花飛行機は順調に義勇軍向けの飛行機の生産を続けた。北海道からも新月を利用した輸送が可能とわかつて以降は、工場からローラアウトした機体を簡単な地上試験を済ましただけでそのままハルケギニアに送り込む荒業が行われた。これは国交省の検査を受けるのが面倒くさくなつたからだ。

さらに才蔵らが一体どんな手段を講じたのか、本来なら警戒するはずの自衛隊や付近の飛行場の管制塔も何も言つてこなかつた。さらには飛行機を製造して、それをどこかへ運んでいることに気づくはずの市役所や税務署も何も言つてこなかつた。それどころか監査さえ入らなくなつた。

一応嬉しいことは嬉しかつたが、やはり余りにも怪しい話なので、一度社長の大田は工場を訪れた才蔵にその疑問を聞いたことがあつた。しかし、彼はただ笑うだけで何も答えなかつた。そのため、彼も従業員たちもただただ頭を捻るしかなかつた。

ちなみに、まさかほぼ同じ疑問を才蔵の孫が抱いているということを、大田が想像できるわけがなかつた。

とにかく、桜花飛行機はお役所を気にすることなく航空機の生産を行い、『東方義勇軍』に引き渡していく。工場を出る段階で、既にどの機体にも美しい百合のトリステイン国章、もしくはアルビオン王国の国章が描きこまれ、機体は旧日本海軍式に、濃緑に塗装されていた。

しかしながら、最初の2ヶ月は若干の改造しか加えていない飛行

機を送り出していたが、それでは面白くないので、桜花飛行機の技術陣は新たな機体の開発を開始した。

その1つが輸送機であった。これは大田が才蔵から現在ハルケギニアに物資を輸送している飛行機がいざれもセスナ機に毛が生えたような軽飛行機で行つていると聞いたからだ。

さすがに自衛隊が使つているような大型機は無理でも、現在使つている機体よりも一回り大きな機体にするだけでも大きく改善される。

そこで桜花飛行機は独自に輸送機の設計を開発した。もつとも、新規に開発しては時間も予算もバカにならないので、ゼロ戦と同じく第一次世界大戦時の機体を基に開発することとなつた。

なんでわざわざ旧式機を模倣するかというと、これは『東方義勇軍』で使用している飛行機がいざれも第一次世界大戦型のレシプロエンジン機であつたからだ。下手にジェット機やターボ・プロップ機なんか投入したら整備面で大きな混乱を来たしてしまう。さらに飛行場の設備だつて対応していないのだ。

これは技師の一部をハルケギニアに派遣して、現地調査させて得た大田社長や幹部社員たちの結論であつた。

そんなわけで、『東方義勇軍』向けに桜花飛行機は輸送機を設計し始めた。そのモデルとなつたのは、アメリカ製のC47「スカイトレイン」である。この機体はDC3型輸送機の軍用機タイプで、4・5tの荷物を輸送可能であつた。後に大統領となつたアイゼンハワー元帥は、同機を第一次世界大戦の勝因の一つとまで言わしめた。またソ連や敵方である日本でもライセンス生産されたまさに軍

用輸送機の傑作であつた。

この機体ならばそれまでの機体の4～5倍の荷物を輸送することが可能となる。特に小型のショベルカーや車ならこれまでのように解体せずに済む。

開発に当たつてはゼロ戦や赤とんぼと同様一部の機体素材をカーボンに変えて軽量化するなどの工夫を凝らした。さらにハルケギニアでの使用も考えて、銃座を設けて火力を強化した。場合によっては翼下にロケット弾を搭載することも考慮された。

この機体はOY-1型と命名され、設計開始2カ月後に生産が始められその1ヶ月後には1番機がロールアウトしている。

この輸送機は最終的に改良機のOY-2型の登場までの間に80機近く生産された（内20機はロマノフ公国に輸出された）が、この内半分は部品やエンジンをハルケギニアに持ち込んでのノックダウン生産とされた。これは現地における航空機生産技術を確立したかった義勇軍総司令官、平賀才吉大将の要請によるものだった。

また義勇軍で使用された機体は地道に物資の輸送に活躍したが、ハイライトと言えたのがハルケギニア戦役中に行われた聖地搜索作戦における物資輸送で、天沢大尉操縦の機体が現地に派遣された調査部隊への物資、機材のピストン輸送を行い、その帰路にはエルフ、人間問わず負傷者をトリステインへと運んだ。

この時エルフの負傷者が話した情報から、ガリアの火石の開発計画を察知したことは、その後の戦争の運命を変えたと言つてよかつた。

戦争終了後は設立された民間会社に一部が譲渡され、エルフとの国交正常化を成し遂げた後、初めての航空便として乗り入れたのも同機種であった。

他にも桜花飛行機が生産した機体は何機種がある。SBDドーントレスを模倣したOB1型、水上機「瑞雲」の模倣機OW1型等である。ただしこれらは実験機の域を出ることなく、少數生産に終わった。

大量に量産された機体で有名になったのは、やはり「超零戦」であつた。この機体はゼロ戦の名こそ引き継いでいたが、ほとんど別物であつた。エンジンは環状冷却器を備えた液冷2750馬力、新開発の20mm機銃4基を搭載し、最高速度は720kmを誇つた。

丁度ハルケギニアの整備兵たちの練度が向上したころに投入されたこの機体は、初めての液冷機ということもあつて、固定化の魔法を応用してもなお稼働率は決して高くはなかつたが、全力発揮さえ出来ればすばらしい性能を發揮するので、パイロットたちの羨望を一身に集めた。

特に開戦2カ月後に試験飛行と国境偵察を兼ねた平賀才人男爵大佐操縦の「超零戦」が、味方部隊上空でガリア軍のドボアチン520戦闘機、ならびにマツキ202戦闘機12機と空戦を行い、わずか5分で8機を撃墜し残存機を遁走せしめたのは同機の性能に惚るところが大きい。もちろん、竜騎士など敵にもならない高性能であった。

この「超零戦」は最終的に地球での生産、ノックダウンあわせて2年間の内に300機近くが生産されたベストセラー戦闘機となつた。義勇軍が初期に使用した機体が、性能陳腐化のために王立の空

軍博物館に入れられるか、民間に払い下げられていくなどして退役していくのと入れ替わる形で、同機はハルケギニアの空の防人となつた。

なお同機は途中で発動機を交換した2型に生産を移行している。

「超零戦」に比べて地味であったが、F2A「バッファロー」を参考にした大量生産型戦闘機も生産され、こちらも対地攻撃や対艦攻撃に力を発揮している。

また大した活躍はしなかつたが、取り回しのよさから重宝されたのが旧日本軍の98式直協機を模倣したOT2型である。同機は練習機としても攻撃機としても使用された。また「赤とんぼ」と違い、風防がある点が好まれた。

1年間に及んだハルケギニア戦役で、ハルケギニアの技術力と科学力は大幅に向上了した。その結果、桜花飛行機は同戦役中にハルケギニアのアルビオンに航空機生産工場を設置している。

同社と社長の大田には、後のハルケギニア王国連合からダイヤモンド工業勲章を授与されている。

御意見・御感想お待ちしています。

ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール。トリステインでも名高い公爵家であるヴァリエール家出身である彼女は、幼少の頃よりアンリエッタ女王からの信頼が厚く、アンリエッタ彼女がアルビオン王室へ嫁いで以降のトリステイン王室王位（厳密には代王位）を任せられた。

後にハルケギニア全体を巻き込んだハルケギニア戦役において、当初は絶望的と言われた状況を見事切り抜け、トリステインに勝利をもたらし、聖地の謎を解き明かしてエルフとの和睦の切欠を掴み、さらに新たに発見されたロマノフ公国との友好関係を結んだことにより、貴族、平民問わず国民からの支持を集めた彼女が正式な王位に就いたのは極々自然な成り行きと言えた。

そんな彼女とともに有名となつたのが、異世界から彼女の元に償還された平賀才人である。地球からやつてきた人間を中心にして編成された『東方義勇軍』の兵士としてトリステイン、ひいてはハルケギニアのために戦い、タルブ防衛線、アルビオン解放戦争、ハルケギニア戦役で多大な戦果を挙げた。そして最終的に公爵中将まで昇りつめた彼は、かなり早い時期にルイズの夫としてトリステイン王室へ入っている。

公式に発表された時（結婚から2年後）は、トリステインを救つた王と戦士である2人の結婚、才人の王室入りに対する国民や貴族からの反対は特になかつたが、結婚に至るまでと、また結婚してからしばらくの間は2人にとって苦しい時期が続いた。

今回はそんな2人の結婚前後の物語である。

ルイズが王宮へ入った直後の頃、彼女の心は穏やかなものではなかつた。慣れない公務に加えて、先日才人と婚約したにも関わらず、彼との結婚の話が全く進んでいないのが原因だつた。王宮内的一部重臣から、たとえ現在は男爵であるといえど、一時的に平民出身者を王室へ名を連ねさせることに批判が出たのである。（この時点で、ルイズはあくまで一時に王位に就くだけで、アンリエッタとウェーレズに2人目の子供が生まれたらその子が正式な王位に就く予定だつた。）

前女王のアンリエッタや、アルビオン国王のウェーレズは賛成してくれているにも関わらず、もともと伝統と名誉を重んじるトリスティン貴族の性格が、ルイズと才人の結婚を阻む形となつた。

さらに、王宮へ入つたことで彼自身と会う機会さえ激減してしまつた。そんなわけで、王宮へ入つてからしばらくの間、彼女は溜息を日に何十回とつく日が続いた。

「はああ・・・今日も才人と会えない・・・」

執務用の机に突っ伏して溜息をつく彼女の姿が、この時期マザリーニ枢機卿や、王宮で働く使用人からもよく見られた。

「なんで才人と結婚できないのよ・・・私たちはちゃんと親の許可を得て婚約したのよ・・・」

2人とも相思相愛であるのに関わらず、階層や立場の差が2人の前に大きく立ちはだかっていた。

晩年、彼女が書き記した回顧録には、この時期のつらい心境がかなりのページを割いて書かれることになる。それだけ心に残るほど、彼女にとつてはつらかったようだ。

一方ルイズの相手である才人の方はと言うと、この時期義勇軍の任務で飛び回っていた。彼自身は航空隊のパイロットという肩書きであつたが、それ以外にも連絡任務や書類の輸送任務、さらに多忙のためアルビオンから動けない才吉総司令官に代わつての視察など、やることはかなり多かつた。

そんな彼は、ルイズと会えないことを悲しんだり嘆いたりすることは決して人前ではしなかつた。だが、時折人目を憚るように、ルイズと2人で撮つた写真を納めた手帳を愛おしそうに見ている姿を、エース同僚や上官から何回も見られている。

また他の任務が忙しく、王宮への連絡任務に就けない時などは、大いに落胆している姿も見られている。

「今日もルイズに会えない。」

そう言つて一人、何かを想いつめているようなことが何度もあつた。

使い魔時代には結構喧嘩していたにも関わらず、2人の愛し合いっぷりはこれでもかといふほど強かつた。あまりに強いもんだから、後に恋愛ドラマにまでなるのであるが、それは別の話である。

そんな2人の周りは、2人を早く結婚させたいなとは思つていたが、さすがに相手が政府の大臣では、説得するのは容易なことでは

なかつた。

だから、たとえば才人の周りの人々、菅野中佐とか才人の生徒であるカルロ上等兵とかシエスタ、相棒のインテリジエンスソードのデルフリンガーなどは、才人を励まそうと色々なことをした。厳密には一緒に酒を飲んで彼の愚痴に付き合つたり、一緒に食事して彼の愚痴に付き合つたり、一緒に遊びに行つてその先々で愚痴に付き合つたり、etc・・・

そんな感じで、ルイズが王宮へ入つてからの2ヶ月近くの間、2人はお互いの仲を進展させられないことに悶々とする日々が続いた。

状況に変化が見られたのは、ロマリアから教皇のヴィットーリオがやつて来た時である。彼のトリステイン來訪の目的は、自らの目で異世界の人間が作った『東方義勇軍』を見ることと、そして彼らをいざ聖戦が起きた時に味方へと引き込むことであった。

最終的にその目的を彼が果たすことはなく、それどころか地球の宗教戦争の歴史を聞いて、逆に自分たちの聖戦について深く考えるようになるのであるが、それは別の話である。

とにかく、その彼は義勇軍がアルビオン内戦で始祖が賜つた王権を守つたことに深い感謝を示した。これは未だに義勇軍に対しても侮蔑の念を抱いていた、保守派の貴族たちに大きなショックを与えた。

また、彼が去り際にトリステイン王宮でした発言が、ルイズと才人の2人に大きく味方するものとなつた。

「そう言えば、ルイズ殿下は義勇軍の平賀才人男爵と婚約をしているそうですね。しかし結婚は王宮内で反対が起きているので先送り

していようと聞きました。私は別にお2人が結婚しても良いと思いませんよ。才人殿は確かに平民の出身かもしませんが、アルビオンやタルブで類まれなる戦歴を残していますし、神が遣わした『左手』であるのですから。」（ヴィットーリオはスパイ情報によって2人が婚約していることまでちゃんと把握していた。）

ルイズからしてみれば、言動とその情報収集能力からロマリアの教皇とその使い魔には大いに警戒心を持つていた。また才人からしてみれば、やはりルイズ同様2人のことを大いに警戒していましたし、またブリミル教は否定こそしないが、別に信じているわけでもなかった。

だからヴィットーリオにこう言われることに、ハルケギニア人のルイズはともかく異世界出身の才人はそんなに嬉しくは感じなかつた。

しかしこの言葉によって、政府内の結婚反対を唱えていた重臣たちに変化が起きた。それまで頑なに反対していたのが、賛成、もしくは条件付の賛成に回つたのである。それこそ掌を返したということが相応しい物だつた。

警戒していた人物の鶴の一声で結婚への話が進展したのは、2人にとって皮肉以外のなにものでもなかつたが、取り敢えず結婚できるのだからということで、気にしないことにした。

こうして2人の結婚は現実味を帯びだした。その事に本人たちはもとより、ヴァリエル公爵や才吉ら父兄も喜んだことは言つまでもない。しかしながら、結婚できることになつたといつても、それで全てが良いわけではない。本番はそこからで、王宮では喧々諤々の議論が開始されることとなる。

結婚 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

才人とルイーズの結婚に関して、ロマリア教皇のヴィットーリオが賛同の意を示したことが、2人にとって追い風となつた。しかしながら、それでも反対する輩はいた。

結婚に関する会議が始まると、賛成派と反対派で喧々囂々の議論となつた。

「2人の結婚は教皇聖下もお認めになつてゐることだぞ！…それに、お2人はいづれ王室から出ることになるのだから良いではないか！」

と賛成派の大臣が言えば。

「そつかもしれないが、元々平民である人間を一時的とは言え王室にいれるなど前代未聞だ！？今後に禍根を残さんどうして言えるか！？」

という感じで反対派の大臣が言い返し、その勢いのまま応酬が続いた。これはこれまでにも見られていた光景で、このまま続けば結局議論は平行線のままであつたが、しかしこの時は違つていた。

ヴィットーリオの発言のおかげで、これまで反対派だった一部の人間や中立派だった意見の人間が賛成派に回つたために、反対派の人数が少なくなつてしまつていて。そのせいで反対派の勢いが以前ほどではなくなり、結果賛成派が会議の流れを掴んで優位に立つのは当然の帰結といえた。

もともと（古い）トリスティンの貴族は伝統を重んじることで知られているが、その反動がどうも論理的な議論が苦手と見えた。こうなると、少数派はただ押し切られるしかない。

しかしながら、例え良いことであっても革新的なことにはほとんど興味を持たなく、やたら反対するくせに、古いことにはとことん拘るのが（古い）トリスティン貴族だった。

「では2人の結婚を認めるにしても、条件がある。」

1人の反対派の老齢な大臣がそんなことを言い出した。釣られる形で他の反対派の人間も妥協し、条件付での結婚を認めた。

この後、2人の結婚に関する会議はその条件を詰める会議へと変わった。そしてこちらはそこまで白熱した会議とはならなかつた。賛成派もさすがに無条件で2人の結婚を認める気などなかつたからである。

そして最終的に取り決められたのは以下のような物だつた。

1 2人の結婚に関しては公には発表しない。他の王室に関しても事情を理解しているアルビオン王室のみ伝えるものとする。

2 2人に子供が生まれても、その子は王宮では育てない。

3 平賀才人氏は王宮内に住まない。（つまりは通い婚）

随分と厳しい条件である。特に才人が一緒に住めないというのは、ルイズにとって不本意なものであった。だが他の国の特使やら大使やらがよく出入りする王宮内に、彼を住まわせると何かと都合が悪

いのも事実であった。どうせ数年の間（と彼女他皆そう考へていた）であるのだから、我慢である。

さらに反対派は、2人が結婚しても才人には王室の紋がついたマントを渡さないようにしようとした。これはなんとかルイズと賛成派のマザリー二枢機卿たちの説得によつて阻止できた。

最終的にこの条件の下で、2人の結婚は進められることとなつた。もちろん、ルイズはそれでも不満ではあつたが、結婚できるようになつたのだから贅沢を言つてはいけなかつた。

2人の結婚が決まると、結婚式の準備が早いスピードで行われた。もつとも結婚式とは言つても、先ほど書いたとおり公には2人の結婚は発表されないからさぞやかな物である。

参加する人間も2人に関係ある人物としては、両家の両親に兄弟（ルイズの姉のカトレアは体調の関係で欠席が予定されたが、無理を通して参加することとなつた）、そして親しい友人を5人ずつのみとされた。

才人は義勇軍内でお世話になっている菅野中佐にシエスタ、そして才人の下で飛行訓練を受けていたカルロ上等兵、そしてアルビオンにいる豊とティファニアを呼んだ。

ルイズの方は魔法学院時代の友人であるキュルケとギーシュ、モンモランシー、そして恩師であるオスマン校長とコルベールの5人を呼んだ。本来ならギーシュではなくタバサを呼ぶつもりであったが、彼女は生憎この時まだ地球にいたため無理であった。

ちなみに参加者への招待状には、他言無用を強く念押しする一文が書かれていたのは言つまでもない。

参加者が決まると、本人たちが着る服の採寸等、着々と準備が進められた。

その準備が行われている最中、アンリエッタアルビオン王国王妃がトリステインに里帰りして来た。母親であり、現在は隠居したマリアンヌに会いに来たのである。彼女は数日間トリステインに滞在し、そのまま2人の結婚式に飛び入りで出ることとなつた。

「よかつたわねルイズ、才人殿と結婚できることになつて。きっとウェールズ様もお祝いしてくださいさるわ。」

結婚式の3日前、ルイズとアンリエッタの2人は王宮の庭で静かに椅子に座りながらお茶を飲み、お喋りを楽しんでいた。

「けど姫様、結婚しても才人と一緒に暮らせるわけではありません。

ルイズが少しばかり憂鬱そうに言つた。

「仕方がないわよ。けど数年の我慢よ。その・・・私たちに2人目の子供が出来るまでだから。」

アンリエッタがそんなことを言つが、ウェールズと彼女の間には、未だに1人目が生まれる兆候すらない。それによく考えれば、子供がたて続けに生まれるという保証もない。もし2人に2人以上の子供が生まれなかつたら。それはそれで厄介なこととなるだろう。

ヨーロッパの中世時代と文化が似ているハルケギニアにとつて、跡継ぎを生むことは非常に重要なことであるし、その跡継ぎがどのような人物かも非常に重要である。例を挙げるなら、ガリア王室がよく当てはまるだろう。

またそれが生む側にとつて大きなプレッシャーになることも事実だつた。アンリエッタは先ほどの言葉を、ルイズを思つて言つたかもしれないが、それがさらなる圧力になる可能性もあつた。

子供の頃から、そして今も親友であるルイズは彼女に負担をかけさせてまで自分の幸せを掴みたいとは思つていなかつた。

「別に、私そんなつもりで言つたわけじゃありません。姫様は気にしないでください。」

アンリエッタの言葉に、ルイズはそう返した。

「相変わらず変わらないわね、あなたは。だからこそ才人殿もあなたとの結婚を望んでいるんでしょうね。」

「もう、茶化さないでくださいよ。」

「茶化してなんかないわ。傍から見ればあなたたちはお似合いのかップルにしか見えないもの。」

才人とルイズの2人は喧嘩して、言い争いをしていくことが結構ある。しかしそれはそれで『喧嘩するほど仲が良い』と言つとおり、周りから見れば仲の良いカップルに見えるものだ。事実2人の仲は悪いように見えて非常に良い。

「とにかく、3日後が楽しみだわ。ドレスはもう仕立てたのよね？」

「ええ、一昨日終えました。」

彼女のドレスは母親のカリーヌが付き添つて造り、一昨日完成していた。

「ルイズのことだからきっと良く似合っているでしょうね・・・そう言えど、才人殿はどんな服を着るんでしょうね？」

「さあ？多分義勇軍の制服だと思いますよ。それに才人がタキシードなんか着たって似合わないです。」

「それもそうね。」

2人はそう言つと、お互ひの顔を見て笑つた。

結婚 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ルイズとアンリエッタが王宮でお喋りしながらお茶を楽しんでいた頃、トリスターニアの市街地では、銃士隊隊長のアニエスが歩いていた。この日の彼女は非番で、最近になつて改訂された銃士隊の士官服ではなく、私服を着て久しぶりの休日を楽しんでいるところであつた。

もつとも彼女の場合は服とか化粧品とかそういう物には興味はない。だから休日にやることといえば、古書店に言って軍事関係の本を買って勉強することや、精々どこかの店でお茶でも飲むくらいである。むしろ官舎の庭で自主トレーニングを行つている方が多い。

だからこの日も正午を過ぎる頃にはお皿当ての本を買い込み、官舎へと戻ろうとしていた。そんな彼女の視界の中に、3人の顔見知りの人物たちの姿が入ってきた。

「あ、あれは？」

その3人組は、いまやトリステインではお馴染みとなつた白い義勇軍の制服を着込んでいた。ただし1人だけはキュロットスカートを履いているから、女性だつた。もちろん、その人物にもアニエスは見覚えがあつた。

彼女は直ぐに彼らに声を掛けてみた。

「おい！」

すると、3人全員が彼女の方へと振り向き、1人が声を掛けてき

た。

「ああ、アニエスさん。」

その人物、平賀才人はアニエスに気がつくと、すぐに近寄ってきた。他の2人、菅野中佐とシェスタもその後に続いてやつてきた。

「じんにちは。」

「じんにちはアニエス隊長。」

「じんにちは、アニエスさん。」

「ああ、じんにちは。菅野中佐とシェスタ兵曹もじんにちは。」

3人はそれぞれアニエスに向かつて挨拶する。

「珍しいですね、アニエスさんが私服で歩いているなんて。」

普段の制服姿しか見たことがない才人は、少しばかり驚きを交えた声で言った。

「今日は非番なんだ。そういう才人たちこそ今日はどうしたんだ？
菅野中佐とシェスタ兵曹も？」

すると、それには菅野が答えた。

「今日は結婚指輪を買いに来たんです。」

そう言われて、アニエスはルイーズと才人の結婚のことを思い出し

た。近衛部隊と言えど、兵士たちには今回の結婚について申し渡されていない。ただし隊長のみには例外として伝えられていた。

「すると、才人が殿下に送るやつか？」

アニエスは少しばかり声のトーンを落して言った。

「それもありますが、今回菅野中佐もシエスタと結婚することになつたんです。それで2人の分も買いに來たんです。」

すると、アニエスは驚きの表情をした。

「ほう、2人も結婚なさるんですか？」

アニエスにそう言われて、シエスタは少しばかり顔を赤くした。そして菅野がアニエスに向かつて説明する。

「ええ、本當ならもう少し後でも良かつたんですけど、先日タルブに行つたときに、彼女の両親からしきりに結婚を勧められまして。だから。」

まあ義勇軍の士官なら確かに結婚相手として申し分ない。シエスタの両親が喜び、結婚を急がせたのも無理はない。ただ出会つてからそんなに時間が経つていないと菅野の言葉も事実であったが。まあ、それについては菅野の腕にシエスタが自分の腕を絡ませている光景を見れば心配なさそうである。

「そうですか、とりあえず、2人ともおめでとうございます。」

「「ありがとうございます。」」

アニメスに祝いの言葉を掛けられ、菅野とシエスタは軽く頭を下げて礼を言った。

「それじゃあ、俺たちはそろそろ行きますね。」

と、才人が言つたのであるが、アニメスが引き止めた。

「あ、ちょっと待て才人！」

「はい！？」

そして彼女は才人に近寄り、彼にしか聞こえないように小声で言う。

「お前、ちゃんとわかっているだろうな。結婚のことは、結婚式に呼ぶ人間以外には言つてはいけないんだぞ。」

「わかつてますよ。」

才人は笑顔で言つたが、王宮内で働くアニメスとしては、そう簡単に「なら良い。」と答えるわけがない。

「ちゃんとわかつているのか？特に結婚指輪を作る時なんか、嫁の名前を聞かれて、店の職人にバカ正直に言つたりしないか？」

随分と念を入れるが、ほんの些細なことが機密漏洩などの不味いことを引き起こすことをわかっているだけに、アニメスとしてはこのような態度をとつたのであった。

もつとも、才人としては深く追求されるということは自分が信頼されてないことに他ならないので、気持ちの良いことではない。

「大丈夫ですって。そんなに俺のことが信頼できませんか？」

さすがにこう言わると、アニエスとしてもこれ以上の追求をする気持ちは削がれる。それに才人だけではなく菅野とシエスタも引き止めている格好だから、余計にそのような気持ちとなる。

「わかった。だが、本当に気をつけるよ。」

最後の念を押すアニエス。

「わかつていますって。それじゃあ、アニエスさん。俺たちはこれで。」

才人はアニエスから離れ、待っている2人の方へと向かう。

「ああ。またな。」

通りの人ごみへと消えていく3人の姿をアニエスはしばらくの間眺めていた。

アニエスとの会話を終えた3人は、そのまま宝石店へと向かった。

3人が見せの扉を開けると、中には店主と思われる男が1人だけ椅子に座つて待つているだけで、閑散としていた。

こうした店を利用するには大概貴族が、裕福な商人だけである。ちょうどこの頃になつて平民層にも、高級な宝石を買えるようになつた人間が出てきたばかりであるから、お客様がいなくてもなんら不思議ではなかつた。

一応平民の間にも指輪をつける習慣はなくはないが、こんな高そうな店には来ない。

「へい、いらっしゃい。おやっ、こりや驚きだ。『東方義勇軍』の軍人さんとはめずらしい。」

店主が3人の制服を見ながら言つた。

「指輪を作つて欲しいんだが。」

まず先に言つたのは菅野だつた。

「はあ、指輪ですか？ 良いですけど、ちゃんと代金はありますか？ うちはそんじよそこらの安物店じゃないものですから。」

すると菅野は財布からエキュー金貨を50枚ほど出した。ちなみに彼の月当たりの基本給は現在30エキューである。これに飛行手当で等の各種手当でが出て40エキューほどになるが、それでもこの額はかなり奮発していると言つてよかつた。

ちなみにシユバリエの貴族年金が500エキューからすると、彼の給与レベルはかなり良い。

「これで大丈夫か？」

菅野が尋ねると、店主はすぐに返事をした。

「はい、銀の指輪ならこれで十分ですね。けどお客様運が良いですね、今月から銀の相場がいくらか下がりましたからね。」

その言葉に、才人は苦笑した。銀の相場が下がったのは、十中八九外洋諸島の鉱山から掘り出された銀が市場に出回り始めたからだ。もつとも、まだこの時点では機密なので心の中に押しどどめておく。

「それじゃあそれで頼む。あと、指輪には片方に、ナオシよりシエスタ。もう片方に逆を彫っておいてくれ。」

「わかりました。」

主人は菅野から言われたことを紙にメモした。

その後、2人の指のサイズの確認やどのデザインにするかをシエスタが選ぶなどして、最終的にどの指輪にするかを決め、最後に菅野が契約書にサインをした。

「それじゃあ、2日後、取りに来てください。それじゃあ、次の方。

「

次は才人の番だ。

結婚 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「次は君?」

菅野中佐たちから注文を聞き終えた店主が、今度は才人に尋ねてきた。

「はい、お願ひします。」

菅野たちに代わって、才人が店主の前に出る。

「君も銀の指輪で、良いかね?」

店主は才人をみてそう尋ねてきた。その質問に才人は頷いた。

「はい、それでお願いします。」

この言葉に、菅野とシエスタが反応した。

「おいおい、才人君、それで良いのかい?」

「そうですよ、才人さん。それじゃあ彼女喜びませんよ。」

2人が驚くのももつともだつた。2人は今回結婚式に呼ばれているので、才人の相手が誰であるかをちゃんと知つていて。だから、彼が仮とはいえ一国の元首に、自分たちと同程度の指輪を贈りうつとしていることが信じられなかつた。

だが才人は表情を崩すことなく、ただ一言、

「いや、それで良いんです。」

とだけ言った。

「どうしてですか？何か問題でもあるんですか？」

シエスタが心配そうに尋ねる。

「まさか、君に限つて金がない、なんてことはないよな？」

菅野が冗談交じりの声で言つ。なんでそんな言い方をしたかといえば、絶対にそんなこと有り得ないからだ。何せ才人は現在男爵としての貴族年金に、菅野と同レベルの給料を貰つているのだ。金に困るなどよっぽどのことだ。

「まさか、金なら十分にありますよ。ただ、今はあいつに、それ以上の物を渡すわけにはいかないんですよ。」

才人はいつになく真剣な表情で、2人に向かつて言つた。だから2人もそれ以上は何も言えなかつた。

「あのう、それで銀の指輪で良いんですね？」

3人が会話している間、蚊帳の外に置かれていた店主が、恐る恐る聞いてきた。

「ああ、すいません。はい、それでお願いします。」

才人は彼のほうへと再び体を向けた。

「わかりました。それから、何かメッセージを内側に彫りますか？」

才人の場合、先ほど菅野たちがしたような直接的なメッセージを彫ることは出来ない。そんなことすれば、店主に気づかれてしまう。

だから才人は別のことを考えてきていた。

「ああ、だつたらこの紙に書いてあることを彫ってください？」

才人はポケットから何やら紙切れを取り出して、店主の手に渡した。

「はい？」

店主は才人からその紙切れを受け取ると、一読した。

「これは、また見慣れない文字ですね。」

その紙切れに書かれていたのは、明らかにハルケギニア語ではなかつた。書かれていたのはハルケギニア人には全く馴染みのない日本語であつた。内容はこうである。

「才人よりルイズへ。」

直接書き込むことの出来ない、彼の苦肉の策であつた。

「それは、俺の生まれた国の文字です。それをそのまま指輪に彫つて下さい。」

店主は見慣れない文字を彫れという仕事に、戸惑いを感じていた。

「はあ、よひしきですが、これは一体どういつ意味ですか？」

普通の人間ならそう質問する。この店主も例外ではなかった。

「残念ですが、お教えできません。とにかく、そのまま彫ってください。」

「そうですか・・・わかりました。」

何か釈然としない表情をしながらも、店主は頷いた。

「それから、それを明後日までに絶対に仕上げてください。」

すると、店主の表情が驚愕のものとなつた。

「え！？ 明後日ですか？ さすがにそれはちょっと、先ほどのお客さんたちからの仕事もありますし。なによりこいついう慣れない文字ですからね。せめて3日はいただかないと。」

店主が無理な理由を並べ立てるが、才人は妥協しない。

「いいえ、2日でお願いします。そのためならいくらでも出しますので。」

すると才人は70~80枚近い金貨を机の上に差し出した。

「すうじい-けど、いや、しかしですね・・・」

店主は未だに決めかねてこるみづだ。すると、菅野が前に出た。

「それじゃあ店長さん、俺たちの指輪はしばり伸ばしてくれて良いよ。」

「えー？ 本当にそれで宜しいのですか？」

店長が菅野に確認をする。

「ええ、どうせ俺たちの結婚式は来週ですから。少しくらべ遅れても良いですよ。な、シエスタ。」

「はい。」

菅野の言葉にシエスタも頷いた。

「それなら、わかりました。あなたの指輪を優先して作らせてもらいます。なんとか2日後には渡せると思っています。」

「ありがとうございます。」

才人は頭を下げて礼をした。

「それじゃあ、指輪のサイズですが、お相手の方はどうしますか？」

「あ、それならちゃんとあるんで。これです。」

今度は円形に結ばれた糸を才人は店主に出した。

「わかりました。それじゃあこちらの書類にサインをお願いします。」

「

才人は差し出された書類にサインした。

「それでは、2日後店に来てください。後ろのお2人は、取り敢えずの目安として5日後以降にお願いします。」

店主が3人に向かつて言った。

「それじゃあお願ひします。」

「頼みます。」

「よろしくお願ひします。」

3人はそれぞれに礼を言つと、店から出ていった。

「ふう、変わつたお客さんだつたな。さてと、それじゃあ早速仕事に取り掛かるとするか。」

店主はもう一度書類に印を通した。そして、名前の所に注印した。

「うん? ヒラガ・サイト……どこかで聞いたような名前だよな……どこだつたかな……うーん……ああ! ……」

店主は思い出すと、大声で叫んでいた。

2日後、才人は再び店を訪れた。

「ここにちわ。」

「いらっしゃい、て、あ！！平賀様、お待ちしておりましたよ。」

店主の意外な言葉に、才人は驚いた。

「ええと、どうかしたんですか？」

すると、店長は笑顔で言つた。

「まったく、先日來た際言つてくれれば良かったのに。まさかあなたが、あのタルブとアルビオンでの英雄だったとは…。」

「あれ、俺言いましたっけ？」

「言わなくたってわかりますよ。ヒラガ・サイトつて言つたら、我々平民からしてみたら英雄以外の何物でもない。なにせ戦功を認められて男爵になつたほどのお人ですからね。」

その言葉に、才人は苦笑した。才人自身は別にそんなことは気にしない性格だからだ。

「そうですか・・・それよりも、指輪出来てますか？」

「もちろんですとも。」

そう言つと、店主は店の棚から、小箱を一つ取り出した。そして才人の前に持つてくると、その蓋を開けた。中には銀で出来たシンブルなデザインの指輪が入っていた。

「ありがとうございます。無理をせへすいません。」

「いえいえ。それにしても、そんな銀の指輪でよかつたんですか？金で出来たのや、宝石を付けたもつと豪華な物にだつて出来たんですよ？」

店主が不思議そうにして聞いてきた。すると、才人は笑みを浮かべながらこう言った。

「今はこれで良いんですよ。」

「…？」

店主にはその言葉の意味は全く理解できなかつた。

「それじゃあ本当にありがとうございます。」

「またの御来店お待ちしております。」

店主に軽く挨拶すると、才人は店の外へと出た。

「ふう・・・しかし、今は良いつどいつことなんだ？」

店主は才人を見送つた後、一人そう言って首を傾げた。彼がその答えの意味を知るのは、数年後のことである。

結婚 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

そしてついに、才人とルイズの結婚式の日がやつて來た。結婚式は王宮内の礼拝堂で行われることとなつたが、前から述べているように極秘の結婚式であるから、参加者の少ないどこか侘しいものとなつてしまつた。

それでも、結婚式は結婚式である。2人は精一杯に着飾つて、式に臨んだ。

才人の服は、ルイズたちが予想したとおり軍服だつた。旧日本海軍の士官服を模して作られた純白の礼装（義勇軍の第1種軍装）に身を包み、胸にはタルブ空中戦、ならびにアルビオン解放戦争従軍を示す2つの徽章と、トリステイン政府から送られた勲章が誇らしげにつけられていた。

しかも2つの徽章は日常的につける略章ではなく、煌びやかな儀礼用徽章だつた。

才人は普段は茶色の略装を着るから、こんな派手な格好はしない。白い礼装を着るにしても勲章をつけることなど滅多にない。それだけに才人には氣恥ずかしさがあつた。

「なんか恥ずかしいな。こんな勲章をじゅらじゅらつけるなんて。」

着替え用に用意された部屋にある鏡を見ながら才人は呟いた。すると、部屋に持ち込んであつた相棒のデルフがかたかたと鞘をならしながら言つた。

「いいじゃねえか相棒、せつかくの晴れ舞台なんだから。あの娘もきっと喜ぶぜ。」

相棒の結婚式とあつてか、その声はどこか嬉しそうだった。

「それにしても、『虚無』の担い手と『ガンダールヴ』が結婚するとはね……」

今度は一転して、何か思いだす物があるのか、感慨深げに言ひテルフ。

「うん！？何か言いたいことでもあるのか？」

才人が怪訝な表情で言った。だがこの時は、結局それ以上のことは聞けなかつた。何故なら部屋の扉が開いて、才人の母親である瑞江が入ってきたからだ。

「才人、着替え終わつたの？終わつたのなら早く来なさい。」

「わかつた。それじゃあ、デルフ、行くとするか。」

才人は帽子を被り、デルフを掴むと部屋を出た。

式場となつた礼拝堂は王宮内にあるとはいえそれなりに大きい。先日口マリア教皇のヴィットーリオが来た時も、ここで祈りを捧げる儀式が行われた。

しかしながら、今日の結婚式では礼拝堂内は解散とは言わないま

でも、どこかさびしい印象を抱かざるを得なかつた。

参加者は双方の家族と、5人ずつの友人。そして、今回司祭の代わりとして枢機卿のマザリーーだけである。

才人が式場へ行くと、早速悪友とも言えるギーシュが声を掛けってきた。

「おお才人！…中々似合つてゐるじゃないか…！」

「ありがとう。けど、普段こんな格好なんてしないから、結構恥ずかしいんだよな。」

ルイズが代王となつたために学院から出て、才人も義勇軍で働いている今、ギーシュと会う機会は極端に減つてゐる。しかしながら、それでも2人の友情に変わりは無かつた。

「いやいや、僕から見ればもう少し派手に着飾つても良いんじゃないかと思つよ。どうだい？」

才人は苦笑いしながら言つた。

「お前、じやないから、遠慮しておくよ。」

「ああ、ひどいなあ。」

そしてお互いの顔を見合つて笑つた。

ギーシュに続いて、他の友人たちも声を掛けてくる。

「才人、結婚おめでとう…！」

今回アルビオンから呼ばれたテファアが駆け寄ってきた。続いて、彼女に召喚された豊も才人の所へとやってきた。

「おめでとうございます少佐。心から祝福申し上げます。」

豊は義勇軍の軍人なので、才人と同じ純白の礼装を着ていた。ただしこの時点での階級は才人より下の大尉なので、敬語を使っている。

「2人ともありがとうございます。」

才人が2人に例を言うが、それに対してもギーシュが横槍を入れてきた。

「いやあ、これはなんと綺麗な人だ。初めまして、私はトリスティン魔法学院2年生のギーシュ・ド・グラモンと申し、グハ…！」

プレイボールぶりを發揮して、テファアに色目を使って声をかけたギーシュは、次の瞬間田ざとくそれを見つけたモンモランシーのチヨップを喰らっていた。

「こりゃギーシュ…！…また他の娘に色目使って……ちょっとは学習しながら…！」

「「！」、「めん。」

ギーシュが殴られた後頭部を抑えながら、謝る。才人はその光景に呆れながらも、2人に一応注意をしておく。

「あのさ2人とも。俺は驚かないからいいけど、時と場所を考えろよ。テファなんかおびえているじゃんか。」

実際、テファはいきなりモンモランシーがギーシュに殴り掛かつ光景にビックリし、豊に寄つて、ブルブルと震えていた。

2人はハッとして顔を真つ赤にした。そしてそのまま式場の隅へと下がってしまった。

それと入れ替わる形で、今度はキュルケが声を掛けってきた。

「はあい、才人。結婚おめでとう。ルイズの相手は大変だらうけど、がんばってね。」

「ハハハ・・・、わかつたよ。ありがとうキュルケ。」

続いて、コルベールとオスマン校長がやつてきた。

「おめでとう才人君。これでようやく、彼女と結婚出来るね。」

「夫として彼女をしつかり支えてやるんじやよ。」

2人からしてみれば、ルイズと才人は教え子であり、その成長の一端を見てきた人物である。2人にとっても、今回の結婚は大いに喜ばしい出来事であった。

「ありがとうございます、コルベール先生。オスマン校長。」

それから才人は、地球から駆けつけてきた姉の智恵や両親、曾祖

父のオ吉や義勇軍から招待した菅野中佐やシエスタ、部下であるルロー等兵などと軽く言葉を交わした。また、娘や妻が花嫁と一緒にいるために、1人待ちぼうけしているヴァリエール公爵とも挨拶する。

「おはようございます。ヴァリエール公爵。」

「おお、才人君。ついにこの日が来たね。公に発表できなのが歯がゆいが、とにかく喜ばしいことだ。・・・娘のこと、よろしく頼むぞ。」

ルイズは3女であるが、結果的に最初に親の元から離れたこととなつた。見掛けによらず、親バカの公爵からしてみたら、色々と想う物もあるだろ？

「はい。ルイズ、いいえ娘さんのことはしっかり守ります。・・・そう言えば、今日はカトレアさんも来ているようでしたけど、大丈夫なんですか？」

才人がカトレアと会つたのは一回だけだが、彼女が病弱で屋敷の外へ出たことがないことを知つてゐる。だから、それが気になつた。

「ああ、君の世界から持つてきた薬のおかげで最近は大分調子が良いよ。ただ、さすがに完治するまでには至らないがね。」

公爵は、そう言つと溜息をついた。

(本当に娘のことを想つてゐるんだな・・・)の人の娘を嫁にするんだ。しつかりしなきやな。)

娘を想う父親の姿を見て、決意を新たにする才人だつた。

ちょうどその時、1人の女性が礼拝堂に入つてきた。ルイズの所にいたはずのアンリエッタだ。

「皆さん、花嫁の着替えが終わりました。間もなく参りますので。ヴァリエール公爵、娘さんの所へ行つてあげて下さい。」

一国の王妃がこんなことするなど前代未聞だが、秘密の結婚式と彼女がルイズの親友ということだが、この特異な現実を生み出していた。

「わかりました。それじゃあ、才人君。続きはまた後で。」

公爵は一端礼拝堂を出て行つた。そしてその数分後、礼拝堂の扉が大きく開かれた。

結婚 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

開かれた礼拝堂の扉から入ってきたのは、もちろん花嫁のルイズである。ちなみに、こちらの世界にはキリスト教はないから、当然結婚式の仕方も少しばかり違う。

才人は先に礼拝堂で花嫁の到着を待っていたのであるが、やつてきたルイズを見て一瞬啞然としてしまった。それほどまでに、この時のルイズは美しかった。以前着ていた魔法学院の制服姿や、日常的に着ている代王のドレス姿もそれなりに綺麗で可愛かったが、今回のおウェディングドレス姿はそのどれよりも彼女の美しさを引き立てていた。

両親と2人の姉に付き添われてやつてきた彼女は、顔を赤らめながら才人と対面した。

「ど、どうかしら才人？似合つてるかしら？」

ルイズに言われて、才人は我に帰った。

「え！？ええと・・・その・・・ごめん、気の利いたセリフが思い浮かばない。だから、单刀直入に言つ。すつごく似合つてる。それと、すごく綺麗だよ、ルイズ。」

そう言つて才人も顔を赤らめた。

「あんたらしいわね・・・けど、ありがとう。才人もその制服すつごくかっこいいわよ。」

ルイズも才人の制服姿を讃めた。もちろん、これは彼女が心の底から感じたことである。純白の制服に身を包み、勲章を胸元につけた才人の姿は彼女にそう思わせるに充分だった。

「そ、そ、うか、うか……」

「うん……」

2人は互いに顔を見合させて、そして少しばかり緊張も解けたのか、笑った。

そんな2人に、マザリー＝枢機卿が声を掛ける。

「それでは、式を始めたいと思いますが、お2人ともよろしいですか？」

「「はい！」」

2人ははつきりと答えた。その声によつてそれまで礼拝堂の中で、バラバラになつてお喋りなどをしていた参加者たちが集まる。そして、2人の結婚式が始まった。

式は滞りなく進んでいった。マザリー＝枢機卿が一人の前で祝福の言葉を読み進め、一人は黙つてそれを聞いていた。

最後の言葉を読み終えると、マザリー＝は軽く咳払いをした。

「オホン……それでは、花婿、平賀才人に問います。あなたは、花嫁、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールを永遠に愛することを誓いますか？」

もちろん、才人の答えは一つだ。

「誓います。」

「よろしい。では、花嫁、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに問います。あなたは花婿、平賀才人を永遠に愛することを誓いますか？」

彼女の答えも、才人と同じく一つだけだった。

「誓います。」

2人の強い意志を含んだ答えに対し、マザリーーは満足気な笑みを浮かべて頷く。そして式を進めた。

「それでは、指輪の交換を。」

こちらの世界でも、結婚指輪を交換するという習慣があった。ハルケギニアの結婚指輪は夫が妻になる者へ、そして妻が夫へなる者へそれぞれ準備しておいて送る形式だ。（オリジナルの設定です。）

そのため、才人とルイズはあらかじめ、それぞれ相手に渡す指輪を買ってあつた。もちろん、ルイズは王宮の中から簡単には外へと出られないから、才人と一緒に買うことは出来ず、そのため2人は別々に指輪を買い込んでいる。

才人とルイズは向かい合うと、この日のために準備しておいた指輪の入った小箱をそれぞれ取り出し、蓋を開けた。

周りの出席者は、2人が一体どんな指輪を準備していたのか興味深々といった態度で見ていたが、すぐにその中身を見てほとんどの人間が驚きの声を発した。

なんと、2人が出した指輪はどちらもシンプルな銀の指輪であつたからだ。それは平民から貴族になつたばかりの才人はともかく、現在は王位についているルイズにはあまりにも似つかわしくなかつた。

もつとも、当の本人たちは全くその視線も、そして相手がそのまま指輪を出してきたことも気にはしなかつた。

2人は互いに無言のまま、指輪を交換した。才人がルイズの左手の薬指にまず指輪をはめ込んだ。つづいて、ルイズが才人に対して同じように指輪を嵌めた。

これで指輪交換は終わりである。この瞬間、2人は正式に夫婦となつたことを、目に見える形で示した。

「それでは、最後に誓いのキスを。」

現代日本では定番となつてているこの習慣も、ハルケギニアにはちゃんとそんざいしていた。マザリー二促されて、向かい合つたままの2人は、緊張と興奮から上氣していた顔をさらに赤くしつつ、お互いに一步前に出た。

そして、才人はルイズの背中に手を回して自分の顔をルイズの顔に近づけた。ルイズもそれにあわせて目を瞑った。

2人の顔の距離が徐々に縮まり、間もなくその唇が合わせられた。

そのまま数秒間、沈黙がその場を支配した。ようやく才人の顔がルイズの顔から離れると、彼は一言じつづくよつに言った。

「ルイズ、愛してる。」

その言葉に対して、ルイズも満面の笑みを浮かべて言った。

「私も、愛してる。才人、これからも私のことしつかり守ってね。」

「ああ。」

その瞬間、周りから一斉に黄色い歓声が飛んだ。

「おめでとう！！」

「お幸せに！！」

「羨ましいぞお一人さん！！」

祝福の声を浴びながら、2人は氣恥ずかしそうにしながらも、感謝の想いを込めて参加者たちに頭を下げる。

結婚式はこうして大成功で終わり、その後ささやかな祝宴が行われた。才人とルイズの2人は式に参加した親族や友人たち1人1人に挨拶して回った。

その中で特に祝福してくれたのは、やはり2人にとっての友人たち、魔法学院のメンバーだった。

「おめでとう才人！！」

「おめでとうルイズ、末永くお幸せに。」

キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、さらには今回菅野中佐と結婚したシエスタ、才人にとってはまだ出会って1年ほどしかないとはいえ大切な友人たちだ。そしてルイズにとってはライバルでもあり、悪友でもあり、親友でもある。

このメンバーが集まると、それこそほんの数ヶ月前までの光景が再現される。

例え肩書きは大きく変わつても、その中身までは変わることはない。ルイズも魔王としてではなく、魔法学院の同級生として彼らと接する。

用意されたワインを飲み交わし、料理に舌鼓を打ちながら、お喋りにも花が咲く。

そんな中、ギーシュが才人に声を掛けた。

「そういえば才人？」

「うん？なんだ？」

「どうして君もルイズもあんなシンプルな結婚指輪にしたんだい？送るならもつと良いのを買えば良かったのに。」

すると、才人は笑つて答えた。

「あれで良いんだよ。俺もルイズも、確かに結婚は出来た。けど、まだ本当の意味で夫婦になれたわけじゃない。だから、この指輪はそれを自分たちに自覚させる意味があるんだ。これは、本当に2人一緒に暮らせるまでの間の仮約束……そういう意味を始めたんだ。」

「そりゃ……そりゃ言えば結婚では出来ても一緒に暮らせるわけじゃないんだね。」

ギーシュが同情の言葉を掛けた。

「けど、いつか一緒に暮らせるようになつて、誰にも気兼ねすることなく俺たちが結婚したことを言えるようになつたら、俺はルイズに本当の意味での結婚指輪を送るんだ！約束する。」

その言葉に、ルイズが感無量といった顔をする。

「オ人……ええ、期待してるわ。それに、その時は私もあんたにちゃんととした指輪を送るんだから。」

「ああ。さ、頃。仮初の結婚式だけど、今田は楽しんでいってくれ。」

オ人の一言で、皆の表情がさらに明るいものとなつた。そして宴はより熱く、皆の心に刻まれるものへとなつた。

ちなみに、オ人とルイズがこの約束を果たすこととなるのは、2年後のことだ。

結婚 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

東方義勇軍總解説 戰力編1

東方義勇軍部隊編成

アルビオン解放戦争時

軍總司令官・・・平賀才吉中將

陸上部隊

歩兵部隊・・・1個中隊150名。附屬補給部隊60名。（小銃、音響閃光弾、手榴弾、重機関銃（車両、バイクを装備））

部隊司令官・・・梶田幸一少佐

戦車部隊・・・3式中戦車3両、1式中戦車3両 附屬4式中戦車
1両 トランク8両

部隊司令官・・・長田道雄大尉

航空部隊

戦闘機部隊・・・零式艦上戦闘機3機 一式戦闘機「隼」9機

部隊司令官・・・平賀才助少将

攻撃機部隊・・・99式襲撃機9機 附屬フェアリー・ソード・フ

ィッシュ雷撃機1機 アヴエンジャー雷撃機3機 UH-60Jヘリ

コプター1機

部隊司令官・・・平賀少将兼務

海上部隊

水上部隊・・・航空機搭載揚陸船「にぎつ丸」

部隊指揮官・・・安田仁中佐

潜水部隊・・・潜水艦「呂501」

部隊指揮官・・・乗田貞敏少佐

この編成は『トリステイン空中義勇軍』の末期、『東方義勇軍』の初期にあたるもの。この内歩兵部隊は編成を完了していたが、練成が間に合わなかつたためにアルビオン解放戦争には参加していない。

戦車部隊は主に「にぎつ丸」搭載車両から編成され、アルビオン大陸のチエスター・フィールドに上陸後電撃戦を展開し、首都であるロンティニウムへと進撃したトリステイン軍の最先鋒を担つた。この際、トリステイン軍の歩兵部隊を跨乗歩兵として行動をともにしている。そして同部隊はトリステイン軍としては数少ない実戦を経験している。

なお、附属と書かれている車両は部品不足や乗員の確保が出来なかつたために正式な装備から外されたもの。もしくは直接戦闘には加わらない車両を指す。また正式装備車両も輸送手段などや整備状況の関係で全ての車両が出撃したわけではない。

航空部隊はタルブ戦役、アルビオン解放戦争において最大の活躍をした。ヘリコプターを除く全ての機体がなんらかの改修を受けており、特に対艦・対地兵器として威力を発揮したロケット弾発射機は全機に搭載された。

表の機体のうち1式戦闘機と99式襲撃機は「にぎつ丸」搭載機で、事前になされていた改造により着艦フックなどを備えていたので艦載機としても運用された。

附属の機体は正式な装備ではないが、作戦の都合などで戦車に比

べて柔軟な使用が行われた。特にIH60ヘリはたつた1機のヘリコプターであつたので、様々な面で重宝された。

海上部隊は「にぎつ丸」が口サイス軍港奇襲作戦に投入されて大活躍したのが有名であるが、「呂501」潜水艦もガリアやゲルマニアへの潜入任務などで多用され、地味ながら活躍した。

各部隊指揮官の多くは転移した旧軍人や、新月を利用してこちらの世界にやってきた自衛官である。義勇軍編入の際に階級は元の階級から1～2階級昇進されている。

アルビオン解放戦争半年後

軍総司令官・・・平賀才吉大将

トリステイン方面軍（トリスターニア郊外ミライ基地）

軍司令官・・・平賀才助中将

陸上部隊

歩兵部隊・・・1個中隊360名。附属補給隊80名。（小銃、音響閃光弾、手榴弾、重機関銃、迫撃砲、無反動砲、車両、バイクを装備）

部隊司令官梶田幸一中佐

砲兵部隊・・・1個小隊80名、附属補給隊20名。（ゲルマニア・ロマノフ公国製75mm野砲装備）

部隊司令官大野太一少佐

戦車部隊・・・3式中戦車3両。1式中戦車3両。43式装甲車4両。附属4式中戦車1両。M24軽戦車1両。トラック10両

部隊司令官・・・長田道雄少佐

狙撃部隊・・・1個小隊20名。

部隊司令官友澤文夫少尉

航空部隊

戦闘機部隊・・・零式艦上戦闘機3機。零式艦上戦闘機改（OS1型）4機。1式戦闘機「隼」3機。附属局地戦闘機「紫電改」1機。

4式戦闘機「疾風」1機。F4U「コルセア」戦闘機4機。

部隊司令官・・・平賀才助中将（菅野直中佐）

攻撃機部隊・・・99式襲撃機3機。SBD「ドーン・トレス」艦爆6機。附属フェアリー・ソード・ファイツシユ雷撃機1機。

部隊司令官・・・神林学少佐

練習機部隊・・・93式中間練習機4機。附属T6「テキサン」練習機1機。P02練習機1機。

部隊司令官・・・菅野直中佐兼務

アルビオン方面軍（アルビオン大陸 シティ・オブ・サウスゴータ
郊外ホープ基地）

軍司令官・・・平賀大将兼務

陸上部隊

歩兵部隊・・・1個中隊300名。附属補給隊80名。（装備はT

リストイン方面軍と共通）

部隊司令官・・・熊崎卓也少佐。

砲兵部隊・・・1個小隊60名。附属補給隊20名。（装備はトリ

ステイン方面軍と共通）

部隊司令官・・・久保田純大尉。

戦車部隊・・・43式装甲車12両 附屬トラック6両

部隊司令官・・・樋口喜一郎大尉。

航空部隊

戦闘機部隊・・・1式戦闘機「隼」6機。零式艦上戦闘機改（OS 1型）2機。附屬F4U「コルセア」戦闘機6機。PZL11型戦闘機1機。

部隊司令官・・・柿崎信仁少佐

爆撃機部隊・・・99式襲撃機6機。アヴェンジャー雷撃機3機。SBD「ダントレス」艦爆6機 附屬OH60ヘリコプター

部隊司令官・・・柿崎少佐兼務

海上（水上）部隊

部隊司令官小林武中将

第一打撃戦隊（外洋諸島ハシラ島基地所属）・・・巡洋艦「おおよど」

第一水雷戦隊（外洋諸島ハシラ島基地所属）・・・駆逐艦「ゆきかぜ」「かえで」「さかき」

第一航空戦隊（トリステイン王国ラ・ロシヨール基地所属）・・・強襲揚陸艦「にぎつ丸」

第一潜水戦隊（アントン島基地所属）・・・潜水艦「呂501」

第一輸送艦隊（トリステイン王国ラ・ロシヨール基地所属）・・・

油槽船「櫻丸」、輸送船「栄光丸」

解説

アルビオン解放戦争後、ガリアならびにゲルマニアの動きに警戒

した『東方義勇軍』は積極的な戦力拡大策を展開した。トリスティンとアルビオン両国に駐屯とともに、戦訓を積む意味から両国政府の治安維持任務の要請に積極的に応えることもした。

ただし、初期においてはハルケギニアの工業力の弱さと、地球からの輸送手段の限界から兵器の供給が間に合わない状況が続いた。

しかしながら、地球での活動規模拡大と東にあつて科学技術が比較的進んでいたロマノフ公国との交易が行うことが可能となつたことにより、3軍ともに兵器の供給能力が飛躍的に向上した。また人材面でも地球から元自衛隊員を始めとする人材を中心にスカウトしたことにより、忠実することとなつた。

こうした自主的な戦力確保に加えて、以前より行われてきたハルケギニアに飛ばされた兵器、所謂『場違いな工芸品』や人材の確保も並行して行われ、結果航空部隊と海上部隊の大幅な増強と、狙撃部隊の創設が行われた。なお狙撃部隊は当初銃火器評価班を名乗り、定数こそ20名だが実際の人数は少なかつた。

トリスティン方面軍とアルビオン方面軍の編成は基本的に均衡する物、もしくは若干トリスティン方面軍が優越するとされたが、戦車のみは数の不足からトリスティン方面軍で集中運用され、代わりにアルビオン方面軍にはロマノフ製の43式装甲車が集中投入された。

43式装甲車は一人乗り、12.7mm重機関銃、または37mm砲1基搭載車両で旧日本軍の97式軽装甲車を参考に造られた。戦車戦には向かなかつたが小型で使い勝手が良く、治安維持任務や歩兵掃討任務では大活躍をした。

また歩兵部隊には、新たに地球で購入した中古の81mm迫撃砲や106mm無反動砲が2～4門配備された。これらはその後も増強が続けられた。

新設の砲兵部隊は旧日本軍の90式野砲を参考に開発されたロマノフ製の43式75mm野砲が4～6門配備された。なお、高射砲部隊の創設も予定されている。

トリステイン方面軍のみに新設された狙撃部隊は、同軍の歩兵部隊司令官の梶田中佐の提案で作られた一種の実験部隊であるが、その後の戦いにおいての活躍は全軍に轟き、「姿なき殺戮者」としてガリア軍から恐れられた。

航空部隊においては、新たに発見された機体と、地球の桜花飛行機においてまとめた数の生産が可能となつたことから、大幅な機材の忠実を見ると共に、パイロット養成も飛躍的に効率がアップした。

なお、F4U「コルセア」戦闘機は着陸事故が頻発し、短期間に2機が全損したためこの時点では予備機扱いとなっていた。

また、VTOL機の「うみどり」は戦力化されていないために編成には載っていない。また、輸送部隊もこの時点では専ら地球～ハルケギニア間の連絡に使われたために、編成には載っていない。

加えて桜花飛行機の生産が順調になると、戦力の移動が激しくなり、この編成表どおりの状態はごく短期間のみであった。

海上部隊は転移してきた海上自衛隊艦船の編入によつて大幅な戦力アップがなされた。また、ロマノフ公国における艦船の委託生産

も始つたため、こちらも編成表どおりの期間は非常に短かった。

この部隊は外洋諸島の探索、シーレーンの保護、義勇軍用の石油の輸送など地味ながら義勇軍の規模拡大に無視できない役割を果たした。

東方義勇軍総解説 戦力編1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

義勇軍の規模が大きくなつたので、今後小説が書きやすくなることを見越して、一端整理することにしました。しばらくは、この解説編を続けるつもりです。

作品のアイデイア、キャラクター や兵器、その他設定に関する意見などもお待ちしています。

東方義勇軍総解説 階級・兵種編

『東方義勇軍』の階級

義勇軍の階級は通常地球に存在する軍隊と同じで、士官・准士官・下士官・兵から構成されている。下から三等兵・二等兵・一等兵・兵長・三等兵曹・二等兵曹・一等兵曹・兵曹長・少尉・中尉・大尉・少佐・中佐・大佐・准将・少将・中將・大將となっている。

この階級呼称は地球の旧日本海軍を参考にしたものであるが、オリジナルには無い准将が加えられている。陸海空3部隊共通で、階級上の識別（飛行兵曹等）は特にない。また三等兵は練習兵のみにあてられた。

『東方義勇軍』の前身である『トリステイン空中義勇軍』時代は規模が小さいことと、トリステイン王室軍に対し勢力を保つ意味からほぼ全ての人間が士官階級を名乗っていた。しかしながら、軍が拡張されると上下関係（特に命令の伝達や指揮権）を明確にするために、厳格に階級を規定する必要が出たため正式に上記の階級が制定された。

『東方義勇軍』の場合、軍隊としての規模は小さいので士官学校や曹候補生などの制度はない。そのため士官や下士官を確保する上で独自の制度を採っている。

義勇軍に加わる人間は大きく分けて4つある。1つ目は平賀才吉や才助のように地球からやってきた自衛隊出身者。部隊指揮官や教官役の士官の多くが彼らである。彼らの場合は元の階級が士官であった場合は1～2階級上の階級が付与される。また、元の階級が下

士官・兵だった場合は士官階級で最も下の少尉に任命される。

2つ目はハルケギニアに流れ着いた軍人たちの場合。「にぎつ丸」の乗員らがこれにあたる。彼らの場合も士官の場合は元の階級から1～2階級上乗せされた階級を付与されるが、下士官・兵を少尉に確実に昇給させることはしない。これは彼ら（下士官や兵出身者）に志願者を中心とした新兵を纏める古参兵の役割を期待したからだ。

一見すると随分不公平なようだが、下士官・兵の場合元の階級が低かつただけに、階級の引き上げと待遇の改善だけでも大きな効果があつた。現にこの件に関する抗議の声はなかつた。

また、こうした下士官・兵でも実戦経験を有している者や、才能の高い者には昇進スピードを早くするなど普通の軍隊には見られない柔軟な昇進制度を採用した。『東方義勇軍』は規模が小さいことを逆手にとつて、実力・能力主義を導入したのである。もつとも昇進が速いのは士官についても言える。

3つ目はハルケギニアの現地志願兵であるが、元傭兵など戦闘経験を有する者である。この種の人間の数は決して多いことはなかつたが、一方で少ないということもなく、自衛隊やその他の地球出身軍人と共に貴重な存在であつた。

彼らの場合、さすがに近代兵器に慣れているということはありえないが、その代わりこの世界における事情に精通しており、特にハルケギニアにおける戦争の形態や、メイジがとる戦法等を実体験で知っていることは、近代兵器使えるのと同じくらいの価値があつた。

対メイジ戦法の開発にあたっては彼らの働きが大きく、また戦場

で場数を踏んでいる分、部下の掌握能力や直感的な判断力に優れている人間が多いことも見逃せなかつた。

その中でも、特に有名なのが元トリスティン軍の中隊長付軍曹をしていた傭兵出身の一コラ少尉（任官時）で、治安維持任務やハルケギニア戦役における前線部隊指揮で類稀なる能力を發揮して短期間に内に昇進し、退役時には少将にまで出世している。

ちなみにこの種の人間の場合、傭兵時代の戦歴や戦功、入隊時の能力試験などで任官時の階級が決められ、最下級が二等兵、最上位が少尉であつた。

最後にこれが一番多いパターンであったのが、現地採用のバリバリの新兵である。彼らの多くは募集制限ギリギリの15歳から20歳にかけての貧しい農民出の平民たちであつた。

彼らにとつて衣食住が保証され、さらにハルケギニアの水準としてはかなり高い義勇軍兵士の給料は相当な魅力があつた。そのため、募集事務所にはほぼ毎日のように志願者が訪れた。

もつとも、その多くが体力や知力試験でバタバタ落されるか、それとも他職種への斡旋を受けることに成つた。体力は良くても、まともな教育を受けていない彼らの多くは文盲で、最低限の知識を有していない者が多く、兵士としての素質に欠けると判断されてしまつたからである。

ただし、文盲でも兵士としての素質が認められれば入隊することが出来た。というかそうしないと志願者全員を資質欠落者として落第しなければならないほど多かつたのが現実である。

ちなみに他職種への斡旋と言つても、その多くが義勇軍と繋がりの深いものばかりであつた。例を挙げれば当時開通したばかりの鉄道会社がある。

またこの厳しい採用基準は、その後レーダー部隊や高射砲部隊と言つた戦地へ直接赴く必要が無かつたり、体力が多少劣つていても出来る仕事が増えると緩和される事となる。

この種の兵士は、まず入隊すると便宜的に仮階級として二等兵の階級が与えられ、基礎訓練を行う。その際に行われる射撃をはじめとするテストで技能優秀と認められると任官時に兵長、もしくは一等兵になれる。

能力が普通、もしくは低いと判断されると任官時の階級は二等兵となる。ただし、先ほど書いたとおり実力主義なので、任官後に頭角を現せば短期間の内に昇進することも有り得た。特にパイロットの場合はその傾向が顕著であった。

ここまでは正規の義勇軍人について紹介したが、その他に非正規の軍人として特務兵と軍属、技術兵という分類がある。

特務兵は戦時に義勇軍人として正式に戦うが、平時は必要な演習や訓練、人員不足時以外出動しない、言わば予備役の軍人を指す。また戦闘には出られないが事務や兵器の設計開発・整備が出来る人間にもこの制度があてられた。

特務兵は正規兵と同じ制服に特務兵徽章を付けるだけで、それ以外の待遇は給料（手当）以外実質正規兵と変わらなかつた。

主に地球との連絡飛行に就いた輸送飛行隊の要員がこの特務兵であつたが、珍しい例ではミライ基地近くの飲み屋の店長であるシエスタ兵長（任官時）がいる。彼女の場合はパイロットであつたが、休日や店の開店前時間の限られた勤務時間のみの訓練にも関わらず、メキメキと腕を上げ、さらに何度も任務に従事し勲功を上げる機会に恵まれたため、ハルケギニア戦役時には一等兵曹にスピード昇進している。

続いて軍属の場合は、主に基地内で働く民間人のことを指し、基地の厨房員や軍港での労働者、さらに基地内の雑用従事者がこれに当たる。彼らの場合は義勇軍人と同じ制服が支給されたが階級はなく、また軍事教練も希望がない限り受ける必要はなかつた。

軍属の中でも特に有名なのが、アルビオン方面軍に出入りしたティファニア嬢で、公式的には戦功を上げるようなことはなかつたが隊員からの人気が高く、士気上げに大いに貢献した。

最後の技術兵の場合は、主に義勇軍と深い関係のある仕事をする民間人に付与された階級で、戦闘指揮権はないが、研究・観測任務においては兵や装備の使用权、ならびに指揮権が付与された。

有名なのが後に聖地調査にあつた物理学者の亀山教授で、彼の場合技術少将の地位が付与され、義勇軍から借りた兵や装備でハルケギニアと地球の次元についての研究を行つた。また、比較的手が空いていたのと交渉上手な性格であつたために、時には政治的な交渉でも活躍した。

また桜花飛行機から出向した技術者などにもこの技術位が付与された。

これらの階級制度は、義勇軍創設から数年間の基本的な制度であったが、『東方義勇軍』がハルケギニア王国連合創設によって、連合政府直轄軍に編入された際に大幅に改正、廃止されることとなる。

東方義勇軍総解説 階級・兵種編（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作者の作品設定整理も兼ねて、後2・3話ほど解説を続けます。
その間本編の更新も止まりますが、悪しからず。

東方義勇軍総解説 制服編

『東方義勇軍』の制服について

『東方義勇軍』の制服は、公式にはまずその前身である『トリステイン空中義勇軍』時代に、後に第1種軍装と呼ばれる服が制定されたことから始まる。ただし、実際は総司令官の平賀才吉や副指令の平賀才助がそれ以前から着用していた。

それまでの制服は、元々将兵たちが所属していた軍や組織の制服を着ていたが、それでは義勇軍内部はともかく、外部に対する識別が困難なために統一した制服が必要となり用意された。

この1種軍装は異世界地球における旧日本海軍の第2種軍装を模した物で、純白の生地に金のボタンと基本的なスタイルは同じであった。ただし帽子のエンブレムや階級章などは変更されていた。具体的には帽子のエンブレム部の錨と階級章の錨と桜の花がそれぞれ百合の花を模したマークになった。

この制服はその後小改正を行つたものの、『東方義勇軍』にそのまま引き継がれた。ただし、純白の服は見栄えこそ良かつたものの活動的とは言ひがたく、また汚れが目立ちやすいことから、歩兵など陸上部隊には不向きで実際にクレームもついた。

そこで『東方義勇軍』設立後、第1種軍装は礼服用とされ、新たに通常課業時と戦闘時の制服が制定された。通常課業時用の物が第2種軍装で、戦闘時用の物が第3種軍装であった。

2種軍装は開襟、ネクタイ着用式で色は茶色であった。モデルと

なつたのは第一次大戦時のイギリス軍の制服で、その他の候補としてドイツ軍（第三帝国軍）の制服を模した物などもあつたが、これらは色々な都合によつて採用されなかつた。

ちなみに1種、2種ともに士官・下士官・兵によるデザインの区別はなく、統一されていた。これは戦場において高級階位者が目立つことを抑止するためと、同一の制服を作ることでコストを抑えるためといふ目的からであつた。

また義勇軍の制服は当初ハルケギニアの服やなどで現地調達されたものと、地球の服飾会社に委託生産された物があつたが、兵士たちは当然質の良い地球製を好んだという。そのため服の支給時にハルケギニア製の物を手渡された者は、はずれを引いたと落胆したという。

この状況は後に技術力の進んだロマノフ公国への委託生産、さらに服飾工場 자체を地球からハルケギニアに誘致し、そのラインが稼動するまで続いた。

戦闘時用の3種軍装は迷彩服で、陸上自衛隊の迷彩服を模したものであつたためこれといつて注目するべき点はない。

なお、これら3種類全てに女性用バージョンがちゃんと存在する。義勇軍では別にジェンダー平等という観点を重視したわけでないが、能力のある人間なら積極採用の方針を貫いたため、女性にも門戸を開いており、数は少なかつたが女性兵も存在した。

女性兵用制服の場合は、サイズや形が身体の特徴に合わせられているのと、1種と2種の場合は下がズボンかキュロットスカートを選択できるようになつていたことが男性用のものと大きく違つてい

た。

義勇軍の制服は、アルビオン解放戦争終結後3ヶ月の間に、基本的にこの3種体制に統一された。なお、義勇軍から兵器や戦術の供与・指導を受けた銃士隊も色こそ違つが後に同じスタイルの制服を採用している。

制服につけられる装飾としては、階級章と徽章、略賞、勲章がありこの内常時付けることを義務付けられていたのは階級賞と徽章、略章である。

義勇軍の場合前記したとおり階級による制服の違いがないので、階級章のみで相手の階級を識別する必要があった。階級章は肩につけられる肩章と、襟につけられる襟章があつた。

階級章は兵の場合は、青い四角形の下地に白い線の本数で識別された。線無しが三等兵曹、線一本が二等兵曹、線一本が一等兵、線一本が二等兵、線三本が兵長を表す。

下士官の場合は縁地に白色の線の数で識別され、線無しが三等兵曹、線一本が二等兵曹、線一本が一等兵曹、線三本が准士官の兵曹長となつた。

士官の場合は、尉官が黒地に銀色の星の数で識別された。星一個が少尉、星二個が中尉、星三個が大尉であつた。

佐官の場合は黒地の真ん中に金の細いラインが加えられ、それと銀の星の数で識別された。星一個が少佐、星二個が中佐、星三個が大佐であつた。

将官の場合は金地に銀の星の数で識別され、星無しが准將、星一個が少將、星二個が中將、星三個が大將であった。なお後に王室軍との兼ね合いから元帥位を作るかが問題となつたが、結局元帥は名譽階級とされ、その代わりとして新たに上級大將が作られた。

これら階級章も制服と同じく陸海空全ての部隊で共通であった。そのため、どの部隊に属するかを判断する上で使われたのが徽章であつた。

徽章は義勇軍の場合胸元につけられることが義務付けられ、略章を付けている場合はその上につけることも決められていた。

徽章は所属兵科と部隊を表す物があり、そのため常時二つ以上つけることとなつた。

陸海空を識別する徽章は最初、陸がライオン、海がサメ、空が龍といずれも動物のマークが採用された。ただし龍以外はハルケギニアの人間に馴染みが薄く、さらに龍マークも王室の龍騎士隊から「紛らわしい。」とクレームがついたために、短期間で陸は大地、海は波、空は風を抽象的に表したマークへと切り替えられた。

また部隊所属を識別するための徽章は陸上部隊の歩兵が小銃、砲兵が大砲、戦車兵は戦車を模した物をつけた。航空部隊は戦闘機パイロットがゼロ戦、爆撃機パイロットは何故か義勇軍では扱っていない99式艦上爆撃機（後にSBDドーンレスに変更）、練習機パイロットは複葉の赤とんぼを模したデザインの物をつけた。海上部隊の内水上戦闘艦艇乗組員は戦艦、強襲揚陸艦乗組員は空母、輸送艦や補給艦艇乗組員は貨物船、潜水艦乗組員はそのまんまの潜水艦を模したデザインの物をつけた。

なお狙撃部隊も单一の部隊として存在していたが、こちらは人数が少ないと外部への情報秘匿の観点から徽章が独自に作られることなく、歩兵と同じ小銃マークの徽章をついた。

最後の略章は当初、タルブ戦役従軍章、アルビオン解放戦争従軍章の2つだけであった。しかしその後は任務の拡大や成績優秀者の発生から治安維持任務従軍章、列車警備任務従軍章、射撃優秀者功劳章など多数の略章が作られた。

もちろんこれらは儀礼式典時には正式の勲章をつけることとなる。勲章は実際の任務に関係するものほど装飾が煌びやかで、大きさも大きかった。

また義勇軍の外、つまりトリスティンやアルビオン政府、さらには地方の領主などからも勲章を授与されることもあったため、例えば後に有名となる平賀才人男爵大尉（任官時）は、アルビオン解放戦争半年後には実に8個もの煌びやかな勲章を持っていた。

なお常時つけるわけではなかったが、腕章も用いられた。腕章は初期軍属の識別用、その後は列車警備任務や警察任務に就く場合を表すマークとして使われた。ちなみに列車警備任務用は青の腕章、警察任務用は英語でMP、ハルケギニア語で憲兵と白地に赤字で書かれた物が使用された。

東方義勇軍総解説 制服編（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

『東方義勇軍』では、ハルケギニアに流されてきた地球製武器、その中でも高性能で近代的な武器の収集、さらには出来うるならそれらの持ち主の搜索に全力を挙げていた。これは例え万が一にもこの時代の人間に使われたり、複製されたりして自分たちの優位が揺らぐこと、さらにはガリアなどのトリステインの仮想敵国がより大きな脅威になることを防ぐためであった。

義勇軍総司令官の平賀才吉は、アルビオン解放戦争前からトリステインとアルビオンの協力を得て、独自の情報機関である『トウ機関』を作り上げていたが、こうした人脈を使ってトリステインやアルビオン以外の国からも極秘に武器の運び込みを行っていた。

こうした結果、さすがに飛行機や戦車といった大がかりな物を運び込むということは簡単には出来なかつたが、銃とか小型のミサイルなどはコンパクトであるために、結構な数が手に入つた。これらは発見されると、現在の持ち主から買い取るか、それともちよつといけない手段を使って入手し、トリステインのミライにある義勇軍基地へと運び込んだ。

具体的にどのような種類の兵器が収集されたかといふと、陸上自衛隊の64式小銃や、ソ連製のAK74型小銃、ナチス・ドイツのパンツァーファースト対戦車ロケット、フィンランド軍のスオミ短機関銃などなど、その種類は相当数に登つた。また明らかに才人たちのいた地球製の物ではない物もあつた。葵マークのついた小銃とか、東露西亞帝国とキリル文字で刻印された軽機関銃、五色の星マーク（満州帝国軍）のバズーカ砲などがそれである。

じつした武器は、例え破損していなくても弾薬がなかつたり、あつても弾倉1個分のみというようなものばかりで、とても戦闘に使えるようなものではなかつた。

そのため仕方がないので、じつした武器の多くは予備武器や参考品として、ミライ基地の専用武器保管庫に納められた。

この武器保管庫の責任者は、元「にぎつ丸」乗組員で旧日本陸軍出身の大久保久作特務大尉であつた。彼は数年前にオーク鬼との戦闘で負傷し、杖無しでは歩けない体となつてゐた。本来なら軍隊での生活は無理であったが、銃器に関して一通り精通していたので、その才能を買われて予備役である特務階級を与えられ、戦闘とは関係ないこの部署を任された。

大久保は平成日本から取り寄せてもらつた様々な資料を読み込んで日々知識を溜め込むとともに、時折運び込まれる武器の調査にあつた。しかしながら、先にも書いたとおり、持ち込まれる武器で実戦において使えるレベルの物はほとんどなく、定期的に行われる幹部会議での報告会でも発見場所と武器とともに飛ばされたと思われる人間に關する情報、そして使用不能かそうでないかを報告するだけだつた。

もつとも、全ての回収された武器が無用となつたわけではない。例えばアルビオンで治安維持任務中に回収されたM16小銃やM40狙撃銃は、その後狙撃部隊を作る切欠を作つたし、また手榴弾やロケット弾などの中にも本格的な戦闘には投入されなくとも、治安維持任務に使わることはある。

強力な吸血鬼とかオーク鬼相手の掃討任務ではこうした強力な員数外の武器は隊員たちに喜ばれた。特にアルビオン方面軍所属の葛

西豊大尉（当時）はこうした武器を有効に使いこなした。

また小銃の中には改造を施して、義勇軍制式のT1小銃用の弾薬を使えるようにする試みもなされたが、これは費用効果の面から合理的ではないとして2挺ほどになされただけで終わった。

さて、話は変わるが義勇軍内ではかなり早い時期から何度か自動小銃、もしくは短機関銃の採用が議論された。自動小銃というのは自動的に連発可能とした小銃である。短機関銃は連発できる点では同じだが、元々塹壕内での近距離戦闘を目的に開発され、弾薬に拳銃用弾を使用するのが特徴で、反動は小さいが射程や威力の点で自動小銃に大きく劣る。

しかしこの議論に關してはようやく生産ラインに乗ったばかりのT1小銃の生産を混乱させる可能性があること。また、自動小銃はコスト高であること、短機関銃は射程が短く威力に乏しいことを理由に反対意見が出された。

実際、自動小銃のコスト高という問題はかつて多くの国で出た問題で、かの陸軍大国ドイツでも予算不足から自動小銃の開発が遅れ、仕方がなくソ連から捕獲した銃を配備したという過去がある。そして短機関銃の威力不足も拳銃弾を使用する点で仕方がない問題であった。

結局この問題は最終的に幹部たちの意見統一が出来ず、やむなくT1小銃の充足を待つて検討するということになってしまった。

これは当時自動火器導入推進派だった大久保にとっては不愉快極まりない結果だった。

「相手はメイジだけじゃない、森の中を敏捷に動き回る吸血鬼とか
オーク鬼だつてそうなんだぞ！！そんな連中相手に、兵隊たちに一
々再装填が必要なボトル・アクション銃で戦えつていうのか？」

彼はこう公言して憚らなかつた。実は彼が負傷した原因こそ、複数のオーク鬼に襲われて、銃弾の再装填が間に合わなかつたために起きていた。そのため連発可能で携帯も出来る強力な武器を少数でも良いから配備するよう平賀司令官に直に進言することさえした。

彼の意見を受けて、才吉はイギリスのステン短機関銃の複製を考えた。この銃は第二次大戦時の銃だが、非常に簡素な造りをしていて、プレス機さえあればおもちゃ工場でも量産できると言われたほどのものだつた。

もつとも、その生産自体は先ほども書いたとおりT-1小銃が充足してからとした。やはり生産設備の限界はどうしようもない問題だつたのだ。

結局大久保に出来ることは、手に入れた自動小銃や短機関銃を必要に応じて兵士たち（しかも自動火器に扱いなれている者のみ）に貸し出すだけであつた。

そんな中で大きく状況を変える事態が起きた。

外洋諸島の調査中に、義勇軍所属の「にぎつ丸」が座礁していた太平洋戦争中のアメリカの輸送船を発見したのである。同船には海兵隊向けの航空機24機が搭載されていたが、実際に載っていた物資はそれだけではなかつた。

その輸送船、リバティー船という種類の船は航空機搭載専門船型

なら100機あまりの航空機が輸送可能で、また通常の貨物船型でも1万tの物資を輸送することが出来た。

そのため、24機の航空機以外にもそれらの予備部品、そして大量の米海兵隊用の武器が搭載されていた。その中には、100挺近い数のM1ガーランド小銃もあった。さらにほぼ同数のトンプソンM1短機関銃や、弾薬が共通のコルト拳銃も数十挺あった。

この報告は義勇軍幹部陣を驚かすと共に、義勇軍は生産の労を要らずして大量の自動火器を手に入れることとなつた。

これらの銃についての使用方法が直ちに検討されることとなり、その結果ガーランド小銃はM1充足後、一部の部隊で試験運用がなされることが決まり、他の2種類については治安維持任務充当用兵器として活用されることとなつた。

もつとも、その程度で満足しない人間もいた。

自動小火器物語 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なお今回の作品では、ジョン・ドーさんからの意見を参考にしています。どうもありがとうございます。

次話では大久保特務大尉や葛西大尉に活躍してもらおうかと考えています。

棚から牡丹餅的に手に入った自動火器の数々。それらは試験的に『東方義勇軍』内で運用されることとなつた。しかしながら、それで満足しない人間たちもいた。自動火器導入推進派であつた大久保特務大尉もその1人だつた。

「平賀司令！－あのよろな試験運用だけでは手ぬるいです！－この機会を捉えて自動携帯火器の本格的な生産に入るべきです！－」

彼は定例会議の席で、何度もその意見を唱えた。しかしながら、才助は中々首を縦に振らなかつた。出来ない事情がそれなりにあつたわけである。

「大久保大尉。君の言いたいことは良くわかるが、ようやくT1小銃の生産が軌道に乗つた所なんだ。ただでさえ弾薬の系統が違う狙撃部隊用の銃弾生産を開始すると言う時に、より大量の弾薬を消費をする自動火器の量産は現状では難しいよ。」

だが大久保は諦めなかつた。

「では、短機関銃の弾薬だけでもお願ひします！－今回手に入ったM1短機関銃は密林戦やゲリラ戦、市街戦では現用のT1小銃よりも遙かに実用的です。それに銃弾を拳銃と共通できるメリットもあります。この際、^{フル}拳銃と統一してしまいましょう。」

大久保は自動小銃は無理でも、短機関銃の生産だけは認めさせようとした。

才助も短機関銃の必要性はこの時点において戦訓からよくわかつていた。アルビオンでは葛西豊大尉が、「にぎつ丸」に搭載された100式短機関銃や、予備武器として回収されたドイツ製のMP18短機関銃を治安維持任務で使用して効果を挙げていた。特に接近戦では、大きな威力を發揮していた。

一方で、生産設備の限界は事実であった。この時点において稼動しているトリステイン、アルビオン、ゲルマニアの各工場では、地球から導入した工作機械を使い、一部では後の大量生産方式に近い方式を取り入れるなどして生産力を向上させていた。しかし、それでも小銃以外に航空機搭載用ロケット弾、重機関銃弾、手榴弾などを生産している関係で生産ラインはもう一杯一杯であった。

ここへ数挺レベルではあるが、狙撃部隊用の弾薬の生産ラインを入れたが、それも当初は口径の近いなどから様々な調整を要した。

またこれ以上に生産力を上げようにも、地球からさらなる人間のスカウトや機械の投入をしたくても、運べる量に限界があるのでどこまで生産力を底上げできるか疑問であった。

そのため才助、さらには連絡を受けたアルビオンにいる総司令官の才吉としても生産にGOサインを出すことを躊躇わざるをえなかつた。

そんな状況を一気に転換させたのが科学力を持つているロマノフ公国との交易開始と、新型輸送機投入による地球からの輸送量の飛躍的アップであった。

トリステインと短期間に内に友好条約を結び、交易を開始した東の大國ロマノフ公国の科学力は、地球で言えば日露戦争から第一次

大戦の間程度であった。そのため、T1小銃や手榴弾の生産は十分可能であった。さらに技術供与を行えば、より近代的な兵器も生産可能であった。しかもハルケギニアとは違い、既に近代的な大量生産方式を持っていたため、数も今までの数倍レベルで生産できた。

さらに、地球では北海道の桜花飛行機製造会社における航空機の生産交渉がまとまり、これによつてレシプロとはいえ、これまでよりも搭載量の大きい航空機の使用が可能となり、地球から運び込まれる人や荷物の量が飛躍的にアップした。

じつした生産環境の大幅な変更が出来たことで、ようやく才助は短機関銃の生産と、それと弾薬を共通にする拳銃の生産を許可した。ちなみに、それと同時に大幅な戦力強化計画も提議されたが、今回それについては割愛する。

早速、トリステインやアルビオンの工場ではそれまでのT1小銃の生産を停止して、短機関銃と新型拳銃の生産に着手した。モデルとなつたのはリバティー船から回収されたトンプソンM1A1短機関銃であった。

『東方義勇軍』で使つている武器は軒並み地球上に存在した兵器の無断コピーである。もっとも異世界に著作権が通用するかどうかはわからないからこの言葉が適當かはわからないが、とにかくそういうわけで新規設計する必要がないから開発期間は非常に短い。この時期には工場で働く労働者の質が向上したこともあり、なんとか3週間で実戦配備している。

もつとも、実際の所は大久保の強い懇願を考慮して、早い時期から才助が一部のラインでの試験生産を考慮していたからこんなことが出来たのである。

完成した銃はメイジに『固定化』の魔法を掛けてもうひとつ、そのまま部隊に配備される。もつとも、先にも述べたように自動携帯火器の扱いに慣れていない兵も多いので、必然的にモーター役に指名されるのは扱いなれた人物となる。

そういうわけで、大久保の強い願いの元で完成した短機関銃が配備されたのは、アルビオン方面軍の葛西豊大尉率いる分隊であった。

「こいつが新型の短機関銃ですか？ まんまM1ですね。」

それが新型の短機関銃、T3型短機関銃を受け取った時の豊の意見であった。実際コピー製品であるから外見はそのままである。それどころかスペックだってほぼそのままである。

「それについては否定しないよ。M1をそのままコピーしたんだからね。」

銃を手渡した本人、出来上がった銃を渡すためにアルビオンへ出張してきた才助もそう言って笑った。

「けどそれだつたら、オリジナルの方が欲しかつたですね。」

「そう言つて彼は笑つた。

彼の言つオリジナルのM1銃は全てミライ基地にて保管されたため、彼がこれまで使つてきた自動小銃は全て、運用評価名目で借りたその他の銃ばかりであった。そして今度は実用数未知数（コピー

とはいへ実際には田に見えないよつた問題がある可能性もある（の）の銃である。

おやぢへいれほじ多種多様な銃器を扱つてゐるのは彼と、マリヤ
基地の武器保管庫係の兵士だけだわ。

「すまないね。けじ贅沢は言わないでくれ。我々は今ある物、そし
て今自分たちで作れるものしか使えないんだ。その短機関銃を実戦
に使えるか使えないかで、今後の作戦に与える影響も大きくなる。
だからよろしく頼むよ。」

「わかつています。お任せください。平賀中将。」

彼はそう言つてウインクした。

「期待しているよ。・・・それにしても、武器を使わないでよけれ
ばそれに越したことはないんだが、武器を使うことを期待しなくち
やいけないとは、なんとも皮肉だな。」

才助がしみじみと言つた。

「仕方ありませんよ。この世界じゃ戦争は決して珍しいことでは
ないんですし。それで人同士の戦い以外でも、武器を使わなければ
いけませんし。現実は厳しいですよ。」

「だな。理想論だけじゃ生きてはいけん。まあ、とにかくお願ひす
るよ。や、ひょうび正午を回つたことだし、飯にでもするか。」

「やうですね。」

豊は銃を肩にかけると、才助と一緒に歩き始めた。

「やつ言えば、ティファニアさんはどうしてる？」

「今日は子供たちに文字を教えているはずです。最近は近所の他の子供も来るようになつて、色々と忙しいようです。」

「そりがそりが。彼女もがんばってるんだな。それで、実際のところ彼女とはどうなんだ？」

才助は意地悪な顔をして言つた。

「えー？ 彼女とは別に何にも。」

「本當かい？ 才人が言つには中々良い雰囲気だといつじゃないか。」

「なーーあんの野郎ーー！」

豊は拳を強く握り、トリステインにいるであろう才人の顔を頭に浮かべた。その姿を見て、才助は笑つた。

「ハハハハハ・・・・・

平和な光景である。しかし、理想と現実が中々一致しないのが人生というものだ。使わないに越したことはないと才助は言つたが、この銃に出番が回つてくるのは、この数日後のことであった。

自動小火器物語 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。義勇軍の装備や、軍歌などなんでも受け付けています。

出力命令（複数形）

今回せは巡回から続をです。

出動命令

T3型短機関銃の完成品第1ロット15挺は、『東方義勇軍』アルビオン方面軍の葛西豊たちの分隊に配備された。

最初にこの分隊へ短機関銃が配備された理由は、小隊長兼第一分隊分隊長である豊が率先してこれまで自動火器を分隊内で使用していたために、隊員がその扱いに慣れていたため。また彼の分隊は、治安維持任務での出動実績が断トツでトップであつたためだ。

彼は元々才人たちとは別次元の日本で、反政府のレジスタン組織の一員として戦っていた。そのため、少人数によるゲリラ戦や市街戦、後方攬乱等の戦法の方がどちらかと言うと得意だった。勢い、彼の率いる分隊もそちらの方が得意になっていた。

そんな彼らに出動命令が出たのは短機関銃が配備された僅か5日後のことだった。

「俺に呼び出しつことは、またレコン・キスタの残党狩りですか？これで何回目ですか？」

総司令官である才吉の元に呼び出された豊は、うんざりする様に言った。彼の分隊は既にこの任務に数回出動している。そして出動するたびに死者を出すこともなく任務を達成している。そのおかげで、豊は少尉からあつという間に大尉に昇進したし、また彼の分隊の兵士たちも同様に昇進が早く、最下級の兵士でも兵長である。

しかしながら、豊としては自分たちの分隊ばかりが動員されると、いつのは不公平極まりないようと思えた。

「すまないな、人使いが荒くて。君ほどの人間を遊ばせて置けるほど、こちらも人が足りているわけじゃないんだ。それから言つておくが、今回の任務は王室からの要請には違ひなが、レコン・キスター狩りじゃない。」

才吉はいつになく真剣な表情で言った。

「え！？違うんですか？いつもどおりてっきりそうじやないかと思つたんですが・・・それじゃあ、もしかして吸血鬼か何かですか？それも嫌だな・・・」

豊はさらに嫌そうな顔をした。なぜなら、もし相手が吸血鬼なら、かなり性質の悪い相手であるからだ。なにせ吸血鬼は外見が人間と同じであるからそつ簡単に発見することが出来ない。それでもつて強力な先住魔法を操り、さらには血を吸つた人間を屍人鬼ゲールとして操ると来ている。

1回だけ豊もその掃討任務に出動したことがある。その時は先住魔法を駆使して森の中を逃げる相手に散々手を焼かされ、最終的に航空機まで動員する騒ぎとなつた。不幸中の幸いだったのは、発見が早かつたためにこちらに被害が出なかつたことだった。

ちなみに、義勇軍が開発した吸血鬼発見法は至つてシンプルである。

吸血鬼の外見はほとんど人間と同じであるが、内部構造に若干の

違がある。特に血液や細胞の性質や形が決定的に人間と違つてゐる。（ただし人間と交配は出来る。）だから採血するか、もしくは髪の毛一本を採つて電子顕微鏡で細胞を覗けば直ぐに判明する。

ちなみに、中世レベルのハルケギニアには当然採血の概念はまだないため、血を抜き取ると言つと人々は強い拒絶反応を示す。なので、多用される方法は電子顕微鏡による組織の確認である。

前回もこれを行つて一発で吸血鬼を見つけることが出来た。だがその後の展開は上記にあるように、散々てこずられた。さすがの豊も、吸血鬼と戦つたのはそれが最初であったから苦労することとなつた。

豊はその時のことと思い出して、嫌な顔をしたのだ。しかしながら、才吉が今回持つてきた任務はより性質の悪いものだつた。

「吸血鬼か・・・実はな葛西大尉、はつきり言つと今回の敵は正体がわからないんだ。」

「はあ！？それは一体どういふことですか！？」

これまでの任務では、そのようなことは一度もなかつた。だから豊は素つ頓狂な声を上げてしまつた。一方才吉はそんなこと気にせず、説明を始めた。

「実はな・・・」

才吉の話によると、こうである。今回王室から義勇軍に派遣要請が出された村は、すぐそばに翼人の集落があるという。

翼人というのはハルケギニアに住む先住民族の一つで、背中に白い羽があつて飛ぶことが出来るし、さらには先住魔法を操れる。ただし、吸血鬼のように入襲い掛かるような習性はなく、基本的にこちらから手を出さない限り襲ってくるようなことはしない。

今回出動要請が来た村も、翼人たちとは友好関係を築いているとは言わないまでも、特にその関係に問題はなかつた。

ところが、最近になつてその村近辺で謎の襲撃事件が続発した。襲撃されたのは家族連れの村人で、さらには翼人にも何人か被害者が出てたらしい。幸いケガをした人間はいたが、死者は出ていなかつた。だが、相手が何者かは全くわからず、それが村人と翼人の恐怖と不安を助長させる要因となつた。

この事件によつて、人間と翼人たちの間に亀裂が発生し、一触即発のところまで来ているという。お互いが相手を襲つたのではないからと疑心暗鬼になつてゐるらしい。

その土地は現在王室の直轄領となつていて、村人の嘆願を受けて王室はこれまでに数回兵隊を送つた。しかしながら、成果はほとんど挙げられず、それどころかその間にも被害者が出てしまつた。唯一の成果は、相手が魔法を操ることが確認されただけであつた。

王軍でもダメとなると、もはや頼れるのはより強力な武器を備えた『東方義勇軍』だけであつた。ちょうどこの頃、義勇軍が吸血鬼を簡単に発見し掃討したという情報もそれに拍車を掛けた。

といつわけで、今回の出動要請と相成ったわけだ。

「・・・また、難しい任務ですね。しかも責任重大だ。任務が失敗すれば、翼人と村人との関係は決定的な破局を迎えるでしょうから。」

「その通りだ。付け加えるなら、早急な解決が望まれることだ。最低限相手の正体を掴む必要がある。」

「しかし、正体が全く分からぬなんて。こないだ慰労会で見たプレターミみたいですね。」

「確かに。まあ今回の相手はまだ誰も殺してはおらんがな。とにかくそういうわけだ。引き受けでもらえるな。」

「命令なら仕方があります。葛西豊大尉、アルビオン王室からの治安維持任務要請による出動命令を謹んでお受けいたします。」

豊が敬礼をする。それに対しても答礼する。

「よろしく頼むぞ。なお、派遣する部隊の編成と装備については例によつて君に一任する。ちなみに、その村の位置だがここから東へ80kmだ。必要ならヘリを使っても良いぞ。それからこれが、王室が送つてきた現地に関する資料だ。」

才吉は彼に一通の封筒を渡した。ちなみに、豊はティファニアやマチルダのおかげで、既にこぢらの文字を読めるので原版が渡された。

「それを読み込んで今日中にプランを立てろ。出撃予定は明日早朝

とする。すまないがそれ以上は延ばせられないんでな。」

「了解しました。それでは、失礼します。」

豊は再び敬礼をすると、司令官室を出て、早速プランを練るために自室へと向かつた。彼は資料を見て村の簡単な地形や現地の状況を考慮して、直ぐに今回連れて行くメンバーと装備を決めた。

今回連れて行くメンバーは10人。メイジ・平民間わずこれまで優秀な成績を収めた人間ばかりだ。そしてその装備は森林での戦闘が考慮され、通常の小銃に加えて、配備されたばかりの短機関銃も持つていいくこととなつた。

出動命令（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、明日は12月8日。太平洋戦争が始まった日です。自分はこの時期になると、映画の「トラ・トラ・トラ」を見るのを恒例行事としています。この映画はCGではなく、実際の飛行機がバンバン飛び回り、さうに日本両サイドから描写しているので、中々面白いです。

翌日早朝、葛西豊大尉率いる臨時編成の部隊は、UH60ヘリに乗り込んで出動した。目的地は、シティ・オブ・サウスゴータから見て東へ80km行つたビギンという村だ。

UH60ヘリは輸送出来る最大定員14人であるが、今回12名の人間と必要な装備（銃とかバイク等）全てを一度に運ぶことは出来ないので、基地と村の間をピストン輸送することとなつていて。ちなみに、今回派遣される部隊の人数は豊併せて10名のはずであるが、先ほど書いたとおり、何故か今ヘリに乗つて運ばれているのは12名だ。これはどうしたことかといふと。

「なんでテファアだけでなく、マチルダさんまでついてくるかな！？」

豊が頭を抱えながら言つた。彼の隣にはなんと軍属の服を着たティファニアとマチルダが座つていた。そして周りにいる部下たちはニヤニヤとその光景を見ていた。

「あら、私がいや何か不安なのかい！？」

マチルダが不適な笑みを浮かべながら言つた。

「だつて、俺たちは遊びに行くわけじゃないんですよ……これから行く先是正体不明の襲撃犯がいつ襲つてくるか分からぬ危険な場所なんですよ！！本当ならテファアだつて置いていきたかったのに。」

その言葉に、テファアが口を開いた。

「だつて、豊つていつも1人で行つちゃうじゃない。契約をしたわけじゃないけど、あなたは私の使い魔、つまり大事な人なのよ。今回ぐらい付いて行つても良いじゃない。」

テファアがいつになく強い調子で言った。彼女にとつて豊は自身が召喚した人間であり、そして大事な友達であった。（ちなみに周りからの評価は一部を除いて友達以上、恋人未満。）

彼女の場合もルイズが才人を心配したように、豊のことを常に気にかけていた。だからなるべく彼と一緒に時間を取りうとしているのであるが、さすがに彼の任務についていくことはこれまで出来なかつた。

何度か彼女は、才吉に直訴したこともあつたが、さすがに破天荒老人の才吉と言えども、危険な戦場に攻撃魔法が使えるわけでもないテファアの同行を認めるほど甘くはなかつた。また彼女がハーフエルフといふことも強く影響していた。

義勇軍内では、彼女の出自を差別する人間はいない。いても最初の内だけで、彼女と付き合えば嫌でもその性格を理解して、差別しなくなる。しかし、外の人間は十中八九エルフを恐れている筈なので、彼女をおいそれと外に出すわけにはいかなかつた。

そう言つ訳で、これまでテファアが豊の任務についていくことは出来なかつた。しかしながら、彼女が彼を心配する気持ちは本当であつた。そこで、彼女の姉貴分とも言つべきマチルダの登場であつた。

彼女は持ち前の話力を持つて才吉を説得し、今回テファアを救護係り兼世話係りの軍属として派遣させることを認めさせたのであつた。

ただし、彼女マチルダ自身も心配であるのは確かだった。そこで市議会が休会に入つたこと也有つて、彼女もついでについてきた。

ちなみに彼女も今は義勇軍の軍属の格好をしているが、実際彼女は軍属の一員として登録されているので何ら問題はない。彼女は暇な時には元秘書という能力を活かして司令部の書類仕事を手伝つたり、また『土』系統の魔法に関する講義もしたりしていた。

しかしながら、豊に言わせれば軍属とはいえ、戦場へ2人の友人、それも女性を連れて行くことは気が進まないことであつた。

「だけどねテファ、君は魔法が使えるわけでもないから。もし襲われたらどうするのさ？それに、別に俺は差別する気はないけど、村人たちにハーフエルフってことがバレタ時のこと怖い。やっぱり君は基地へ戻るべきだ。」

豊としては心配しているからこその言つてはいるのであるが、テファとしては、やはり戻るようと言われるのはつらい言葉だ。そんな彼女に助け舟を出したのは、やはりマチルダであった。

「その点は安心しない豊。もしテファの存在に文句あるような奴がいたら、私のゴーレムで捻りつぶしてあげるから。それともグワネットに吹き飛ばしてもらうか。」

ちらつと横を見ながら、懷から杖を取り出し自信満々に言つマチルダ。

「いや、ある意味それも困るんですけど。」

『土くれのフーケ』をやめたとはいえ、マチルダの魔法の能力は

衰えていない。むしろテファが男性の多い職場で働くようになった最近はより強力になつていて。さらに、彼女にはハリモグラの使い魔もついている。

テファアが豊を召喚した時、マチルダも使い魔召喚を行い呼び出したハリモグラは現在、先ほど彼女が言つたよつに「グワネット」と名づけられ、主にテファの保護という名で、彼女に近づく男の退治に活躍している。それ以外にも、通常のモグラよりも高い機動力と攻撃能力を持つているから、色々と頼もしい使い魔である。ただし、ギーシュの使い魔である「ヴェルダンテ」とは違い、鉱石を見つけ出すような能力は持つていない。

そのグワネットは、マチルダの隣で今は丸まつて寝ていた。

「とにかく、テファアのことは私がちゃんと守るから安心しな。」

彼女はそう言い切つた。

さらに、豊の部下たちも彼女たちに同調した。

「まあ良いじゃないですか分隊長。女性が付いてくれたほうが、村人からの受けも良いでしょう。それにはティファニアさんは家事が大の得意分野で、救護の腕も家の部隊内で一・二を争うほど良いんですから。」

「そうそう。あと、マチルダさんの土魔法が強力なことは隊長もよく知っていることじやないですか。彼女が協力してくれるなら、力強い限りじやないですか。」

そんなことは言つものの、実際のところは2人の美女がついてき

てくれるのがうれしいのだな。もともと、言つてこぬことに嘘偽りはない。

結局、ここまで言われては豊としても引き下がるしかなかつた。

「わかつたよ。けど、2人とも本当に氣をつけてくださいよ。」

豊はそつそつと念を押した。

と、ちよづかの時、機長の山田明雄中佐が声を張り上げた。

「間もなく目的地です。着陸しますので注意してください……」

OH60ヘリは目的地の村上空に着いた。明雄は機体を空中で停止させ、着陸によそそつな場所を見つけると、機体を降下させた。着陸した時には銃やら火縄銃やらで武装した村人に囲まれてしまつた。

ただし、すぐに豊が義勇軍旗とアルビオン国旗を部下たちに揚げさせたので襲われるということはなかつた。それでも村人たちは警戒を解かず、近寄つて来ようともしなかつたので、仕方がなく豊の方から村人たちのほうへ歩いていき、呼びかけることとなつた。

「突然驚かしてすいません。我々は王政府から要請をうけてやつてきた『東方義勇軍』者です。」

すると、村人たちの間からざわめきが起つた。

「義勇軍！？」

「たつた3日でレロン・キスタを倒したあのーー？」

そしてその表情が明るいものになつていくのも、豊たちにはわかつた。

そんな中、村人たちの中から一人の老人が豊の前に出てきた。

「村長のライトラーです。ビギン村へようこそ。」

豊は片手を挙げて敬礼する。

「『東方義勇軍』今派遣部隊隊長の葛西豊大尉です。よろしくお願ひします。」

「いきなり先ほどのような歓迎をして申し上げない。しかし、村人たちとは姿なき魔物に怯えていますので、どうか御理解いただきたい。」

「わかつています。我々は謎の襲撃犯から皆さんを守るという命令を
れて来ました。全力をあげて、任務を遂行します。」

「よろしくお願いします。」

こうして、この村での任務はスタートした。

治安維持任務 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。
最近オリジナルキャラ色が薄いので、勢いでテファとマチルダを
出しましたが、どうでしょうかね？

村長との挨拶を終えた豊は部下たちとともに、まず指揮所の開設に入った。最初豊は持ってきたテントを張るつもりであったが、ちょうどよく村の中には空き家があったので、村長に頼んでそこを使わせてもらえたことになった。

臨時の野戦指揮所になつたその家には、早速基地や隊員との間での通信に使う無線機や電信機、それらの電力を供給するのに必要な、持ち運びが便利で騒音も少ない小型風力発電機と小型太陽光発電機が持ち込まれて設置された。

前線で使う発電機に関してはこれまで、小型の自家発電機が用いられてきたが、騒音が問題となつたために、一部で試験的に小型の風力発電機や太陽光発電機が用いられることがなつた。これらは自家発電機に比べて発電量が少ないというのがネックだった（ついでに若干高価だが、これについては目を潰れる範囲だつた。）が、数基を併用することでなんとか解消した。

また、無線や電信の電波が拾い易いように屋根の上に特設のアンテナも建てられた。

こうした隊員たちが行う作業の光景を、村人たちは当然見たことがないので、好奇の眼差しで見ていた。

さらに、山田中佐操縦のUH-60Jヘリがホープ基地と村との間にピストン輸送を行い、1回目の輸送で運びきれなかつた武器やバイクと言つた装備、さらには燃料や携帯食料などを運び込んだ。

ちなみに、テファとマチルダは豊たちがこうした作業をしている間に、昼食の準備を行っていた。最初は全ての食料を野戦食や携帯食料で済ませようと考えていた豊たち隊員にとって、暖かい手料理（しかも美女が作る）を食べられることは思いもよらないことだった。

食事は軍隊において士気を維持する上でとても大切な要素であるから、そういう意味では2人を連れてきたことが思わぬ副産物をもたらした。もつとも、美女が2人いるだけでも相当な士気高揚になつていたようではあつたが。

とにかく、2人が作った昼食のおかげで、隊員たちは午前中の作業がなかつたかのように、午後も高い士気を發揮出来た。

指揮所の設営作業は午前中で終わつたので、午後からはいよいよ本格的に動く。

昼食が終わつて少しばかりの休憩時間を取りた後、豊はテーブルの上にこの付近一帯が載つた地図を置き、その周りに隊員たちを集めてブリーフィングを始めた。

「今回の任務は、昨日話したとおり、村人と翼人を無差別に襲撃している犯人を捕獲、もしくは撃滅することだ。ただし、俺たちは未だ敵の正体が全くわからないという困難な状況にある。だから当面の目的を敵についての情報収集と捕捉、これ以上の被害者を出さないことをする。そしてこれから行動だが、まずは隊を3つにわける。一つ目の班は村人からの情報集をする。二つ目の班は翼人の集落へ行き、彼らから情報を収集してくる班。そして最後にここに残り、無線連絡と指揮所の防衛を担当する班だ。」

「班の構成についてはどうしますか？」

ファンレイン少尉が尋ねた。彼は元傭兵のメイジで、系統は『水』だ。豊よりも20歳近く年上であるにも関わらず、副隊長格として不平一つ言わず彼を支えている。そのため豊も彼の意見を非常に大事にし、そして信頼していた。メイジ特有の平民への見下しもしないため、部下からの尊敬も厚い。

彼が平民をバカにしないのは、これまでの実体験でメイジや平民で差別することは不合理であるとわかつていただからだつた。

義勇軍に入るメイジの多くは元傭兵で、そうでない者でも平民をバカにするような思考を持つものはいない。もつとも、そうでなくては平民ばかりの義勇軍に入ろうなんて考えもしないであろうが。

閑話休題。

ファンレインの質問に、豊は即座に答えた。

「村人から情報収集する班は6人、翼人の所へ行く班が2人、そして居残りが2人だ。班の呼び出し符号は便宜上、1班、2班、3班としておく。」

すると、またもやファンレインが質問をした。

「班の名前はそれで良いでしょうが、翼人に会いに行くのに2人では危険ではないですか？相手は強力な先住魔法を使えるような連中ですよ。」

彼の言葉に同調するように、何人かが頷いた。だが、豊は表情一

つ変えずに言った。

「常識的に考えればそうだが、今翼人と村人との関係は最悪だ。そんなピリピリしている時に、謎の武装集団が何人も押しかければ逆に相手の不信感や警戒感を煽るだけだ。だったらむしろ少人数のほうが良い。それにある程度のリスクを怖がっていては、いつまで経つても前には進めないぞ。」

その言葉に、隊員のまとめ役であるファンレインがまず賛成した。

「わかりました。隊長がそこまで言うなら自分は反対しません。」

「ありがとうございますファンレイン少尉。・・・他に意見はないか?」

豊が10人の顔を見たが、誰からも意見はなかつた。

「よし。それじゃあそれぞれの班のメンバーを決めておく。まずはファンレイン少尉、1班の隊長を頼む。」

「了解――」

「よし。それから残る1班のメンバーだが、ワレン兵曹長、セルジュー一等兵曹、ワトソン二等兵曹、クラーク三等兵曹、ヘイズ一等兵とする。それで良いか?」

「――――了解――」

言われた6人は敬礼をした。

現地採用兵であり、実戦を一回しか経験していないヘイズ一等兵

以外は、全員3回以上の実戦経験がある、言わば戦いに大分慣れ、勘を掴めてきた人間であった。このメンバーなら自分がいなくても大丈夫だと豊は考えていた。

「それじゃあ、次に居残りの3班だが、これはエドワルド一等兵曹とウィルソン兵長に頼む。」

「了解！！」

エドワルドはメイジではないが元傭兵で、戦歴は豊富である。またウィルソンは現地採用兵だが、成績優秀者であった。この2人なら指揮所を任せ、なおかつテファやマチルダを守ることも出来るだろうと豊は判断した。

そして残るは翼人の村へ行く班だが、これは他のメンバーが既に決まっているので、自ずとわかる。隊員たちの視線が残された1人の兵士へと行く。

「残る俺と一緒に翼人の村へ行くのは、もうわかっていると思うが、トレバー一等兵、お前だ。」

指名されたトレバーは、幼さの残るあどけない感じの兵士だった。といふかはつきり言って子供である。それもそのはず。彼の歳は15歳。すなわち志願制限ギリギリの少年兵だった。

「じ、自分がありますか！？しかし、自分にはまだ実戦経験はありません。どなたか、経験のある方をあてるべきでは？」

彼は緊張した声で、表情を驚愕のものにして言った。

「実戦経験が無いのは誰だつて最初はそうさ。大丈夫、何もドンパチしに行くわけじゃないんだ。俺の指示にしつかり従えばそれで良い。他の皆も別に良いだろ?」

豊とトレバーを除く8人は一様に頷いた。他のメンバーが賛成したとなれば、下つ端のトレバーに反論の余地などなかつた。

「そういうわけだ。それじゃあ、このメンバー構成で行く。各員装備を整えて、30分後に行動開始とする。それから、今回の敵だが、名前を付けたほうがわかりやすいので、コードネームを付けておく。見えない敵ということで、「ファンтомメナス」だ。良いな?」

「「「了解!」」」

「それでは、各員出動準備! ! !」

豊の命令を受けて、9人の兵士たちは一斉に動き始めた。

治安維持任務 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

装備を整えた豊以下の義勇軍兵士たちは、各自の仕事に取り掛かつた。村人に聞き込みをするファン・レイン少尉率いる1班は、早速村内を回つて情報収集に入る。豊とトレバーの翼人の集落へ行く2班は、ヘリによって持ち込んだサイドカーを使ってその集落へ向かう。最後の居残り組みの3班は、交代で無線の担当と指揮所の警備をする。

ちなみにテファアとマチルダはその間に夕食の準備をする、さうに付け加えると、マチルダの使い魔であるグワネットは、指揮所の外の地中に潜つて外敵の接近に備える。

村に来て1日目の行動はこうして開始された。

豊とトレバーは翼人の集落へと向かっていたが、側車に乗るトレバーの顔は緊張のせいで引きつっていた。そんな彼に、運転をしている豊はとにかく声を掛けて、緊張を和らげようとする。

「トレバー、そんな緊張するなって。翼人って言つても吸血鬼みたいに襲い掛かってくるわけじゃないんだ。あくまで話し合つだけだ。

」

「けど隊長、そうは言いますけど。翼人は先住魔法を操ると言つじやないですか。もしそれを使われたらどうするんですか？」

先住魔法は4系統の魔法より強力というのが定説だ。トレバー自

身は自分たちの武器が強力なのを知っているが、やはり戦つたことはないからそれが実際に有効かどうかに不安があるらしい。

ところが、豊の次の発言はさらに彼を不安にさせたと言つてよかつた。

「その時はその時だ。まあ教科書通りなら、音響閃光弾を投げつけて、相手の目をくらましている内に全力で逃げて、小銃か短機関銃でアウトレンジ攻撃をするしかないだろうな。だが今回の目的はさつきも話しあいだ。そんなことになつた時点で任務は失敗だし、俺たちも終わりだ。なにせ交渉の場に、やたら武器を持ち込むわけにはいかないからな。」

そう、今回はあくまで話し合いだ。そんな所に完全武装でいけるはずがない。一応今回2人は定装備であるT1小銃も、T3型短機関銃も持つて来てはある。しかし、豊はそれをサイドカーに置いていく気だった。

その言葉に、トレバーの顔が青ざめる。

「翼人に対する拳銃と閃光弾だけですか？」

その声は震えていた。

「他に、田立たずに服の中に隠せる武器なんかないだろ?とにかく、俺たちの目的は話し合いだ。それをしつかり肝に命じておけ。」

豊はトレバーの気持ちを知つてかしらすか、表情一つ変えずにそう言った。

村人から教えてもらつた翼人の集落はそこまで離れてはいなかつた。バイクでいけばせいぜい4～5分と言う所だつた。ただし、翼人の住居は彼らが空を飛べるという性質を持っているせいか、概して木の上に作る。つまり、その集落となれば沢山の木が生えている場所でなければならず、森の中でなくてはならない。

サイドカーではさすがに森の奥深くに進んでいくことは不可能なので、森の入り口で2人は一旦サイドカーを降りることとなる。

もちろん、サイドカーには念入りに擬装をしておく。小銃や短機関銃をその場に置いていくので、万が一持ち去られてもしたら一大事である。

豊はその擬装をトレバーにやらせ、自身は地球製のサーモグラフィーを使ってあたりに不審な人物、もしくは動物がないか確認しておく。

「よし、周りには特に不審な人間とかはないな・・・トレバー、擬装は終わつたか？」

「はい！完了です。」

サイドカーの上には乗せてきた擬装網が掛けられ、さらにその上に木の枝や枯葉で覆つたので、かなり上手く隠せっていた。

「よし、それじゃあ行くぞ！」

2人は徒歩での移動を開始した。もつとも、徒步になつたからと

いつて先ほども書いたとおり、そこまで遠くはない。

森の中はシーンとしており、少しばかり暗かつたが、歩くのに苦労するほどではない。5分もしない内に、2人は早速翼人の歓迎を受けた。もつとも、かなり手洗い歓迎であつたが。

ヒュンー！

突然なにかが2人の歩く前方5m程行つた所の地面に突き刺さつた。

「うわー！」

驚いて腰のホルスターから拳銃を抜き出そうとしたトレバーを、豊が慌てて止める。

「待て！！銃は抜くな！！」

そう言つて、彼は地面に突き刺さつた物体を見た。

「矢か・・・それもかなり原始的だな、これは。」

矢を見て、豊はそう偽りのない感想を口にした。確かにこちらに向けて撃ち込まれたのは矢であったが、その造りはかなり時代遅れな物だった。刃の部分こそ良く磨がれていたが、本体はほとんど加工がなされていない自然の木の枝だった。

近代兵器を使い慣れている豊としては、この時代の人間が多用する兵器自体超旧式で笑つてしまつのに、こんな物を見てしまうともはや滑稽以外の何物でもなかつた。

もっとも、今はそんなことを深く考えている時ではない。こんな武器を使ってくる種族は限られている。そして状況から見て、今彼らが会おうとしている翼人以外に考えられなかつた。

豊は大声で叫んだ。

「撃つな！！俺たちはあんたらに危害を加えるつもりはない！！話がしたいだけだ。良かつたら姿を見させてくれー！」

だが返事はない。あたりは先ほどと同じくシーンとしたままだつた。1分ほどして、豊がもう一度声を張り上げようとした時、鳥の羽のような音がしてきた。

2人が音のする方向を見ると、羽を生やした人の形をした物体が3体降りてくるのが見えた。間違いなく翼人だ。3人の内先頭を飛んできた男の翼人が豊たちの前に舞い降り、残る2人は弓を持つてその少し後ろに降りた。

「我らと話し合いをしたいといつのは本当か？」

先頭の翼人が豊に問いかけてきた。

「ああ。俺たちはあんたたちに危害を加える気は全くない。代表者と話し合いをさせて欲しいだけだ。」

翼人たちはまじまじと豊とトレバーを見た。2人は今野戦用軍服に身を包んでいる。彼らから見れば奇妙奇天烈な出で立ちであることは違いない。翼人たちは何事か小声で相談した後、豊に向けて言った。

「しばし待たれよ、カーチャ様にお伺いを立ててくる。ただし、お前たちが怪しいものではない保証はないので、この2人を監視に残す。良いな？」

「ああ。よろしく頼む。」

そしてその翼人は再び飛んでいつてしまい、その場には豊たちと、2人の弓をもつた翼人が残された。

「翼人は温和な性格じゃなかつたんですか？」

トレバーが皮肉混じりの声で言つた。

「どうやら彼らもかなりピリピリしているようだ。平賀大将の言つていた一触即発つて言葉も、どうやら間違いじゃないみたいだな。まあ、警告をしてくれただけありがたいと言えばありがたいがな。」

それから10分ほど、その場に待たされた豊たちであつたが、ようやく再び羽を羽ばたかせる音がしてきた。

「来てくれたみたいだな。」

豊が上を見ると、先ほどの翼人と、もう1人別の翼人が飛んでくるのが見えた。

そして、その2人が降り立つた瞬間、豊もトレバーも少しばかり驚いてしまった。

「女ー？」

先ほどの翼人とともに降り立つた翼人は、どうみても20代前後の若い女性だった。その姿に、豊もトレバーも面食らってしまった。

そんな2人にお構いなく、先ほどの翼人が言つた。

「聞け、我らが群をまとめておられるカーチャ様がお前たちと話をしたいそうだ。」

そして、彼の後ろに立っている若い女性の翼人は笑顔で豊の前に立つた。

「よつこそ我らが群へ。私が長のカーチャです。」

あまりにも若い、しかも女性の翼人という代表の登場に、豊は少しばかり、トレバーは大いに驚くだけだった。

治安維持任務 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

本編のはづはちょっと作者の構想が色々と錯綜しているので、しばらく外伝の更新を優先します。

「いや、驚きた。あなたののような若い女性が族長とは……ああ、失礼しました。自分は『東方義勇軍』の葛西豊大尉です。」

豊は型どおりの挨拶をすると、カーチヤに向かつて敬礼した。続いてトレバーも同じように敬礼した。

「同じく、『東方義勇軍』のトレバー一等兵です。」

2人の挨拶と、右手を上げる敬礼はカーチヤをはじめとする翼人たちには奇妙な物であるように見えた筈だが、カーチヤは笑顔を崩さず続けた。

「今回は私たちと話し合いをされに来たと伺いましたが、手荒い歓迎をしてしまったようで、申し訳ありません。」

カーチヤが頭を下げた。

「頭をお上げ下さい。あなた方の仲間が何者かによつて傷つけられ、いまだ安心できない状況にあるならば、あのような対応も止むを得ないでしょう。むしろ、族長自らここまで来ていただき、我々の方が深く感謝しなければいけません。ありがとうございます。」

豊は素直にカーチヤに感謝していた。最初弓で出迎えられた時は、交渉が上手く行かないかも知れないと覚悟したが、目の前に現れた若き女族長は、話のわかる人物のようだつた。

先ほどまでガチガチに固まっていたトレバーも、目の前に現れた

女の翼人の姿と言葉に、安堵の表情を浮かべていた。

「それでは、早速ですが、あなた方が我々を訪ねてきた用件をお話下さい。」

「はい。あなた方もご存知の筈ですが、ここ最近この近くの村で、村人に対する無差別襲撃事件が発生しています。あなた方にも被害が出ていると聞きますが、それによつてあなた方と村人との間に不穏な空気が流れているとも聞きました。このままでは双方が衝突する可能性があります。なんとしても流血の事態だけは避けたいところです。我々は今回、王政府からの要請を受けてその襲撃犯の捕獲、場合によつては撃滅のためにやつて参りました。ですが、捕まるるにしろ倒すにしろ、相手が何者であるか知る必要があります。そこで、あなた方が知つていることを、是非とも教えてもらいたいのです。」

すると、カーチャは明らかに表情を暗くした。

「そうでしたか。その件は私も非常に憂慮しているのです。既に何人もの仲間が傷ついています。私たちは本来争いを望みません。しかし、最近では我が部族内でも一部の血氣盛んな若い者が、村人に深い不信感を抱いています。今は私の力で止めていますが、もしこのまま仲間が傷つくのを黙つて見過せば・・・」

カーチャは口ごもつてしまつた。

「言わずもがなですね。ですが、あなた方はまだ手を出していいだけ冷静です。自分としても、今回の件を一刻も早く解決し、村人とあなた方が何者も恐れることなく日々を送れるようにしたいと考えています。ですから、襲撃犯について分かつていることを出来る

だけ教えて欲しいのです。我々は何よりも情報を欲しています。」

豊がそう言い終えてから、しばらくの間カーチャは彼の目をただジッと見ていた。まるで彼という人間を推し量っているかのようだつた。

豊はそんな彼女を、同じようにただ見ているだけだった。そんな沈黙の対面は、カーチャが口を開いたことで終わつた。

「わかりました、豊殿。あなた方が知りたいことについて、仲間たちに聞いてみましよう。カイネ！」

「はー。」

呼ばれて、取り巻きの中で一番年長の翼人が彼女の前に出た。

「今から仲間たちを回つて、彼らが求めていることについて聞いてきなさい。」

「わかりました。ですが、全ての我々を回るとなると、しばし時間が必要となります。」

それに対する答えは豊が言った。

「構いません。むしろ急いで重要な情報が聞き逃される方が恐ろしい。あなた方のペースでやつて下さい。我々はその間待ちますので。」

「わかりました。それでは早速。」

そう言つと、カイネと呼ばれたその翼人は集落の方へと飛んでいった。

「カーチャ族長、御決断ありがとうございます。」

「いいえ、私たちとしても今回のことが早く解決して欲しいと願っていますので。それに、あなたが信頼できる人間であることは、目を見てわかりました。ですから私はあなた方に協力すると決めました。我々と会う人間の多くは、我々を恐れ、忌み嫌います。ですが、あなたは我々を見ても、少しも恐れない。そして同じように接してくれています。あなたのsuchな人間に出会えて、私は喜ばしく思います。」

豊は異世界人があるので、この世界の人間が抱くような先入観はない。彼にとっての人の判断基準は、会つて喋つてみてから決まるのだ。そして豊にとって、目の前の翼人は評価するに値する人物だつた。

「自分は別に、会う人全てを平等に評価しているだけです。だから、そのような過分なお褒めの言葉を戴けるとは、光榮です。おい、トレバー……つて何見とれているんだ！？」

彼の隣に立つて居るトレバーは、若く美しい翼人に見とれていた。そして豊に注意されてようやく我に帰つた。

「えー？あ、はい？」

「全く……すまないがお前の分の背嚢に入っている携帯食料のキットを出してくれ。」

「えー？ 携帯食料のキットをですか？」

「そうだ。」

そう言つと、彼自身も背中に抱いでいた背嚢から自分の分の携帯食料のキットを出した。義勇軍の携帯食料の多くは、現代地球の技術で造つた物だ。缶詰にクラッカーなどの賞味期限が長い物が主だが、水分補給用の物も含まれている。キャンディーがそうだ。

豊はキットの中からキャンディーを取り出し、それをカーチヤに渡した。

「ただ待つておるだけというのもなんですし、ビュゼ。トレバー、お前はそっちにいる人たちに分けてやれ！」

「これは？」

キャンディーを受け取つたカーチヤは、それが何であるかわからず口を傾げた。

「これはキャンディーという、溶かした砂糖を練つて固めたお菓子です。甘くておいしいですよ。」

そう言つと、彼は自分の口に含んで実演して見せた。それを見て、カーチヤたち翼人たちも口に含んだ。

「あ、本当だ！ 甘い！ とても美味しいです。」

カーチヤが表情を綻ばせる。

「喜んでいただけ嬉しいです。良かつたら、残りも差し上げます。集落の皆さんでお分け下さい。情報提供のせめてものお礼です。」

「ありがとうございます。きっと皆喜びます。」

それからしばしの間、豊たちはさらにキットの中に入っていた水で戻せる紅茶などを飲みながら、カーチャラ翼人たちと意見の交換を行つた。こうした草の根での友好関係構築も、義勇軍にとつては大事なことである。

そして1時間ほど経つて、カイネが数人の翼人を伴つて飛んできた。

「この者たちは、襲撃を受けた者や、家族が襲撃を受けている者たちです。あなた方が知りたいことを、知つているかぎりではあるが、教えてもいいことがあります。」

「ありがとうございます。」

それからさらに1時間ほど掛けて、豊とトレバーは彼らから襲撃者、「ファンтомメナス」に関する情報を聞き、それをメモした。

それが終わる頃には、口が大分傾いていた。カーチャラは、村へ帰る豊たちをわざわざ見送りに来てくれた。

「カーチャ族長。今日は本当にありがとうございました。感謝しています。」

「こちらこそ。あなたのような方と会えて本当に良かったです。またお会いできる日を楽しみにしています。」

「ええ。 それでは。」

豊はバイクを出した。

バックミラーに映る翼人たちの姿が徐々に小さくなり、最終的に見えなくなつた。だがその瞬間まで、彼らが豊たちを見送つていたのが見えた。

「良い人たちでしたね。 最初は翼人と会うなんて、本当にどうなるかと思いましたけど。」

トレバーが行く時はつづて変わって笑顔を浮かべながら言つ。

「だから言つたる、大丈夫だつて。」

「ええ。 また会えると良いですね。」

「ああ、 そう」「・・・」ちらり3班エドワルドです。2班、葛西隊長応答願います!—!

豊が言い終える前に、村に居残つているエドワルド兵曹から無線が入つてきた。豊は片手でハンドルを握りながら、もう片方の手で無線に出た。

「こちら2班、葛西だ。どうした?」

「ああ、葛西隊長! 村でちょっと厄介ごとが発生しました。今どうですか?」

「今ちゅうじで村へ戻る所だ。直ぐに着く。だから待っている、オーバー。」

運転中といつこともあり、豊は一端無線を切った。

「どうしたんでしょうか?」

「わからん。とにかく村へ急ぐぞ。」

豊はサイドカーのスピードを上げた。

治安維持任務 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

1日目の夜、翼人からの情報収集成功という明るい材料があつたにも関わらず、葛西豊大尉以下、義勇軍隊員達のいる指揮所の空気は重かつた。原因は明るい材料を吹き飛ばす、暗い材料が発生したからである。

翼人との話し合いを終え、部下からの連絡で急ぎ戻つた豊が見たのは指揮所前に集まつた村人たちと、銃こそ構えていないが必死に彼らを宥める部下たちの姿であった。

事の発端は実に単純であつた。外に出ていたテファアがうつかり被つていた帽子を風で飛ばしてしまい、耳を村人に見られてしまつたことだつた。

義勇軍がエルフを連れているという話はあつという間に村人全員に伝染し、彼らが指揮所を包囲するという事態に陥つた。シティ・オブ・サウスゴータ付近の民間人なら、彼女にそこまで危機感を抱きはしなかつただろうが、生憎とこの地の住民たちは、そうはいかなかつた。

一步間違えれば、興奮した村人と義勇軍の間で流血の惨事といふことも起こりえたが、豊も加わつて、彼女は確かにハーフエルフであるが危険は全くないことや、シティ・オブ・サウスゴータの領主（つまりは才吉）も認めている等を彼らに説明し、なんとか衝突だけは回避できた。

しかしながら、村人と義勇軍の間に致命的に成りかねない溝を生んでしまつたのは確かだつた。もつとも、だからといって義勇軍の

誰もがテファを責めるようなことはしない。また、村人を責めることも出来なかつた。全員村人たちの気持ちもちゃんと理解していたし、一方でテファが心優しい人間であることも理解していたからだ。

じつして隊員全員が、心中にもやもやした気持ちを持つてしまい、当然士気も低下した。

全員揃つてテファとマチルダが用意してくれた夕食を食べたものの、隊員たちは終始無言であつた。またテファは、自分のせいでもうなつたと強く感じていたので、ずっと俯いたままだつた。

こつした状況を、豊は非常に憂慮した。

(まずは、みんな隊員達の士氣はどん底だ。これじゃあ、「ファンタムメナス」の確保どころか、任務を続けることさえおぼつかないぞ！？)

指揮官にとつて、隊員たちの士氣を高め、維持するのも立派な努めである。士気が落ちた軍人がまともに軍務に就けないのは古今東西の共通事項だ。

豊は何としてもこの状況を切り抜け、隊員の士氣を高めなければいけなかつた。そのためにも、彼が率先して何かをする必要があつた。

夕食が終わり、本来なら無線担当の兵士や歩哨の兵士を配置に戻すのがセオリーであるが、豊は敢えてそれをせず、隊員たちが全員揃つている状態で言つた。

「皆何暗い顔しているんだ！？まだ一日目だ。」「ファンタムメナス」

のことは何もわかつていらないんだぞ。本番はここからなんだ。そんなじや、今まで経つても基地に帰れないぞ！！」

豊は自ら明るい表情をして、隊員たちを元気付ける。だが、言葉だけでは一度落ちた士気を取り戻すのは難しい。隊員たちの表情は相変わらず暗いままだ。なので、豊はさらに続けた。

「お前ら、確かにテファアが言われなき差別を受けたのは事実だし、俺だつて腹立たしい。けど、こればかりは言っちゃ悪いがしようがないことだ。600年以上の長い月日をかけて作られた人々の意識を変えるのは簡単なことじやない。お前たちの中にだつて、最初テファアを見て差別意識を持つた奴はいるだろ？」

そこで豊は隊員たちの顔を見回した。全員無言ではあつたが、事實を指摘されて苦虫を潰したような表情をしている者が何人かいた。

「だがな、一方でその意識を変えることは出来ないわけじやない。それはテファアと付き合いのあるお前たち自身良くわかつていることだろ？確かに、今回のことでの村人との関係は悪くなつたが、100%好転しないわけじやない。まだ時間はある。テファアが俺たちの素晴らしい仲間であり、優しく誰もから慕われる人間であることを、これから村人たちにしつかり証明すれば良いんだ。とにかく、悲観的になるな！－希望を持て！－」

その言葉に、一番元気付けられたのはテファアだつた。それまで俯いていた彼女は、顔を上げて、皆に向かつて言つた。

「そうです皆さん。豊の言うとおりです。私も諦めません。難しいかもしれないけど、村の人たちに私、いいえ、エルフが決して人間と相容れられない存在じやないことを理解してもらえるようがんば

ります！だから皆さんもがんばって下さい……」

テファアのその言葉もあってか、ファンレイン少尉が立ち上がって言った。

「そうですね。このまま引き下がっちゃ後味が悪い。俺たちは『えられた任務を完遂し、それと同時にティファニアさんに対する誤解も必ず解く。そうだな皆！？』

彼が他の隊員たちに問いかけると、それまでの暗い表情が嘘のように、全員明るい表情へと戻り、力強く頷き、賛成の言葉を発する。

「そうです！…少尉殿の言つとおりです！…」

「ティファニアさんは、俺たちの大変な友人です。彼女が化け物扱いされたまま帰ったら、良い恥さらしです！…」

「やりましょ！…必ず『ファンタムメナス』を捕まえ、そして村人の誤解を解きましょう！…」

元々連帯感の強い部隊である。1人が士気を取り戻せば、連鎖的に他の隊員の士気も上がる。あとは、その士気を一体化すれば良い。

「よし、じゃあ景気づけに歌でも歌うか。何か元気が出る歌でも。」

すると、テファアが答えた。

「それじゃあ、ビリー・ブなんてどうかしら？私あれ気に入っているんだ。」

ビリーブとは、日本の小学校や中学校の卒業式では定番のあの歌である。

オ吉たちは隊員の娯楽用にと、大量のCD（+プレーヤー）を地球から持ち込んでいる。その種類は多種多様で、それこそ最近のJ-POPから少し古い歌謡曲や洋楽、ジャズやクラシックなど色々である。だからテファアが上記の歌を知っているのも当然だった。特に彼女の場合は、子どもたちと一緒に歌える歌を良く聞き歌う。また童謡は覚えやすいといつ点から、比較的多くの隊員たちの間でも歌われていた。

また義勇軍基地に出入りする軍属や民間人を媒体にして、じうした地球の歌は一般市民にも広がる傾向を見せた。

ちなみに余談ではあるが、トリステインのミライ基地では地球の某非現実系高校生アニメの主題歌と踊りが隊員内、さらには街の人々の間で大流行し、それが首都のトリスターニアや魔法学院にまで伝わるという珍現象が起きた。これはこれで面白いのだが、今回は関係ないので割愛する。

とにかくそういう訳で、豊はテファアが提案した曲をその場にいる全員で歌うこととした。

「よひし、じゃあ皆で歌おう!」

「うん! 1・2・3、ハイ!」

テファアの掛け声とともに、豊たち隊員たち、さらにはマチルダも含めた合唱が始まった。

歌い終えた時には、豊たち隊員たち、そしてテファアとマチルダも笑顔を浮かべていた。

少しだして、隊の士気は完全に回復した。

「じゃあ、ちょっと遅くなつたが仕事に取り掛かる。これより今日集めた情報の検討会を行う。それから、無線担当と歩哨を交代で行う。」

「了解！」

豊の命令に従つて、隊員たちが動き出した。

豊は自分を含む兵士たちの無線と歩哨のローテーションを決め、最初の担当者を配置に就かせると、自身は残る部下を集めて、机の上に村の周辺の地図とノートを置いて、今日村人と翼人から集めてきた情報の分析に入った。

戦いの本番はこれからであつた。

治安維持任務 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

豊とその部下達は村人と翼人から集めた情報を整理し、襲撃発生地点を地図に書き込み、さらに襲撃時間や襲撃時の状況をノートに書き留めた。

その作業が終わると、手の空いている隊員、さらにテファやマチルダも交えてそれらの情報から「ファンтомメナス」の姿や目的を推測する。

「村人に対する襲撃に関して言えば、襲撃場所や襲撃時間に共通性はほとんどありませんね。強いて言うなら夜の事例がないってことでしょうか?」

ワトソン＝等兵曹が地図とメモを見比べながら言つ。

「翼人の方も同じです。」

同じくフレン兵曹長が言つた。

「うーん・・・」

豊は地図に書かれた襲撃地点を表す印を見る。村人、翼人の区別なく描かれたそれであるが、確かに集中的に同じ場所で起きているわけではなかつた。村から少し離れた街道上、森の中、畠の近く、中には大胆にも村や集落の入り口で襲われた事例もあつた。

場所や時間に特徴があれば、相手の行動パターンを読むのに有効であるのだが、今回その2つについては、夜に発生していない点を

除けば何も共通項はなかった。

「また、襲撃方法もまちまちです。弓を射られたこともあります。『風』魔法と思われる攻撃もあります。ただし、重傷者こそ出ていますが、いずれの被害者も傷が急所を外れており、大事には至っておりません。」

「魔法が使われたってのは本当かい？」

自身もメイジであるマチルダが問うた。

「ええ、何せ凶器がありませんでしたから。凶器無しで人体を傷つけるには、魔法以外ありえません。先に捜索した王軍もその点だけは断言しています。」

「じゃあ、犯人はメイジなのかい？」

「その可能性もありますが、ただ色々と不自然な点が多いんですね・・・」

ワトソンが首を傾げた。そして、豊は彼の言葉に同調した。

「確かに、襲撃した相手全員の急所が外れているなんて話が上手すぎる。これじゃあ、まるで故意に狙いを外したみたいだ。・・・もしかしたら、人を傷つけて楽しむ愉快犯かもしだれない。」

「それだったら、悲しいわね。」

テファアが表情を暗くする。しかし、ワレンがそれに対して肯定するように答えた。

「けど、その可能性は非常に高いと思います。なにせ、襲撃された全員が何も盗られていませんから。普通の野盗や盜賊が犯人ならこんなことは有り得ません。」

「確かに何も盗らないっていうのも不自然だね。」

自身も以前は窃盗犯だったマチルダが領きながら言った。

「それに他にもあります。現在まで襲撃をした相手を見た人間がないというのも妙です。」

「どうして？遠くから襲つたのなら、やられた方が探す前に逃げ出すのは簡単じゃない？」

マチルダがまたも指摘するが、それに対して報告しているワトソンは困ったような表情をした。

「いや、マチルダさん。確かに1人でいた所を襲われたのならそれで片付けられるんですが、そうじゃないんです。実は翼人たちの多くは1人でいた所を狙われたんですが、村人で襲われた人間の内、1人でいたところを襲われた者はいないんですね。」

「えー！？ そうなの？ けど、それでも気が動転していたのなら？」

「その可能性もありますが、しかし何件かでは側にいた人間がすぐに辺りを見回したと言っています。さらに、見通しの良い街道上で襲われている人もいます。それでも「ファンтомメンス」の姿を見た者はおりません。これじゃあ本当に先日慰労会で見たデータですよ。まあ、こつちは殺して皮を剥いだりはしていませんが。」

すると、明らかに何名かが嫌な表情をした。この映画は隊員たちからの受けは好評と不評で完全に真つ一いつに分かれていた。それを無視してワトソンは、報告を続けた。

「それから後、これは村人のみの共通項ですが、襲われたのはいざれも親子連れですね。しかも、子どもには目もくれず、親のみが襲われています。また一件だけですが、祖母と孫の内、祖母が襲われている例もあります。」

「単なる偶然なのか、故意なのか、どちらだろうな?」

豊が問いかけるが、答えられるものはいなかつた。

「まあ、それについて捕まえて直接聞いてみるしかないな。」

「けど、隊長。相手は一体ビビリやつて姿をかくしてくるんでしょうかね?」

ワレン兵曹長が言った。すると、豊ではなくトレバーー等兵が手を上げて、元気よく叫んだ。

「もしかして、相手は姿を見せないよう魔力を使っているのでは?」

だが、それに對してマチルダがブンブンと首を振った。

「そんな便利な魔法、四系統にはないわよ。あつたらとつぐの昔に皆使っているわ。それに先住魔法でも、そんのがあるなんて聞いたこと無いわよ。」

その言葉にトレバーは落胆したが、今度は豊が彼女に問いただした。

「それじゃあ、マジックアイテムでそういうのはありますか？」

すると、彼女は少しばかり考え込んで言った。

「確かに、『不可視のマント』っていうマジックアイテムがあるとは聞いたことがあるけど、そいつはある貴族の家宝だったから、可能性としては低いわね。」

「そうですか・・・まあ、どちらにしろ相手が魔法を使って、目に見えないのはどうやら確実のようですね。そうなると、人間ならメイジ、先住民なら故意に外している所、場合によつては家族連れを狙い打ちしている可能性がある所から見て、翼人か獣人と言つた比較的知能の高い種類になりますね。」

豊はそう結論付けた。

「けど、それじゃあどうやって奴を見つけるんだい？」

「さうよ、マチルダ姉さんの言う通りよ、見えないんじゃ捕まえるどころか、いつ襲われても不思議じゃないわ。」

だが、2人の心配を他所に、豊は笑顔で言った。

「大丈夫。俺たちはそんな簡単にやられるほど、やわじゃありませんよ。皆、明日は2人1組で村の周辺を搜索する。なお、装備は1人が小銃、1人は短機関銃を持て。それから重いだろうが、防刀チ

ヨツキも着るんだ。あと、これはまだ分からないが、サーモグラフィーを常時携帯しろ。田には見えなくても、赤外線じゃ見えるかもしれないからな。・・・それじゃあ、今日はもう寝て、明日に備えよう。」

この日の会議はそこで終わりとなつた。豊たちはそれぞれ装備の準備を済ませると、早朝からの出動に備えて床に入った。ただし無線と歩哨を交代するために、ずっと寝られたわけではない。

翌日、早々に朝食を摂った一行は、早速装備を整えると村の周りや街道付近での搜索に入った。たつた8人でどこまで出来るかは疑問符が付くが、とりあえず手持ちの戦力で出来る限りのことをしなければいけない。

村人の鋭い視線もなんのその、隊員たちは見えない敵の姿を追い求める。

一方テファとマチルダの2人は隊員たちが出掛けている間、昨日と同じく食事の準備をしていた。

そんな中で、2人は井戸まで水を汲みに行つた。ちょうど、そこには、一組の親子連れがいた。彼らのうち、子供のほうはテファを見ても特に驚きはせず、逆に無邪気な笑顔で挨拶してきたが、母親の方は表情を厳しくすると、子供の手を引っ張つてその場を急いで離れようとした。

当然、この行為はテファの心を傷つけるわけだが、持ち前の明るさに加えて、彼女を支えてくれる人々がいる今、そんなことで挫け

たりはしない。

テファアは離れていく子供に笑顔で小さく手を振った。事件が起きたのは正にその時であった。

テファアが何気なく少し離れた木の上を見たとき、何かが太陽に反射して光るのが見えた。自然の物ではない、まるで何か金属に反射したような光だった。

反射的に彼女はその木と親子の間に走った。

「テファア！？」

マチルダが、テファアの不可解な行動に疑問の声を発した時、何かが空気を割いて飛ぶ音と、そしてテファアの腕に矢が刺さった。

「テファア！――！」

マチルダの叫びが響き渡った。

治安維持任務 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「テファア……！」

マチルダが叫ぶと同時に、テファアは腕に手を当てながら地面に蹲つた。マチルダは慌てて彼女に駆け寄った。

「テファア、大丈夫！？」

「う、うん。なんとか。ちょっと痛いけど・・・」

口ではそんなこと言つているが、彼女は痛みから顔をしかめている。マチルダはそんな彼女を見て、ただ肩を支えてやることと、表情を歪めることしか出来なかつた。

マチルダにとつてテファアは大切な妹だ。これまで例え盜賊に身をやつしても、彼女のことを想い、一心に守ってきた。それなのに、目の前で彼女が傷つくさまを見ることになるなんて。彼女の悔しさと怒りは計り知れない。

すぐにマチルダは、矢が飛んできた方を見回した。だが、そこに矢を撃つたと思われる者の姿はなかつた。昨日豊たちと話していた状況そのままで。

そこへ2人の男が走ってきた。いずれも野戦服を着込んだ義勇軍兵士だつた。

「どうしました！？」

先ほどの悲鳴を聞きつけたのか、やつて来たのは近くを捜索中だったワトソン二等兵曹とウイルソン兵長だつた。2人に向かつてマチルダは叫んだ。

「ああ、急いでファンレインを呼んで……テファがやられた……！」

「「え！？」」

2人はマチルダの言葉と、彼女に肩を支えられて地面に膝をついているテファの腕に、矢が刺さつている姿を見て、何が起きたのか把握した。

「大変だ……」からワトソンです……ファンレイン少尉、応答願います……！」

急いで無線機を取り出したワトソンが、別行動中のファンレインを呼び出す。彼は『水』系統のメイジだ。

「おひ、どうした！？」

すぐに返事が返ってきた。

「いそいで村はずれの井戸に来て下さい……ティファニアさんが攻撃を受けました！矢が腕に刺さつて……」

「了解……今すぐ行く。お前たちは、応急手当をしておけ……」

「了解……オーバー……ウイルソン、救急キットで応急手当だ……」

「はい……」

ワトソンの指示を受けたウィルソンは、すぐに常時携帯の医薬品である包帯と消毒薬を腰のポーチの中から取り出して、テファの応急処置に入った。

一方、その間にワトソンの持っている無線機には新たな交信が入る。

「ハハハ葛西だ！…ビツした？現状を報せ…」

葛西の声はいつものように冷静に聞こえなくはなかつたが、ビックリ感が混じつた物であるようにワトソンは感じた。もつとも、そんなことは気にせず、聞かれたことだけを答える。

「ハハハワトソン、現在位置は村の西にある井戸の側です。つい先ほどティファニアさんが矢で襲撃を受けました。矢は腕に刺さりましたが、見る限りでは、なんとか命には別状ないと思われます。」

「だが仲間がやられたことは変わりない！…犯人は確認したのか！？」

「ちよつと、お待ちを…」

その質問を聞くと、ワトソンはテファの方に顔を向けた。

「矢を撃つた人間を見ましたか？」

すると、痛みで顔をなお歪めているテファは力なく首を横に振り、また彼女の肩を支えながら、ワトソンと一緒に彼女の応急処置をしているマチルダも同じように首を横に振ると言つた。

「すぐに辺りを見回したけど、そんな奴はいなかつたわ。」

「わかりました。・・・確認しておりますんー。」

「わかつた。俺も今からそこへ行く。お前は再襲撃に備えて警戒を続ける！！オーバー！！」

「了解ですー！」

交信を終えたワトソンは、肩に担いでいたT-1小銃を発射できるよう手に持ち、辺りを見回す。

だが、マチルダの行つたとおり、一通り見回してもそこに襲撃者の姿はない。既に逃げてしまったのかもしれないし、あるいは昨日話していたとおり、姿を見えなくしているかもしれない。

そこで、彼は念を入れて、今回2人に1つ支給されたサーモグラフィーを取り出した。肩で持てる小型の物で、感知距離はそこまで遠くはない。だが、矢を放つたその位置に留まっているなら、見つけられる可能性もあった。

ワトソンは電源を入れると、それを慎重にかざしてみた。そして。

「うんー？」

少し離れた森との雑木林との境界に生えている一本の木。その枝の上に、明らかに異常な、人型とも見える熱源が探知された。

彼は一端サーモグラフィーから目を放して、肉眼でもその場所を

見てみる。だがそこには何もない。

もう一度サーモグラフィーを見るが、それにはしっかりとその姿が映し出されていた。機械は朝点検をしているから、故障とは考えにくい。

「間違いない！…見つけたぞ…！」

彼は叫ぶやいなや、T1小銃のボルトを引いて初弾を装填し、その場所目掛けて発砲した。肉眼では見えないので、サーモグラフィーに映った場所からだいたいの位置を推測しての射撃だった。

パン・パン・パン…！

一回、一回手でボルトを引いて再装填する必要があるために、発射の間隔は機関銃ほど早くない。それでも、ハルケギニアで未だ主力銃の座にあるマスケット銃や火繩銃に比べれば、遙かに速射である。

ワトソンは装填してあつた7発全てを撃ちきった。

「どうだ！？」

撃ちきった所で、もう一度サーモグラフィーをかざすが、その時には既に先ほどの影は、消えていた。

「逃がしたか！？」

絶好のチャンスだったにも関わらず、「ファンтомメンス」を逃がしてしまったことにワトソンは歯噛みした。

だからといって、彼は一人で相手を追うほど無謀ではなかった。彼の任務は再襲撃に備えて今ここにいる人間を守ることであった。

とりあえず、彼は銃に弾丸のクリップを再び装填して、再度の射撃に備えつつ、サーモグラフィーで敵影を探した。しかし、その後「ファンタムメナス」が現れるることはなかった。

「まさかテファアが襲われるなんて・・・」

夜、指揮所に戻ってきた一同の前で、豊が悔しそうに言った。

あの後、豊たちも合流して、付近の捜索を行つたが、結局手がかりは何もつかめなかつた。朗報といえたのは、処置が早かつたおかげでテファアのケガが早く治りそうだということ、今回初めて敵の姿を見た者が現れたことであつた。

「隊長、落ち着いて下さい。隊長が取り乱してはいけません！――」

副隊長であるファンラインが豊の隣に立つて言った。頼もしい副隊長である彼は、指揮官の存在する上での重要性をしっかりと認識していた。

「ああ、すまない。わかってる・・・それじゃあ、状況を整理しよう。」

豊は、テファアやマチルダ、さらに現場の目撃者となつた親子、さらには敵を発見し発砲したワトソン兵曹の証言を整理し、情報を得よう。

うと試みた。もっとも、直接犯人の姿を見ていないマチルダや親子の証言は役に立つとは言えなかつた。

豊たちが注目したのは、テファの言つた矢が反射する光を見たこと、そしてワトソンの証言だつた。

矢が反射したということは、姿を隠す範囲に限界があるということを示している。また、ワトソンの証言からは、相手が肉眼では見えないが赤外線では探知可能ということが確実になつた。つまり、サーモグラフィーを使えば相手を容易に発見できる。

そこで、豊は基地にサーモグラフィーをさらに寄越すよう要請した。これを受けて、翌日早朝には飛行機で追加装備が送られてくることとなつた。

そしてもう一つ。豊たちが注目したのは、テファに刺さつた矢だつた。

治安維持任務 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

滞在3日目。早朝、前日夜に豊が要請した追加の装備がホープ基地から空輸してきた。ただし、空輸してきたのはヘリではなく、最近になつてようやくアルビオン方面軍にも配置された、地球の桜花飛行機製のOR1型43式練習機「赤とんぼ」であつた。

ちなみに43はハルケギニアで使われているプリミル暦6243年の末尾2桁の数字から採られている。愛称は地球出身のパイロットが使つていた名がそのまま定着した。

一応練習機に区分されているが、機銃は装備されているし、また簡単な改修でロケット弾発射機を取り付け可能な設計になっているため、連絡任務や今回のような輸送任務、場合によっては治安維持任務にも使用されていた。

その「赤とんぼ」2機に対して、豊は空中支援機として村に留まるよう命令した。もちろん、総司令官である才吉にはその許可を予め連絡を入れて取つておいたので、「赤とんぼ」の搭乗員たちはその命令に従つた。

そして豊は全員にサーモグラフィーを渡すと、前日と同じく2人1組で捜索活動に入った。ただし、前日探した地域より翼人の集落に近い所で行う。

これは豊が隊員たちと話し合つて決めた行動であった。「ファン・トムメナス」は不規則に村人と翼人を襲つてゐる。しかし、前日村で襲撃を行つて自分が発見され反撃されたことは、奴に大きなプレッシャーを与えたのではないかと推測された。

そうなると、今日「ファンタムメナス」が採るとする行動は、ジツと森の中で身を隠すか、もしくは翼人への襲撃であった。

他にこの付近から逃げてしまうという可能性も考えられたが、以前王軍が搜索に入った際も逃げなかつた奴が、一度発見されたぐらいで逃げるとは考えにくい。

と言う訳で、豊たちは村から見てかなり翼人たちの集落に寄つた所で敵を求める。もつとも、口で言うのは簡単だが相手は動くことが出来るし、限られた地域とはいえ鬱蒼とした森の中だ。10人（赤とんぼの乗員2名が村での任務を肩代わりしたので増えた）で探し出すには少しばかり荷が重い。

しかしながら、姿を見つけ出すことが確実になつたことと、テファの敵討ちということで隊員たちの士気は高かつた。

また今回は全員、小銃ではなく射程は短いが短時間で多数の弾をばら撒ける短機関銃を持つ。これは森の中では、50m以上の距離を取つての戦闘など起こりはしないし、例え起つても命中弾を出しうのが難しいだろうということから決められた。

さらに、相手から発見されることを防ぐために、全員念入りに擬装をしていた。顔には迷彩を施し、さらにヘルメットと帽子には葉っぱや木の枝をつけた。また当人たちも足音を極力立てないよう、慎重に動いた。

豊はこの日も一昨日、昨日と相棒を組んだ新米のトレバーと一緒に

に行動していた。

「隊長、本当にこのあたりにいるんでしょうかね？」

トレバーが小声で豊に言つた。昨日、一昨日と豊に付き従つてゐるお蔭で、彼も大分戦場の空気に慣れてきたようだ。

「そんなことは本人に聞かないとわからないよ。とにかく、今は探すだけだ。それから余計なことはあまり喋るな。相手はどこにいるかわからないんだぞ。声でこちらの位置がばれるかもしれないからな。」

そう言つと、豊はサーモグラフィーを覗して辺りをうかがつた。

トレバーも口を閉じて、同様にサーモグラフィーを覗して、近くに敵がないか確認した。そしていいのを確認すると、その場を移動する。

同様に他のグループも、森の中で地味に相手を探し続けたが、結局午前中は全員敵の姿を捕捉することは出来なかつた。

そのまま、各自森の中で携帯食の簡単な昼食を短時間で摂ると、再び捜索活動を続行した。

だがどの班も、その後2時間経つても発見することはできず、もちろん「敵発見」の報告が無線を飛ぶこともなかつた。

「後3時間で日没か。」

豊が腕時計を見て呟いた。

「今日はもう駄目なんぢやないでしょつか？」

少しばかり諦め混じりの声で、トレバーが言った。

「わからないぞ。最後まで諦めるな。俺たちはこれ以上犠牲者を増やすわけにはいかないんだ。」

「あー？ はい！」

豊の言葉によつて、トレバーのやる気が再び湧き上がる。2人は森の中で根気強く見えない敵、「ファンтомメナス」を探し続けた。

そして1時間後、ついにその努力が実る時が来た。2人が地面に腹ばいになつて敵を探していた時、トレバーのサーモグラフィーに熱源が現れた。

トレバーは急いで豊の肩を叩いた。豊は声を出さず、トレバーのほうへと顔を向けた。そして小声で彼に尋ねた。

「どうした？」

「見つけました。見て下さい。」

トレバーが手に持つサーモグラフィーの映像を豊に見せた。豊は肉眼でもその場所を見てみる。2人がいる所から距離にして大体40m位の木の上。肉眼では何もないようしか見えないが、サーモグラフィーは明らかに人と思われる熱源を感知していく。

「間違いないな。良くやつたぞ。ようじ。トレバー、やるぞ。打ち

合わせばおつだ。」

「はい。」

まず豊は無線機の非常信号発信機のボタンを押す。これで緊急事態発生といふことが、離れた場所にいる隊員たちにも分かり、直ぐに来てくれる。また待機している「赤とんぼ」も飛び立つ。そうなれば、敵の逃げ道を塞げるはずだ。

豊はT3型短機関銃の狙いをつける。サーモグラフィーと肉眼の映像を見比べながら、慎重に狙いをつける。相手は幸いにも休んでいるのか動かない。チャンスだった。

豊の横では、トレバーが彼同様銃を構えていつでも撃てるようにしていた。彼と目を一瞬合わせて2人は頷き、豊は引き金を引いた。

ダダダダダ・・・

連續した銃声が森の中に響き渡った。T3型自動小銃は分あたりの発射速度が700発。対して弾倉の弾は50発である。単純計算で5秒もしない内に撃ち切ってしまう。

だがそれで十分だつた。予め狙いをつけていたため、銃弾はちゃんと目標に命中していた。

目標に命中した銃弾は、そこで炸裂すると赤い染料を撒き散らした。実は豊、相手の確保を優先するためと、逃げられても逃がさないように演習用のペイント弾を使用していた。

だがたとえペイント弾でも当たればそれなりに痛い。だから、目

標は悲鳴を上げた。

「痛い！！」

その声は非常に高い声だつた。同時に、魔法が解けたのか「ファントムメナス」がついにその正体を表した。

2人は相手が怯んだ隙に距離を詰めた。

「大人しくしろ！…もう逃げられんぞ！…無駄な抵抗はしないで投降しろ！…」

だが「ファントムメナス」は抵抗してきた。

「枝よ、我に仇名す者の動きを封じよ！…」

すると、周りの木の枝が2人の方へと迫ってきた。先住の魔法だ。万事休すかと思えるが、歴戦の豊は一筋縄ではいかない。それがたとえ魔法使いが相手でも。

彼はちゃんと対策を打つていた。2人に木の枝が襲いかからうとした瞬間、付近一帯を凄まじい閃光と音響が包んだ。

「うわああ！…」

「ファントムメナス」が再び絶叫した。その瞬間、木の枝の動きも止まつた。一体何が起きたのかというと、実は相手が魔法を使えることを知っていた豊は、近距離に近付いた所で、トレバーとともに音響閃光弾に手を掛けていたのだ。そしてそれを投げつけたのである。もちろん、その瞬間彼らは目を閉じて耳を塞いでいる。

凄まじい閃光によつて「ファンタムメナス」の視力が奪われ、さらにはさまじい音響が耳の奥にまで届いた瞬間、バランスを崩して木の上から落下した。

ドサ！という音とともに、「ファンタムメナス」の体が地面についた。幸いそんな高くはないから、命に関わるケガはしていないはずだった。

閃光と音響が納まるごと、豊とトレバーがその場に近付いた。もちろん、銃を構えてである。だが、もはや2人が反撃されることはなかつた。

そして、2人は初めて敵の姿を間近で見た。

「やつぱり……」

「子供ですね……」

2人は呟いた。そこに倒れていたのは、どうみても15歳前後の子供だった。そしてその背中には、翼人であることを示す羽が生えていた。

治安維持任務 8（後書き）

次回で取りあえず終りの予定です。

御意見・御感想お待ちしています。

取り敢えず2人は、木から落ちたショックで気絶した「ファンタムメナス」と思われる翼人の子供に外傷がないか確認した。すると左腕に骨折と思われる腫れ、さらに数箇所に、木から落ちた時に出来たと思われる切り傷や打撲が確認された。

また、それと同時に「ファンタムメナス」の正体が14～15歳程度の少女であることもわかった。

その時になつて、ようやく豊が発した緊急信号を聞いた他の隊員たちが集まってきた。

「隊長！トレバー！大丈夫ですか！？」

先頭を切つてやつて来たファンレイン少尉が2人の無事を確認する。

「おう、ファンレイン。俺たちは無事だ。それよりもケガ人が出たから処置してやつてくれ。この子だ。」

豊に言われて、ファンレインが駆け寄つた。そして、しゃがみ込んでその少女を見た。

「こいつが「ファンタムメナス」ですか？やっぱり子供だったんですね。」

「ああ、お前の言つとおりだった。」

豊がファンレインの言葉に頷きながら言つた。

実は昨日夜の作戦会議で、ファンレインはることを指摘した。それはテファに刺さつた矢の大きさが通常の矢よりも小さいことだつた。

これまで戦場を渡り歩いてきた傭兵の彼からしてみれば、明らかに異様な物だつた。またその造りも非常に良く出来ていたが、通常使われている物に比べてどこか粗い感じが抜けていないというのも妙だつた。あたかも、人間と翼人が使つてゐる矢を折衷したような物だつた。

そこから推測できるのは、矢を射つた人間の体格が非常に小さいということと、少なくとも人間ではないということだつた。

「しかし、相手を殺さないよう矢を撃つたのも驚きですが、見たこともない魔法を使い、しかも同胞であるはずの翼人まで狙つていたのはどういふことでしょうね？」

ファンレインが首を捻る。

「それについては意識を取り戻してからゆつくりと聞こいつ。で、その娘のケガはどうだ？」

豊がファンレインの隣にしゃがみ込んで尋ねる。

「うーん・・・左腕が折れますね。それからあちこちに切り傷やかすり傷、それに打撲があります。小さい傷は魔法でどうにかなるでしょうが、骨折は俺の力だけじゃ完治は無理です。取り敢えず、治せる傷には魔法を掛けておきます。」

「よし、それじゃあそりしてくれ。骨折については応急処置だけで、後は村に戻つてからやろ?」

「わかりました。」

ファンレインは懐から杖を取り出して、少女に治癒魔法を掛け始めた。一方、豊は立ち上がってトレバー一等兵や後からやつて来た他の隊員たちにも指示を出す。

「クラーク、お前は無線で全部隊に「ファンタムメナス」を捕まえたことを報せてくれ。それからケガ人の受け入れが出来るようにしておけとも伝えてくれ。」

緊急信号は発したが、「ファンタムメナス」確保は報せていないので、ここにいない隊員達にも報せなければいけない。特に航空隊はもう出動の必要はない。

またケガ人と言つのは、もちろん骨折した少女のことだ。上記したとおり、ファンレインの力に限界はあるし、またここでは満足な治療は出来ないから、残りの治療は村へ連れて行つてからだ。場合によつてはそのまま基地まで空輸することだって出来る。

「了解です!」

命令を受けたクラーク二等兵曹が、直ちに無線機を掴んで通信を開始した。

「それからセルジェは、村へ戻つてサイドカーをここに一番近い所まで持つて來い。ワトソンも一緒に村へ戻つて、村長にこの事を報

せて來い。それからワレンはセルジンと回じようにバイクを一台持つて來い。」

「「ア解ー！」

命令を受けた3人は、すぐに村の方へと走っていった。

「隊長、自分はどうすれば良いでしょか？」

名前を呼ばれなかつたトレバーが聞いてきた。

「お前はサイドカーが着いたら、ファンレインと一緒にその娘を村まで運べ。その間に俺はワレンが持ってきたバイクで翼人の集落にこの事を伝えてくる。」

「わかりました。」

それから数分後、村へ戻つた3人のうち、ワレン兵曹長とワトン二等兵曹がそれぞれサイドカーとバイクを運んで戻ってきた。もちろん森の中に直に入るのは無理なので、入つてこられる所までだ。

豊やファンレインたちも、娘を連れてそこまで移動する。サイドカーの側車部分にファンレインによる応急処置を終えた少女が乗せられ、バイクはワレンから翼人の集落へ行く豊に手渡された。

ちなみに、起きて暴れ出すといけないということで、少女はトレバーが抱きかかる形で運ばれることになり豊以下、他の隊員たちがそれを茶化すという微笑ましい場面もあった。

とにかく、豊たちにはまだまだやることはたくさんあつた。彼ら

はそれらを一つ一つ片付けなければならなかつた。

「ファンタムメナス」が捕まるという情報は、捕まえてから1時間もしない内に村人と翼人双方に伝えられた。もちろん、その情報に彼らが歓喜したのは言うまでもない。これでもう、齎えることなく普通に生活を送れるのだから当然だつた。

もつとも、豊としてはあることを恐れていた。それは、村人や翼人が少女を私刑に処そうとしないかということだつた。

現在、アルビオンに公布されている法律は解放戦争後に制定された各領地共通の法律と、各領地内で定められた領地法（後に条例と改称）の2つである。そして人間の犯罪者に対してはメイジ、平民問わずこの2つの法律が厳格に守られることが義務付けられていた。

しかしながら、これが翼人や吸血鬼などの亞人の場合となると基本的に適用されなかつた。この時点における法律は、あくまで人間にに対するものにしか過ぎなかつたのだ。亞人に法が適用されるようになるには、今しばらく時間が必要だつた。

だから温和な翼人はともかく、村人が暴発する可能性があつた。

そしてこの豊の懸念は当たつてしまつ。翼人たちのほうは、族長のカーチャ以下冷静に話を聞き、同胞が何故こんなことをしたのか気にはしたが、身柄を引き渡せとまでは言わなかつた。

だから豊は、事情聴取後にその内容を彼らに伝えるということでお話をつけることが出来た。しかしながら、村人たちの方はそういう

かなかつた。

豊が村へ戻つてみると、案の定村人たちが先日起きたテファアの騒ぎの時と同様、指揮所を囲んで「犯人を出せ！！」、「さらし首にしろ！！」などといきまいていた。ただしその人数は前回よりも大分少なかつた。

豊は彼らを説得する為に事情を説明する羽目になつた。

「皆さんのお気持ちは良くわかりますが、まずは犯人から事情を聞く必要がありますので。処罰についてはそれからです。もちろん、何人の人間を傷つけた報いは当然受けでもらうので、どうかお引き願いたい。」

村人たちの前に出て、豊はそう言つた。

村人たちには不満氣ではあつたが、隊長である豊がそう言つたおかげで結局解散した。豊たちからして見れば、少しばかり拍子抜けの展開だつた。

これは村人からしてみれば取り敢えず「ファンタムメナス」が捕まつたことで安心したのと、また王軍でさえ梃子摺つた彼女をたつた3日で捕まえた義勇軍に恐怖していたのが原因だつた。

なんにしろ、悩みの種が消えたのは豊にとつて好都合だつた。

そして豊が戻つてから1時間後、それまで気絶していた少女がようやく目を見ました。彼女は村の指揮所へと連れ込まれると、ベッ

ドに寝かされ、持ち込まれていた医療器具や薬で治療を受けた。

彼女が目覚めた丁度その時、彼女の側にはテファアがいた。

「う、うひ？ 痛！…」

少女は目覚めるなり起き上がろうとしたが、その途端骨折した箇所の痛みが彼女の体を駆け抜けた。

「大丈夫？まだ骨折が治つてないから、気をつけて。」

「ああ・・・あたし、捕まつたの？」

少女が脅えながら言つたその質問に、テファアは頷いた。しかし、笑顔で付け加えた。

「そうよ。けど、安心して、大丈夫だから。豊たちはとても優しいわ。それよりも、体は他に大丈夫？」

「うん。」

少女は小さく頷いた。

「なら良かった。あと、お腹減つてる？ そしたら何か持つてくるけど。」

「え、ええと、お願ひします。」

敵に捕まつたにしてはあまりにも不可解な状況に、少女は少々戸惑っていた。もっとも、テファアはそんなこと気にせず、優しく彼女

と話し続ける。

「わかったわ。あ、自己紹介が遅れたわね。私はティファニア。皆はテファって呼んでいるわ。あなたは？」

「あたしは、ケイト。」

「ケイトちゃんね、よろしく。それじゃあ、今から何か持つてくるからちよっと待つてね。」

そう言つと、テファは部屋から出て行つてしまつた。ケイトは本当に自分が捕らわれの身なのかと、本気で疑つてしまつた。だから本来なら絶好の脱走の機会だつたにも関わらず、彼女はただ困惑するだけであつた。

数分後、テファが盆に乗せた皿を持ってやつて來た。

「お待たせ。さあ、どうぞ。」

「あ、ありがと。」

ケイトは戸惑いながらも、出されたシチューを残さず食べた。ちなみにその味はとても美味しかつた。また片腕が使えず不自由な彼女を、テファが助けてくれた。

そしてケイトが食事を終えた頃、部屋の扉がノックされた。

治安維持任務 9（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「どうぞ。」

テファアが答え、扉が開く。入ってきたのは豊とトレバーだった。2人とも野戦服から第2種軍装に着替えていた。もちろん、万が一に備えて拳銃は持っていた。ただしホルダーに閉まつてあるので、ケイトに必要以上に警戒感を取らせずに済んだ。

「初めまして、ケイトさんだつたね？俺は『東方義勇軍』今派遣部隊隊長の葛西豊大尉だ。こつちは、部下のトレバー一等兵だ。」

豊は笑顔で名乗った。しかしながら、ケイトの方は明らかに彼を見て警戒の色を示した。

「あんたたちが、私を捕まえたのか？」

ケイトの表情が厳しくなる。そんな彼女を見ながら、豊はベッドの側に歩み寄った。

「そうだ。けど安心すると良い。義勇軍は軍規で逮捕者や捕虜に対して残虐な行為をすることを禁じている。君の身の安全は我々が保証する。ただし、こちらの質問には答えて欲しい。まず、この付近で村人や翼人を無差別に襲撃したのは君だね？」

豊の口調は優しいものだが、話の内容は尋問へと移つた。もちろん、ケイトは簡単に答えようとはしない。

「言ひにくいのは当然だろうね。けど、こつちは君がしたという決

定的な証拠を握っている。だから否定しても無駄だよ。それに、答えないと無駄に時間を過ごすだけだ。あと逃げようとしても無駄だよ。この部屋の外には銃で武装した兵士がいるからね。君も昼間の一件で、俺たちが使う武器の威力を、身を持って確かめたはずだ。」

もう逃げ場は無いから言え。豊の言葉は暗にそう言っていた。ただし、豊としては彼女が簡単に口を割るなんて考えてはいなかつた。犯罪者がそう簡単に罪を認めるという楽観的な考えは豊にはなかつた。

もつとも、だからと言つて拷問をしようなどとは考えていない。もし、口を割らなければ基地まで連れて行つて辛抱強く口を割るのを待つだけだ。

ところがである。

「わかったよ。そうだよ、私だよ。」

予想に反して、あっさりと認めた。表情には出さなかつたが、豊は内心少しばかり驚いた。

「随分と簡単に認めたな。まあ良いや。それで、どうして村人や翼人を襲つたんだ?何かを奪つた訳でもない。またワザと急所を外していたね。あまりにもおかしい点が多い。とくに翼人は君にとっては同胞だらう?」

すると、ケイトは表情をせりて険しくした。

「同胞か・・・普通ならそうかも知れないけど私からしてみればあんな連中同胞じゃないね。」

その穢やかでない言葉に、豊は冷静を保つたが、彼の後ろに立つトレバーと、ベッドの側に座るテファは怪訝な表情を浮かべた。

「それは、どうこうことだい？」

「アタシは翼人の集落から追い出されたのさ。母さんと一緒に。」

その言葉に、テファとトレバーは驚きを隠せなかつた。

「えー？」

「なー？」

「良かつたら、もう少し詳しく聞かせてくれないかな？まあ強制はしないけどね。」

テファとトレバーが驚く中、豊は表情を崩さずさらに彼女から情報を探しきだそうと試みる。もつとも、かなり暗い話であることは直ぐにわかつたから、無理に言わせる気もなかつた。

だがケイトは、そのまま続けた。

「アタシの父親は人間だったのさ。もつとも、アタシが生まれる前に病氣で死んじつたからどんな人かはわからないけど。母さんは生まれたばかりのアタシを連れて元いた集落に戻つた。けど、どこの誰かもわからない人間の男との間に子供を作つたことで、母さんは散々嫌がらせを受けた。そして、最後にはアタシ共々集落を追われたのさ。」

ケイトの言葉に、テファアが表情を暗くした。彼女とケイトの間には、境遇が繋がる部分が多くあるからだ。

「それで？お母さんは？」

「2年前に死んだ。一人でがんばってアタシを育てたけど、最後にはボロボロになつて・・・その後アタシは一人で生きてきた。アルビオン内を点々としながら、母さんが教えてくれた先住魔法と、弓矢を使ってね。」

母親のことを思い出したせいで、彼女の顔は悲しみの色を帯びていた。そしてテファアは同情するような視線を彼女に注いでいた。

だが豊には感傷に浸っている余裕はない。そのまま話を続けた。

「それじゃあ、やつぱり君が姿を消していたのは先住魔法の一種だつたのか？」

「そう。母さんが言つには、母さんの一族にだけ伝わる秘伝の技だつたつて聞いた。」

「なるほどね。そして君はその技を翼人への復讐に使つたと。村人を狙つたのは、家族の姿を見ての嫉妬つて所か？」

豊の言葉に、ケイトが頷いた。そしてトレバーが声を上げた。

「あー？それで村人の被害者が親子連ればかりだったんですか。なるほど。けど、そうなるとわからないのはどうしてわざわざ急所を外したんでしょうね？普通恨んでいる相手なら容赦しないと思うんですけど。」

トレバーが納得すると同時に、次なる疑問を口にした。その答えについては、豊が言った。

「それは、おそらくこの娘が完璧な復讐者に成りきれなかつたからだろうな。翼人や幸せそうな家族の姿を見るのは我慢ならないが、かといって良心の呵責から殺すことは躊躇われる。だからワザと急所を外した。そうだろ?」

すると、彼女はまたも頷いた。

「けど、まあ今回はそれで色々助かつた。村人にも翼人にも死者は出なかつたし、俺たちも君を殺さずに済んだ。もし君が大量殺人を行つていたなら、こつちも実弾を容赦なく使って、最悪森狩りでもしなきやいけなかつたからね。」

豊はそう言つと、小さく笑つた。

「話はそれだけさ。それで、あんたたちはアタシをどうする気だい？」

「そうだな。今回は君は確かに誰も殺さなかつたし、何も奪わなかつた。ケガ人も既に皆回復している。しかし君が多くの人を傷つけ、恐怖を与えたのも事実だ。それ相応の罰を受けてもらうのが本来は筋だらうね。死刑ということは無いだらうけど、重罰は間違いないね。」

彼女が今回したことを考えれば、極刑は免れないだらう。すると、テファアが立ち上がつた。

「ねえ豊、何とかならないの？確かにケイトちゃんがしたことは許されることじやないけど、いくらなんでも可哀相よ。」

自分が彼女によつて傷つけられたにも関わらず、テファアはケイトを庇おうとする。

「テファア、君は彼女によつてケガをしたんだよ？それでも彼女を庇うのか？」

「確かにそうかもしないけど。私は別に気にしないわ。ケガならもう治つたし。それに、ケイトちゃんの気持ちも分からなくはないから。」

さりに、トレバーも彼女を擁護した。

「そうですよ隊長。それに最終的に被害は最小限に留まつたんですから。」

だが、豊は冷静に言った。

「しかし、彼女が犯した罪も直視しなきやいけない。犯罪者を同情で許していたら、誰も裁けないよ。」

「「そんな・・・」

2人が失望の色を浮かべる中、豊は続けて言った。

「ケイトさんのした罪は重い。本来なら、罰を受けて当然だ。」

豊は本来という所を強調した。すると、ケイトを含めた3人が、

今度は怪訝な表情をした。

「しかしながら、ケイトさんはハーフかもしれないがどうみても翼人だ。つまり、アルビオンの法律では裁かれる対象にはない。だから、その身柄については俺に一任されることになる。」

「えー？」

「なー？」

「じゃあー！」

テファとトレバーは表情を明るくした。

豊は笑顔を浮かべた。

「ケイトさん。俺たちの所に来ないかな？義勇軍で働くか働かないかは君の自由だが、俺たちの総司令官は領主をしていて、屋敷の半分を君のような身寄りのない子供たちに解放している。不自由はあると思うけど、衣食住は保証される。場合によつては、市民権も獲得できる。どうかな？」

豊に言葉に、ケイトは少しばかり考え込んだ。そして。

その日、豊は基地の宿舎の前に、今日から新兵を加える分隊の兵士たちを整列させていた。その分隊はあの日任務に従事した分隊だつた。

「皆聞いてくれ！今日から新しい仲間が加わるぞ。女で翼人だが、だからといって変な気を起こすなよ。それから差別も絶対にするなよ。言つておくが彼女は射撃テストでは最優秀で、先住魔法を使えるからな。」

その言葉にも、隊員たちは落ち着いていた。いや、むしろ何人は苦笑していた。皆彼女のことをよく知っているからだった。

「よつし、それじゃあ紹介しよう。ケイト兵長だ。」

彼に呼ばれて前に出たのは、キュロットスカートの第一種軍装に身を纏つた、翼人の少女だった。

彼女は隊員たちに向かつてピシッと敬礼した。

「ケイトです。本日からお世話になります。」

隊員たちも一斉に答礼した。

その日の黄昏。豊はテファアと歩きながら話していた。

「ケイトちゃん、今日入隊したのね。」

「ああ、彼女はとても優秀だよ。あの時村人たちを宥めて連れてきて本当に良かった。それにこの領地での市民権も獲得できだし。オ吉さんとマチルダさんは本当に感謝だよ。けどまさか、義勇軍に入ってくれるとは思わなかつた。」

「それだけ豊に感謝しているのよ。」

あの後、ケイトは豊の提案にしたがつて彼らと共にホープの基地までやつて來た。豊としては彼女を無理に義勇軍に入れるつもりはなかつたが、彼女は彼に恩を感じていたのか、そのまま志願兵の道を進んだ。

彼女の弓矢で発揮された腕は銃でも劣ることなく、射撃テストでは最優秀の成績となり、その結果兵長としての任官となつた。

「なんにしろ、彼女をこの道に進ませた以上。俺はしつかり上官として、彼女のことを見守らなきゃいけないな。」

「がんばってね。」

「ああ。俺は絶対に部下を・・・仲間を失うつもりはない。もちろん、テファも含めてね。」

豊はそう言ってウインクした。そしてその言葉に、テファは頬を赤くした。

後のハルケギニア戦役で、ケイトやテファと言った亜人やエルフとのハーフが活躍することによって、ハルケギニアに住む先住民族や亜人に関する保護法が制定されることとなるが、この時点でそれを知る者はいない。

治安維持任務 10（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

50話で切りが良いので、外伝は次から第2部に移したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4507e/>

ゼロ戦才人 外伝 第1部

2010年10月9日00時48分発行